

長浜 2 遺跡

～道道奥尻島線局部改良工事に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書～

平成7年度
奥尻町教育委員会

長浜 2 遺跡

～道道奥尻島線局部改良工事に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書～



平成7年度
奥尻町教育委員会

例 言

- 1 本書は、北海道奥尻郡奥尻町字松江263番地に所在する長浜2遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、函館土木現業所から奥尻町が委託を受け、奥尻町教育委員会が事業主体となり実施した。発掘担当者は、村上義直、乾哲也である。
- 3 調査は、道道奥尻島線局部改良工事に伴う埋蔵文化財保護のための緊急調査で、平成7年10月2日から同年11月13日にかけて実施した。また、整理作業および本書の作成作業は平成7年10月2日から平成8年3月21日にかけて行なった。
- 4 発掘調査面積は208㎡である。
- 5 本書の執筆・作成・編集は、村上義直、乾哲也が行なった。文責は文末に記載した。
- 6 土器、石器の実測図・トレースは土器を乾哲也、拓本・断面のトレースを天内千秋、工藤竹美、近藤美佐子、石器を村上義直、柳谷とし子、大橋敏子、小山ひろ子、松浦茂樹が行なった。
- 7 写真撮影および焼き付けは村上義直・乾哲也が行なった。
- 8 発掘調査および整理作業には次の方々が従事した。

発掘現場作業員

天内千秋、稲垣友光、大橋敏子、菊地みさ子、工藤竹美、小山ひろ子、近藤美佐子
佐々木俊久、手塚芳子、中島定男、西本裕子、古川ミツ、増田信作、松田逸松、三浦京子
柳谷啓子、柳谷とし子

整理作業員

天内千秋、大橋敏子、工藤竹美、小山ひろ子、近藤美佐子、柳谷とし子

- 9 発掘調査および本書作成にあたり、以下の機関および方々の御協力、御指導、御助言を賜った。御芳名を記し、感謝申し上げる次第である。(順不同、敬称略)
函館土木現業所奥尻出張所、北海道教育庁生涯学習部文化課調査班、北海道埋蔵文化財センター、千歳市埋蔵文化財センター、苫小牧市埋蔵文化財調査センター、㈱伊藤建設、㈱協友測量設計
赤石慎三、阿部千春、出穂雅美、宇田友子、遠藤昭浩、大泉博嗣、大坂拓、大谷敏三、大沼忠春
大橋毅、長田佳宏、萩野幸男、廣澤好博、工藤肇、熊谷仁志、小松信明、笹野武則、佐藤一夫
佐藤智雄、末光正卓、鈴木耕榮、鈴木信、高橋理、田口祥隆、田才雅彦、谷口知子、積市幸生
田村俊之、鶴丸俊明、寺崎康史、豊田良宏、豊原照司、中田裕香、長沼孝、仲野徹、二階堂啓也
西脇対名夫、野村崇、畑宏明、兵藤千秋、福田裕二、藤島一巳、藤田巧、藤原秀樹、古屋敷則雄
松浦茂樹、松崎水穂、松田淳子、宮宏明、宮次靖夫、宗像公司、森広樹、渡辺俊一

凡 例

- 1 図中における遺物の表示は次のとおりである。
○：土器、△：剝片石器、□：礫石器 ●、▲、■は床面出土を表す。
- 2 実測図の縮尺は原則として次のとおりである。その他はスケールを参照されたい。
遺構・セクション図：1/40、復元土器・礫石器：1/4、土器拓影・礫石器：1/3、
剝片石器：1/2

本文目次

例言

凡例

I 調査の概要

1. 遺跡の位置	1
2. 調査の経緯	2
3. 調査の方法	3
(1) 発掘区の設定	3
(2) 遺物の取り上げ方法	3
(3) 遺構・遺物の分類	4
4. 発掘区の地形と層序	4
(1) 地形	4
(2) 層序	4

II 遺構の調査

1. 住居址	9
(1) H-1	9
(2) H-2	11
2. 土 塙	27
(1) P-1	27
(2) P-2	30

III 包含層の調査

1. 0~1区の調査	31
(1) 調査の概要	31
(2) 出土遺物	32
(土器)	32
(石器)	37
2. 2~4区の調査	42
(1) 調査の概要	42
(2) 出土遺物	43
(土器)	43
(石器)	48
3. 5~6区の調査	52
(1) 調査の概要	52
(2) 出土遺物	52
(土器)	52
(石器)	53
4. 7~8区の調査	56
(1) 調査の概要	56
(2) 遺物の出土状態	56

(3) 出土遺物	59
(土器)	59
(石器)	60
IV 考 察	
1. 遺構および掘上げ土について	64
2. B-1区の集中出土土器について	65
3. 遺物から	66
(1) 土器の特徴と序列	66
1) H-2周辺出土の土器	66
2) その他包含層出土の土器	67
3) 長浜2遺跡出土の土器における大木系的様相	68
(2) 石器	69
おわりに	71
引用・参考文献	72
遺構出土掲載石器一覧表	74
包含層出土掲載石器一覧表	75
写真図版	

挿 図 目 次

図I-1 遺跡の位置	1
図I-2 遺跡周辺の地形(1000分の1)	2
図I-3 発掘区設定図	3
図I-4 小グリッド設定図	3
図I-5 包含層堆積図実測ライン	6
図I-6 包含層堆積図(1)	6
図I-7 包含層堆積図(2)	7
図I-8 包含層堆積図(3)	8
図II-1 長浜2遺跡遺構配置図	9
図II-2 H-1	9
図II-3 H-1出土遺物	10
図II-4 H-2 覆土2b層上面集中出土土器	11
図II-5 H-2平面図	11
図II-6 H-2堆積図	12
図II-7 H-2遺物分布図	13
図II-8 H-2 HP堆積図	14
図II-9 H-2 HF堆積図	14
図II-10 H-2 HP-1	15

図II-11	H-2出土土器(1)	15
図II-12	H-2出土土器(2)	17
図II-13	H-2出土土器(3)	18
図II-14	H-2出土の剥片石器(1)	19
図II-15	H-2出土の剥片石器(2)	20
図II-16	H-2出土の剥片石器(3)	21
図II-17	H-2出土の剥片石器(4)	22
図II-18	H-2出土の剥片石器(5)	23
図II-19	H-2出土の礫石器(1)	24
図II-20	H-2出土の礫石器(2)	25
図II-21	H-2出土の礫石器(3)	26
図II-22	H-2出土の青竜刀形石器と推定復元図	27
図II-23	P-1・P-2平面図と礫の分布	28
図II-24	P-1・P-2遺物分布図	28
図II-25	P-1堆積図	28
図II-26	P-1覆土5層上面遺物出土状況	28
図II-27	P-1覆土5層出土完形土器出土状況	28
図II-28	P-1出土遺物	29
図II-29	P-2堆積図	30
図II-30	P-2出土遺物	30
図III-1	B-1区遺物出土状況	31
図III-2	B-1区堆積図実測ラインと堆積図	32
図III-3	0~1区出土の土器(1)	33
図III-4	0~1区出土の土器(2)	34
図III-5	0~1区出土の土器(3)	36
図III-6	0~1区出土の石器(1)	38
図III-7	0~1区出土の石器(2)	39
図III-8	0~1区出土の石器(3)	40
図III-9	0~1区出土の石器(4)	41
図III-10	B-3区堆積図等実測ラインと堆積図	42
図III-11	B-3区遺物出土状況	43
図III-12	B-3区集中出土土器層位関係図	43
図III-13	2~4区出土の土器(1)	44
図III-14	2~4区出土の土器(2)	46
図III-15	2~4区出土の石器(1)	49
図III-16	2~4区出土の石器(2)	50
図III-17	2~4区出土の石器(3)	51
図III-18	5~6区出土の土器	52
図III-19	5~6区出土の石器(1)	54

図Ⅲ-20	5～6区出土の石器(2)	55
図Ⅲ-21	7～8区	56
図Ⅲ-22	9ラインセクション図	56
図Ⅲ-23	7～8区遺物出土状況	57
図Ⅲ-24	7～8区出土の土器(1)	58
図Ⅲ-25	7～8区出土の土器(2)	59
図Ⅲ-26	7～8区出土の石器(1)	61
図Ⅲ-27	7～8区出土の石器(2)	62
図Ⅲ-28	7～8区出土の石器(3)	63

図版目次

図版 1

1. 発掘区近景(南から)
2. 調査状況(南から)

図版 2

1. H-1セクション
2. H-1完掘
3. H-1出土遺物
4. H-2調査状況

図版 3

1. H-2土層堆積状況(E-F)
2. HP-1土器片出土状況
3. 覆土2b層集中出土土器検出状況
4. HP-24堆積状況
5. HP-7礫出土状況

図版 4

1. H-2HF-6・7・8
2. H-2完掘

図版 5

1. H-2出土土器(1～27)

図版 6

1. H-2出土土器(28～33)
2. H-2出土の石鏃(34～55)
3. H-2出土の石槍(56～63)
4. H-2出土の石錐(64～66)
5. H-2出土のスクレイパー(67～78)

図版 7

1. H-2出土のR・フレイク(79～86)
2. H-2出土のU・フレイク・コア(87～101)
3. H-2出土のすり石・敲石(102～104)

図版 8

1. H-2出土の石皿・台石(105～107)

図版 9

1. H-2出土の石皿・台石・青竜刀形石器(108～112)

図版 10

1. P-1堆積状況3. P-2出土遺物
2. P-1完形土器出土状況
3. P-1出土遺物

図版 11

1. P-2礫群出土状況
2. P-2堆積状況
3. P-2出土遺物

図版 12

1. B-1区遺物出土状況
2. B-1区集中出土土器
3. B-1区集中出土土器(図Ⅲ-4-5)
4. B-1区石棒出土状況

図版 13

1. B-1区堆積状況(A-B,溝状落ち込み付近)
2. 0～1区出土の土器(1～3)

図版14

1. 0～1区出土の土器(4～14)

図版15

1. 0～1区出土の土器(15～34)

図版16

1. 0～1区出土の石器(1～18)

図版17

1. 0～1区出土の石器(19～24)

図版18

1. B-2・3区調査状況
2. B-3区掘り上げ土堆積状況(A-B)

図版19

1. B-3区遺物出土状況
2. B-3・4区掘り上げ土下遺物出土状況(図III-13-1)
3. B-3区集中出土土器間堆積状況(C-D)
4. B-3区掘り上げ土下遺物出土状況(図III-13-7)
5. B-3区III層中位集中出土土器検出状況(図III-13-2)

図版20

1. 2～4区出土の土器(1～14)

図版21

1. 2～4区出土の土器(15～45)

図版22

1. 2～4区出土の石器(1～29)

図版23

1. 2～4区出土の石器(30～38)

図版24

1. 5～6区出土の土器(1～7)
2. 5～6区出土の石器(1～20)

図版25

1. 5～6区出土の石器(21～26)

図版26

1. 7～8区の調査状況
2. C-8区集中出土土器
3. A-7～B-7フレイク・チップ集中出土状況

図版27

1. C-8～C-9セクション
2. 掘り上げ土堆積状況(B-ライン)
3. 7～8区出土の土器(1～21)

図版28

1. 7～8区出土の石器(1～32)

図版29

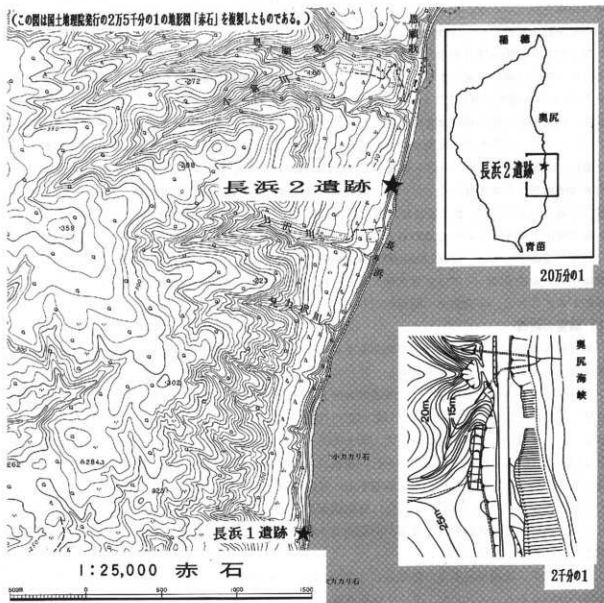
1. 7～8区出土の石器(33～41)

I 調査の概要

1. 遺跡の位置と周辺の環境

奥尻島は渡島半島の西方、北海道本島より最短で約18km、江差町からは約61kmの日本海上に位置する人口約4500人の島である。大きさは東西に9km、南北に27km、周囲64km、面積約144km²の広さで、島の中央部やや西よりに最高点、神威山（標高584.5m）がある。島の地形は、海成段丘が顕著に発達し、数面の段丘面が確認されている。島内の遺跡の多くは寺屋敷面（標高約18~49m）に存在し、本遺跡もこの段丘面の縁辺部に立地している。島内には小河川（小沢）が多く、また、段丘縁辺部からはいたる所で湧水がみられ、これらの環境が遺跡の立地に大きな条件となっていると考えられる。

本遺跡は、島の東海岸、奥尻本町と青苗地区のほぼ中間に位置し、海岸から西へ約45mほどの標高21m~25mの海岸段丘の縁辺部に立地している。既に現道敷設によって遺跡の一部は削り取られてい



図I-1 遺跡の位置

るが、本来は北東へ張り出した舌状の段丘の基部から先端部にかけて遺跡が形成されていたものと思われる。

東側は奥尻海峡に面し、晴天時には乙部、大成などの対岸が眺望できる。遺跡の北側は1.75km先の山ヶ岬まで見えるが、南側は約200mまでの無名岬までしか視界はきかない。付近の海岸は地元の人が「胡麻石」と称する花崗閃緑岩の拳大～人頭大の円礫で形成されているが、10m沖合の水深約2mほどからは砂地になっており、250m沖合の水深10mの帯には海岸と並行する

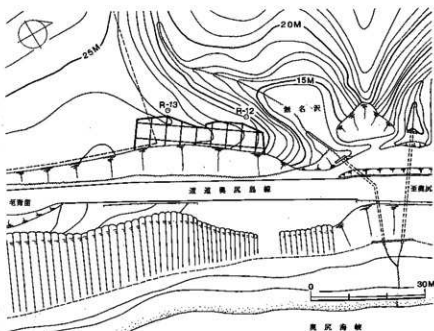


図1-2 遺跡周辺の地形(1000分の1)

長さ800mの岩礁帯が発達している。また、南方約200mの所には海へ突出した小さな岬状の岩礁帯がある。周囲の海岸部の環境は変化に富んでおり、沖合はヒラメの良好な漁場で、岩礁帯ではウニ、アワビ・ヒメエゾボラなどの貝類が生息している。北西には常に清流をもつ流路幅0.5～1.0mの無名川が流れ、比高差5m前後の小沢を形成している。周囲にはブナを主体とする落葉広葉樹林が広がるが、南側は植林されたスギ林となっている。調査前の発掘区は1m以上の笹藪にスギ、ブナなどの小木が疎らに見られるだけで、表土除去は困難なくできた。所在地は字松江263番地であるが、この付近一帯を長浜地区と称することから遺跡名を長浜2遺跡とした。

付近の遺跡としては、南方2.4kmの標高20m前後の段丘上に長浜1遺跡が立地する。時期は、縄文中期後半の大安在B式・ノグップⅡ式期と考えられ、酷似した立地環境や採集遺物の量から住居址等の存在が考えられる。本遺跡との関連性において注目したい。(乾)

2. 調査の経緯

奥尻町教育委員会は、長浜地区で数年前から行なわれている道道奥尻島線局部改良工事の区域内に埋蔵文化財包蔵地があることを発見し、ただちにこれを函館土木現業所に通知した。

これを受け、函館土木現業所は北海道教育庁との協議に入った。協議の中で函館土木現業所は道路改良予定地は急勾配であり、早急な対応が求められている所であることから遺跡の現状保存は困難であると、埋蔵文化財包蔵地において工事を実施したい意向を示した。これを受け、北海道教育委員会は埋蔵文化財包蔵地範囲確認調査を行い発掘調査必要範囲を決定し、函館土木現業所に対して、奥尻町教育委員会と協議したうえで工事着手前に発掘調査を行なうように回答した。

函館土木現業所は奥尻町教育委員会に発掘調査を委託するとともに発掘調査に関する諸計画を協議した。これにより奥尻町教育委員会が発掘調査を実施すること、10月2日から10月30日までを調査期間とすること等が決まった。

調査は先ず、範囲確認調査の際発見した2つの住居址を中心に行なった。北側の住居址をH-1、南側の住居址をH-2とした。H-1は残存物が僅かだったため、間もなく調査を終了したが、H-2は切り合い等の可能性があるため時間をかけて慎重に調査が行なわれた。その後、B-1区にて土

器の集中出土が検出され、遺物の実測・取り上げ等にかかなりの時間を費やすこととなった。また、7～8区では遺構の覆土様の堆積がみられ、住居址を想定し調査を行なった。その後、この区はH-2の掘上げ土の上に黒色土が厚く堆積した所であることが判明した。

調査は予想を上回る遺物の出土量と例年にない悪天候のため予定より2週間ほど遅れての終了を余儀なくされた。

(村上義直)

3 調査の方法

(1) 発掘区の設定

発掘区の設定については、道路用地境界杭を基準に、グリッドは4m×4mにした。

まず、測量基点をR-12とし、R-12とR-11を結ぶ直線を基軸線とした。そして、基軸線に対して平行に並ぶ直線をアルファベットで表し(基軸線をDラインとし、海側へ向かってC、B、Aの順)、基軸線から垂直にのびる直線をアラビア数字で表した(北東から南西に向かって1、2、3の順)。各グリッドの名称はグリッドの中央からみて東角の杭をポイントにして表した。なお、ポイントが発掘区外になる所(B-3、B-4、B-5)は杭をCラインから3mの位置に設けた。(本書の中でこの杭を用いる場合はグリッド名の前に※を表示した。)

各基準杭の座標値は以下のとおりである。

R-11 : X = -208712.943

Y = -60731.864

R-12 : X = -208731.751

Y = -60741.144

(平面直角座標 第Ⅰ系)

(2) 遺物の取り上げ方法

包含層から出土した遺物は、一括出土遺物、集中出土遺物などの特殊な例を除き、小グリッドで層ごと一括して取り上げた。小グリッドは4m×4mのグリッドを1m×1mの正方形で16分割したものである。先と同様に、基軸線に平行して並ぶ直線をアルファベットの小文字で(北東側から基軸線に向かってa、b、c、dの順)、基軸線から垂直にのびる直線をアラビア数字で表し(北東から南西に向かって1、2、3、4の順)、小グリッドの名称は、グリッドの中央からみて東角をポイントにして表した。

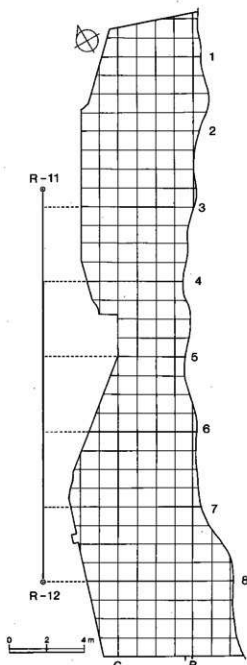
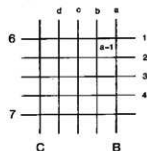


図1-3 発掘区設定図

図1-4 小グリッド設定図



(村上義直)

(3) 遺構・遺物の分類

遺構 住居址と土壌があり、住居址はH-1、H-2、土壌はP-1、P-2とした。

遺物 土器は縄文時代中期のものと同期のものがあり2群に大別した。

I群 中期後葉の土器。大安在B式、ノダツII式に類するもの。

II群 後期前葉の入江式に類するもの。

石器は剥片石器と礫石器があり、剥片石器と密接に関係するものとしてコアがある。次のような器種に分類した。

剥片石器：石鎌、石槍、石錐、スクレイパー、R・フレイク、U・フレイク

礫石器：石斧、砥石、すり石、敲石、石皿・台石、青竜刀形石器、石棒 (村上義直)

4. 発掘区の地形と層序

(1) 地形

発掘区は北東-南西方向に長さ約34m、北西-南東の幅は平均6m程度で長方形に近い。面積は、208㎡と狭い発掘区であるが、C-7杭付近の最高点(標高25m)と北東側のB-1杭付近の最低点(標高21m)とでは約4mの高低差がある。B-3・4区は約1.8mの高低差で最大仰角は約25°を測る。B-2区では緩斜面を呈し、B-1区で約60cmほど一段下がって、南北に約5.0m、東西に約3.2mの方形を呈した標高21m前後のテラス状の地形になっている。最高点より南東側では緩斜面をなし、A・B-8区で標高23.8m前後の平坦面が広がる。

(2) 層序

海成段丘の基盤は段丘縁辺部に露出している花崗閃緑岩で、その上に段丘堆積物の青灰色～灰白色のシルト質土を主体とする混礫土層が厚く堆積し、一部に砂層や化石化していない樹木などの有機質が挟在している。この上には約20～40cmの明黄褐色ローム質土が堆積し、H-2はこのローム質土を掘り込み、段丘堆積物である礫を含む灰白色シルト質土上面を床面としている。

B-0・1区のテラス状の地形やA・B-8区、H-2の窪地などの低い部分では灰白色の渡島大島a火山灰(1741年降下)が他より厚く堆積し、さらにH-2の窪地では2～5cmの黒色土を間層において下層には白頭山-苫小牧火山灰と思われる褐灰色の火山灰が最大10cmの層厚で堆積している。また、これらの低地では水成堆積と思われる砂質に富む黒色土がみられ、その他のグリッドでは締まりが弱く、粘性が強く、植物根を多く含む腐植土が堆積している。B-3・4区の斜面やB-5区の最高点付近では包含層の堆積は薄い。B-2・B-3区では黒褐色土中から下部にかけて、基盤層中の角礫、亜角礫が多数散在しているなど、包含層の堆積は地形と共に変化が著しく、また遺構による二次堆積土などの存在により各地区毎に変化に富む複雑な層序であった。

基本層序

0 層 盛 り 土 0～20cm

調査区南半分に堆積し、包含層をほとんど削平していないことから、隣接するスギ林の植林などの際に盛り土されているようである。0層からは近現代のものと思われる貝殻が断片的に出土している。

I 層 表 土 層 10cm

重機、人力により除去した。平均して10cm程度の深さで、笹根が一面に這っており、その深さを表土層とした。

- a 層 灰白色火山灰 (10YR 4/4) 0~15cm
寛保元年の渡島大噴火 (Os-a, 1741年降下) によるもの。火山ガラスに富み、粘性はない。同様な火山灰は上ノ国町、乙部町などでも確認されており、樺山管内の日本海沿岸部一帯に見られるようである。
- II 層 黒褐色土 (10YR 3/2) 0~10cm
a層とb層の間層。黒色土にa層ないしはb層が多量に含まれている。
- b 層 褐灰色火山灰 (10YR 6/12) 0~10cm
白頭山(苫小牧)火山灰(B-Tm, AD950年頃降下)と思われる。上下の層とは漸移的に堆積している。青苗地区ではOs-aの下に3~5cmの黒色土の間層(本遺跡II層に対比)を挟んで暗褐色~暗赤褐色を呈して最大約10cmの層厚で堆積している。本遺跡では色調こそ異なるが、青苗地区のものと比較して堆積状況、層位などからB-Tmと思われる。Os-aと合わせて、現在、乙部町教育委員会の協力のもと北海道教育大学函館分校助教 廣澤好博氏に分析鑑定を依頼している。
- III a 層 黒色土 (10YR 2/1) 0~30cm
腐植土層で締まりが弱く、粘性は強い。遺物包含層で主に下層から出土する。a・bの火山灰が堆積していない斜面などは表土から一連のものとなる。
- III b 層 黒色~黒褐色砂質土層 (10YR 2/1~2/2) 0~30cm
砂粒を多量に含む。締まり、粘性ともにある。水成堆積によるものと思われ、B-0・1区、H-2の窪地、A・B-7・8区など周囲より低い場所に発達している。B-2区ではIII a層の下層に堆積していた。
- IV a 層 黒褐色~暗褐色土層 (10YR 2/3~3/3) 0~15cm
III層にローム質土を少量含み、締まり、粘性はある。主体となる遺物包含層。
- IV b 層 黒褐色~暗褐色砂質土層 (7.5YR 2/3 ~ 3/3) 0~10cm
III b層下に堆積する。赤味の強いローム質土を主体に砂粒を多く含む。締まりは強く、粘性もある。遺物を僅かに含む。
- V 層 褐色土層 (10YR 4/4) 0~10cm
ローム質土主体に黒色土を少量含む。締まり、粘性は強い。IV層とVI・VII層の漸移層でA・B-7・8区では薄い。遺物は含まれない。
- VI a 層 明黄褐色ローム質土層 (10YR 6/6~6/8) 0~20cm以上
基盤層。B-0・1区、A・B-7・8区での堆積はみられなかった。締まりがあり、粘性は強い。所々に亜角礫を層状に含む。
- VI b 層 明黄褐色粘土質土層 (10YR 5/3~5/4)
締まりがあり、粘性は非常に強い。A・B-7・8区で、III b層の下に薄いIVないしはV層を挟んで堆積する。粘土質のため、地中に浸透した雨水は、この層の上面を流れ、C-9杭付近では湧水地点もみられた。
- VII 層 灰黄シルト質土 (2.5YR 7/2)
締まりがあり、粘性は強い。亜角礫を多く含む。A・B-7・8区ではみられない。V層、VI a層下にみられる。

(乾)

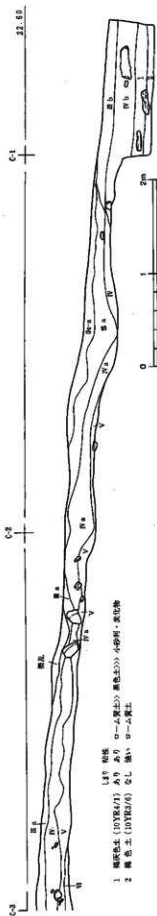
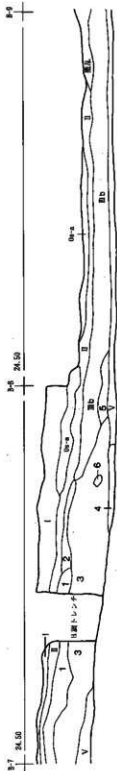
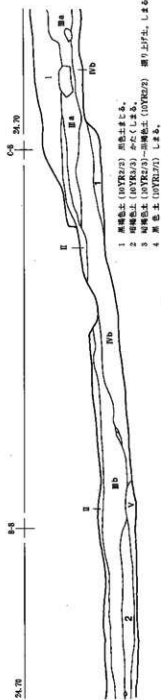
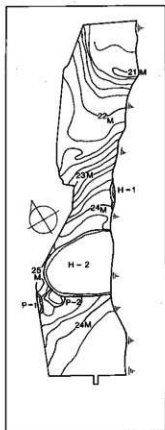


図 I - 7 包合層堆積図(2)

II 遺構の調査

図II-1 長浜2遺跡遺構配置図



1. 住居址

(1) H-1 位置: B-4区 形状: 不明

規模: (現存部分) 北東-南西 2.2m

北西-南東 0.4m

特徴: 試掘調査の際、現道カッティングにて褐色土中に黒褐色土の落ち込みを確認、規模、覆土等から住居址と判断した。覆土の直上に掘り上げ土と思われる土が堆積していて、これが住居址外にも広がることから、掘り込み面は掘り上げ土の直下(V層)と考えられる。

覆土中には炭化物が多く含まれ、壁際に顕著である。壁の立ち上がりは、北側は不明瞭であるが南側は約45°、西側は約60°で立ち上がっている。床は僅かに確認できた。遺物は覆土からのみ10点出土した。なお、住居址の南側で浅い窪み(遺物なし)が検出されたが、覆土1の堆積後のものと思われる。

(村上義直)

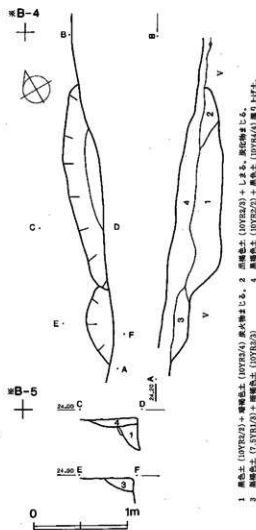
遺構には住居址と土壇がある。住居址はH-1とH-2、土壇はP-1とP-2である。

H-1はB-4グリッド内に位置し、住居址の殆どが既に破壊されている。

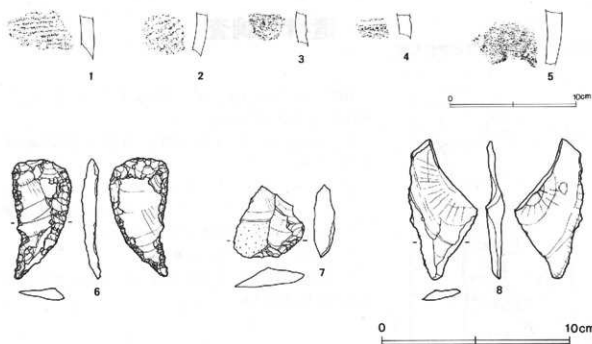
H-2はB-6グリッドを中心にB-5、A-5、C-5、A-6、C-6、B-7、C-7グリッドにわたる範囲に位置している。H-2も既に約半分が破壊されている。

P-1はC-7グリッドに位置する。

P-2はC-7グリッドを中心にC-6、B-8グリッドにわたる範囲に位置する。



図II-2 H-1



出土遺物 (図II-3 1~9)

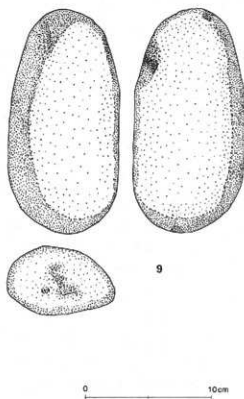
(土器)

1は斜行縄文の施された土器で、内面に横ナデ調整が施されている。また表面には炭化物の付着がみられる。2は粗い縄文の施された土器で、内面は黒色で光沢がある。3は頸部付近と思われ、剝落した貼付帯の下にLRの斜行縄文が施されている。4は竹管によって施文された1条の沈線の下に縄文が施されている。H-2出土の土器と同一個体の可能性がある。5は表面が風化している厚手の土器で、文様はみられない。また、一部表面が剝落している。1~5の胎土には砂粒・小礫が多く含まれている。

(石器)

6は両面調整のスクレイパーで、背面右側縁には急角度の刃部が形成され、主剝離面の周縁にも細部調整が施されている。チャート製である。7は頁岩製のR・フレイクで、背面の一部に細部調整が施されている。8は安山岩製のU・フレイクで、背面左側縁に刃こぼれがみられる。9は打欠きのみられる礫で、壁に貼りつくような状態で出土した。敲石の類かと思われる。石質は花崗閃緑岩である。

(村上義直)



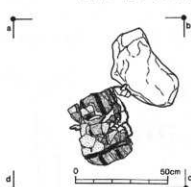
図II-3 H-1出土遺物

(2) H-2

位置：A-5・6区 B-5・6・7区 C-6・7区 形状：長楕円形

規模：(現存部分)長径 7.1m 短径 6.0m 最大深さ 0.52m

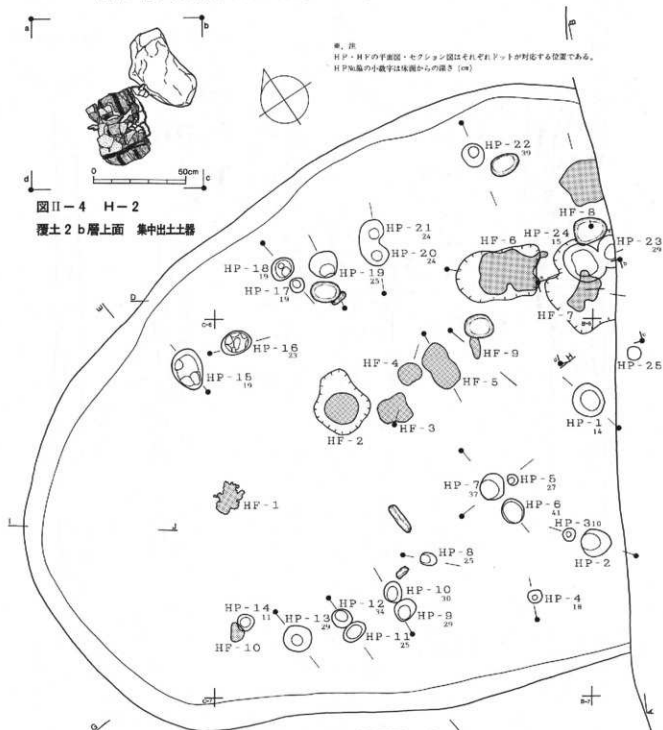
確認：試掘調査の際に現道カッティングで確認。B-6 杭を中心にOs-a 及び黒色土III層の落ち込みを確認した。また、C-6 区で別の黒色土の落ち込みを確認し、切り合いを想定し、これを3号住居として、こちらから調査を進めた。しかし、堆積状況に明瞭な切り合い関係が認められず、炬や柱穴の配列などから最終的に当初からのH-2のみとなった。



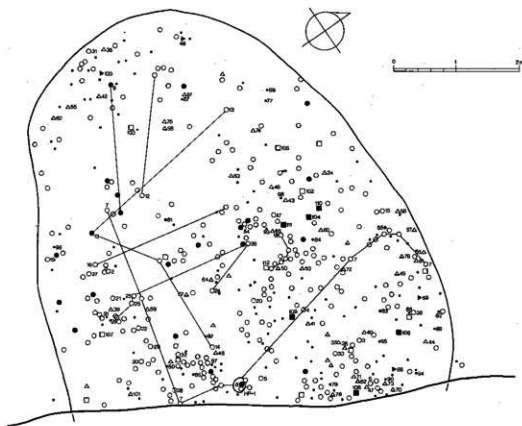
図II-4 H-2

覆土2b層上面 集中出土土器

●、○ HP
HP・HFの平面図・セクション図はそれぞれドットが対応する位置である。
HPの数字は断面からの高さ (cm)



図II-5 H-2平面図



図II-7 H-2遺物分布図

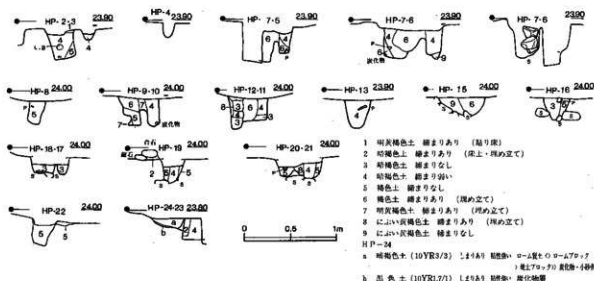
壁の状態：北側と西側は基盤の緩い傾斜を切り崩すかたちで急峻に立ち上がるが、南側は壁も低く、立ち上がりが不明瞭であった。最終的に土の締まり具合、遺物の出土などから判断した。

床の状態：竪穴構築時に出たローム質土やシルト質土を床土として約3～5cm程度入れ、ほぼ水平に形成している（堆積図A-Bの6a・10層、E-F・G-Hの7・8層）。西側の床面は基盤の明黄褐色のローム質土が残り、緩く傾斜をなす（堆積図I-J-3層）。床面はしまりがあり、覆土との区別ができた。

堆積状況：掘り込み面は漸移層V層上面で、南側は漸移層と竪穴覆土の判別が難しかったが、締まりの度合いなどから判断した。堆積図A-Bの竪穴中央部以外ではローム質土を主体とする暗褐色土～褐色土が厚く堆積している（2～6層）。これらは、大きく2つに分けられる。上層の2～4層は締まりがなく、竪穴が埋没していく過程の流込み土と考えられる。これに対し、下層の褐色土（5～6層）は上層のものとは比べ締まりがあり、炭化物もより多く含み単に流れ込みの三角堆積を示すものとも考えにくい。竪穴中央部の包含層は砂質に富む黒色土III層と暗褐色土IV層が堆積し、住居地の窪地に水が溜まる状況にあったと考えられる。

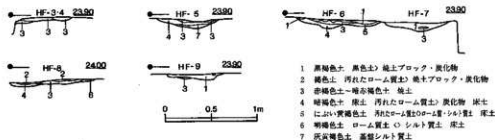
柱 穴：23基検出された。焼土と同様に竪穴の長軸方向、両壁よりにほぼ直線状に配列されている。HP-6・7、HP-9・10、HP-11・12、HP-13・14、HP-17・18、HP-20・21は長軸方向に直行するかたちで2個1対に配されている。うち、HP-7、HP-10、HP-12では開口に床土が貼られており、これらの柱穴は同一時期のものではないようである。柱は、垂直のものが多く僅かに外へ傾くものもある。柱穴の覆土はロームブロックを含み、堀方を埋め戻したと思われる堅く締まった土と柱材部分にあたる締まりのない

褐色土とを区別することができた。HP-7では堅穴構築時に掘り上げられたと考えられる基盤層中の亜角礫を柱穴内の脇、埋め戻しの覆土中に3個積み重ね柱材の固定に供したと思われる出土状態が認められた。また、HP-18の墳底からは柱材の受けと思われる偏平の礫が出土している。なお、HP-25は現道カッチングの斜面で確認している。



図II-8 H-2 HP堆積図

炉 : 10基検出し、堅穴の長軸方向に並ぶ。主体となるものはHF-1・2・8で床土まで被熱している。特にHF-1は生活面上に形成され、床土のシルト質土が被熱により緻密に変成していた。これら3基の炉は炭化物が少量であった。HF-5・7・9は、炭化物が多くみられるものの小規模である。HF-2・6・7では浅い皿状の窪みをもつ。HF-3・4では新旧関係をつかむことができ、HF-3の上に床土が貼られていた。なお、焼土は検出されなかったが、HP-4付近の床面に被熱した断面三角形の棒礫が2点鉤状に配され、炉であった可能性がある。今回検出した炉跡には石組を想定していたが、礫を配したものはなく、抜き取り痕もみられなかった。

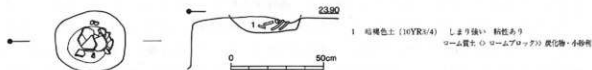


図II-9 H-2 HF堆積図

その他の土質 : HP-1からは同一個体の土器片がまとまって出土している(図II-10)。上層に床土が貼られており、床面精査の際に土器片の集中出土により確認した。堅穴の床面形成の時に一部埋め戻されたと思われる。同一個体片と思われるものがH-1覆土、H-2床面・覆土、B-3区、C-7区と広範囲から出土している。破片の出土状況から堅穴構築時にHP-1を破壊し、周囲に散在した可能性が考えられる。

HP-24はHF-7の下に検出され、HP-23に隣接している。覆土は人為堆積で、炭

化物、焼土ブロック、ロームブロックを多量に含み墳底には2～3cmの炭層がある。一時的に火を焚いた後、周囲の炉の焼土や床土などにより埋め戻したと思われる。

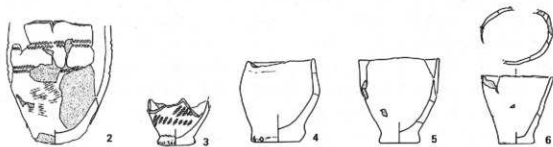
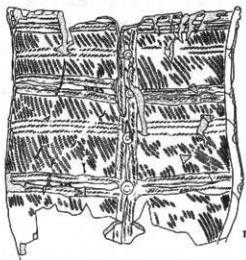


図II-10 H-2 HP-1

遺物の出土状況： 総点数1244点で土器片が約78%、石器類その他が約22%で、床面および柱穴内出土の遺物は159点、覆土からのものは1085点あり床面出土の遺物は少ない。床面の遺物としては石皿または台石として用いられたと思われる大型の礫が4点あり、全て花崗閃緑岩で、すぐ下の海岸から運び込んだものと思われる。分布は竪穴中央部南側に比較的多くまとっており、土器片の接合関係もみられる。竪穴内の遺物の多くは土器であるが良好な出土状態を示すものは、竪穴構築以前の土器として、先述したHP-1（図II-10、図II-12-7、図版3-2）の土器があり、竪穴廃棄以後のものとしては、覆土2b層（堆積図A-B）上面より潰れた状態で出土している土器（図II-4、図II-11-1、図版3-3）がある。土器の新旧関係をつかむうえで良好な資料と思われる。

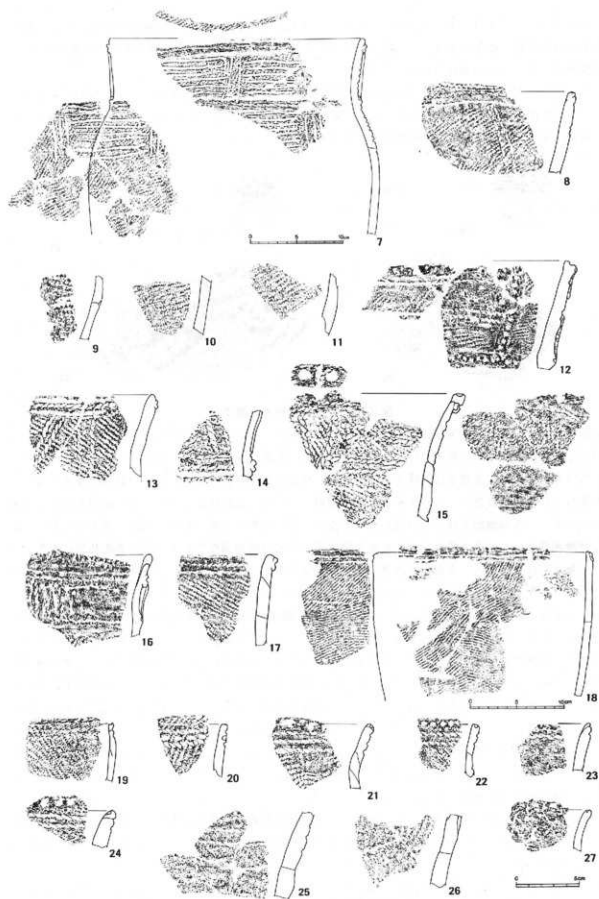
出土遺物

土器： 7・11・13は床面出土。7は破片がHP-1（図II-10）及びH-1床、覆土下位、上位から出土したものである。口唇上に縄文を施し、4～6mm下がった位置と頸部の一番くびれた部位に横位の貼付帯を巡らす。貼付帯上には縄線文が施され、口縁部及び貼付帯より下の胴部上位には横位に5～6条、縦位には3条1組の直線の沈線文が一単位として施され、地文は上半で斜行から下部では横走気味になる。胎土は砂粒を多量に含む。頸部の一番くびれたところに貼付帯を施すものとしては12、13・14（同一個体）があるが、沈線文は施されていない。12は貼付帯上に連続した円形刺突文が付され、口唇部、口縁部に1～2条の縄線文が施されている。胎土は砂粒を多量に含む。13・14は縄線文によるもので、口唇部よりやや下がった位置に貼付帯を施す。貼付帯上には1段Rの地文原体による縄線文が施され、頸部のものは貼付帯上と上下の両側縁に3条1組の縄線文が、貼付帯間の口縁部は2条1組の縄線文が垂直と斜位に



図II-11 H-2 出土土器(1)

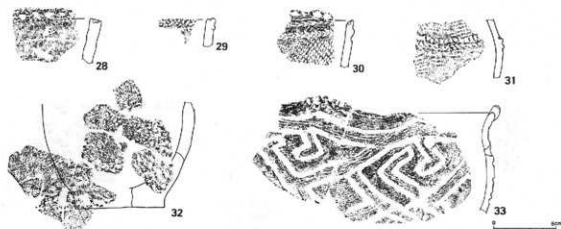
施されている。床面出土の8も貼付帯は付かないが口縁部に2条1組の交差する斜位の縄線文が施されている。口唇部断面形は隅丸の角状を呈し、縄線文が施されている。口唇部の成形には器形成形と別の細い粘土紐で行われている。15も2条1組の縄線文を施し、突起下では「V」字ないしは「X」字状に配され、地文はRLRの複節の斜行縄文である。口縁部内面にも同一原体により縦位に施文される。10・11は同一個体片で11はHP-5 壤底より出土している。1は覆土2b層上面から潰れた状態で出土している(図II-4)。底部はなく、約3分の2個体分と思われる。器形は頸部が緩く内傾し、胴部下半でわずかに張り出して底部へすぼむ。口唇部断面形は丸く、竹管様工具によるほぼ垂直方向からの刺突文が施されている。貼付帯、縄線文は胴部の縄線文のみのものを除いて2条1組に施され、横位に口唇部側面、頸部、胴部の張り出す肩部と3段、縦位には4か所胴部下位まで垂下している。貼付帯、縄線文の交点には、直径約11mmの先端を丸く調整した棒状工具による刺突文が施されている。地文は2段RL原体を横位に回転施文し、斜行から縦走気味の斜行縄文で、整然と密に施されている。16は口縁部に2条1組の貼付帯が垂下し、工字状に配される。下部の貼付帯は若干干下り、肩部に近い位置に付されている。器面は無文で貼付帯は無でつけられ、口唇上のみ縄線文原体と同一のLRの縄文が施されている。31は胴部が張り出した肩部に縄線文を付した低い貼付帯を配し、上頸部に円形刺突文を施している。器厚は薄く、焼成も良好である。17・18は口縁部に1条の貼付帯をもつものである。器形の傾きはほとんどなく、円筒状を呈すると思われる。18は口唇部に1条の沈線文が施されている。19~26は口縁部に2~3条の縄線文を施すものである。19は口径8.8cmの小型土器で、口縁部が若干内傾気味となる。縄線文を口縁部に2条、口唇部にも施している。器厚は薄く、焼成も良好で堅緻である。20は口唇部に地文と同一のLR縄文を施し、口縁部には2条の縄線文を付し、その後、縄線文間に連続する刺突文を施している。21、22は口唇部に工具をやや斜位にして刺突文が施されている。口縁部には3条1組の縄線文を施し、地文には横走なしい斜行縄文を施す。22の地文は縦位回転による斜行縄文で、縄線文は2条1組の可能性ある。23、24・25・26は無文地に縄線文を施すものである。23は胎土、器厚などから胴部では縄線文の原体による縄文が施されている可能性がある。24・25・26は同一個体片で口縁部が緩く外反する。無文を基調とし、所々に無節Rの斜行縄文が施されている。器厚は1.2cmと厚く、器表面は成形時の凹凸が目立ち粗雑な作りであるが、焼成は良く、堅緻である。21、23、24は器形成形とは別の細い粘土紐により口唇部の成形がなされている。なお口縁部は残っていないが、2も2条1組の縄線文を最低2段施している。2b層上層出土のもので、器形は胴部で若干張り出し、上半は僅かに内傾する。地文は無文を基調とし、まばらに無節Lが横走気味に施されている。27、28は口唇部に刺突文のみを施すもので、27の口縁部には僅かにLRの斜行縄文がみられる。28の器表面はナデ調整により平滑で無文である。口唇部は角状を呈し、半截竹管による刺突文が施され、若干肥厚する。29、30、32はオオバコのとう(花茎)を施文具として用いているものである。29は口縁部の貼付帯上にとうを押圧するオオバコ圧痕文を施している。30は口縁部に2条のオオバコ圧痕文を配し、地文にはとうを横位に回転するオオバコ回転文を施している。口唇部には刺突文が施される。33は底部で、底径7.0cmを測る。風化が著しく、痕跡的しか確認できないが、縦位のオオバコ回転文が施されているようである。3~6は器高が10cm以下の小型土器である。底部形態は全て「く」字状に張り出している。3は地文が単節LRの斜行縄文で、底部のくびれの部分に地文と同一原体による縄線文が施され、底部側面の最下部には連続した刺突文が施されている。4~5は無文で、4は胴部中位で張り出し、最大径をもち、口縁は内傾する。器厚は一定でなく、内面には成形時の指圧痕が浅く残る。5は底部から胴部中位にかけて開き、口縁にかけてほぼ垂直に立ち上がる。上面観や底面は円形で器表面もナデあげられ、器厚も一定し、丁寧な作りである。6は底部の外



图II-12 H-2出土土器(2)

反は顕著でなく、垂直に落ちる箇所もみられる。底面は円形であるが、上面観は小判形を呈し、器内外面には成形時の指圧痕が残り、粗雑な作りである。これらの土器は全て輪轆み法による成形であり、器内外面にタール状の物質の付着が目立っている。

33はⅡ群土器で口径が10.4cm、波状口縁で突起部の口唇に刻みを施し、頸部がくびれ胴部上半が張り出す。口唇部は丸味をもち、磨かれている。胴部には無文地に、櫛状工具による条線を沈線で囲って、口縁部の突起を中心に菱形文が展開されている。

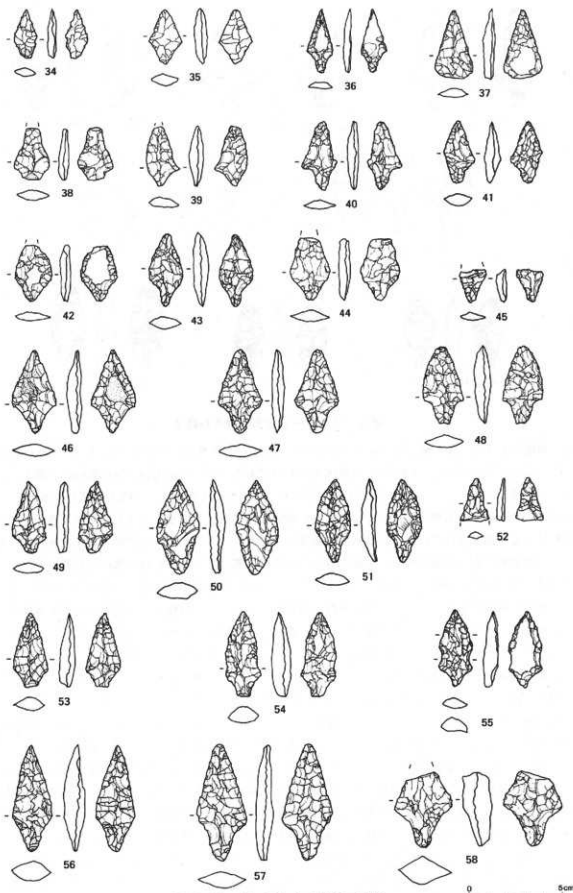


図Ⅱ-13 H-2出土土器(3)

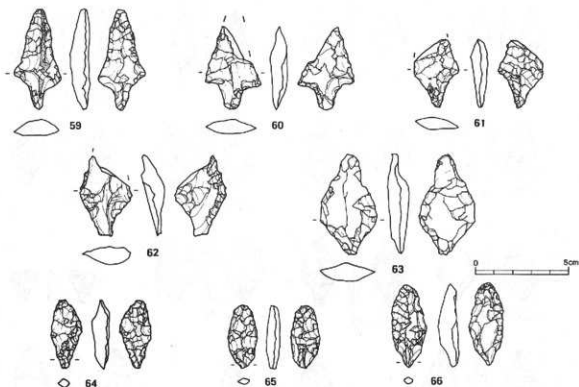
石器： 34～55は石鎌。床面出土のものは48のみである。全て有茎で白色の頁岩製のものが多く、破損品も多い。34はガラス質で石材は流紋岩質である。先端を鋭く作出し、形態は五角形に近い。35の形態は菱形に近く、先端部は丸味をおびている。材質は黒曜石裂で流紋岩顆粒が層状に多量に入り、黒曜石としての質は悪い。赤井川産のものを使用していると思われる。36・37は片面加工ないしは裏面に大きく一次剥離面を残し、断面形が台形ないしは、三角形に近いもの。36は、裏面からの一方的な剥離調整をし、鈍角で断面形が台形状を呈する。基部は両面調整である。37は裏面基部に大きく一次剥離面を残している。表面左側縁部に歯こぼれ様の微細な剥離がみられる。38～41は左右非対称形のもので、かえりの部分のどちらかが欠損し、38～40では先端部も欠損している。39・40・41は幅に対して厚味がある。35・42～45・50は基部の側縁が最大幅部までほぼ直線的に作出され、基部が明瞭でないもの。43は表面左下に調整がはいり、湾入する。先端部は丸く、厚い。44は薄身で先端部が欠損し、全体的に磨耗が著しい。50は表面を調整した後、表面の縁辺部のみ調整を加え、側面観は整然とした鋸歯状を呈する。46～49・51・53～55は基部側縁は若干湾入し、基部を明瞭に作出しているもの。47・48は丁寧に整形はされているが、先端部は丸味をおびている。特に48は明瞭なかえりを作出し、基底部はノッチが入り、凹基を呈している。49は全体的に磨耗が著しいが、表面左側縁部に歯こぼれ様の微細な剥離がみられる。54・55は細身であるが厚く、棒状を呈する。54は体部と基部の境界に僅かな突起をもつ。55は体部下半の左右に裏面からのノッチングにより、抉りを作成している。表面は縁辺部のみの調整である。

56～63は石槍。59・60は床面出土のもの。56・61は基部側縁が直線的なもの。56・58・59は厚みがあり、棒状を呈する。57～60は基部側縁が若干湾入するもの(57・58)や強く湾入し、かえりを設け、棒状の基部をもつもの(59・60)である。58・60～62は欠損品で、63は未成品と思われる。

64～66は石錐。65・66は床面出土のもの。3点とも、両面加工のもので、縦長である。66は体部と錐部が明瞭に区別でき、錐部は完全に磨耗し、断面もほぼ円形を呈している。これらは石礫からの転



図II-14 H-2出土の剥片石器(1)



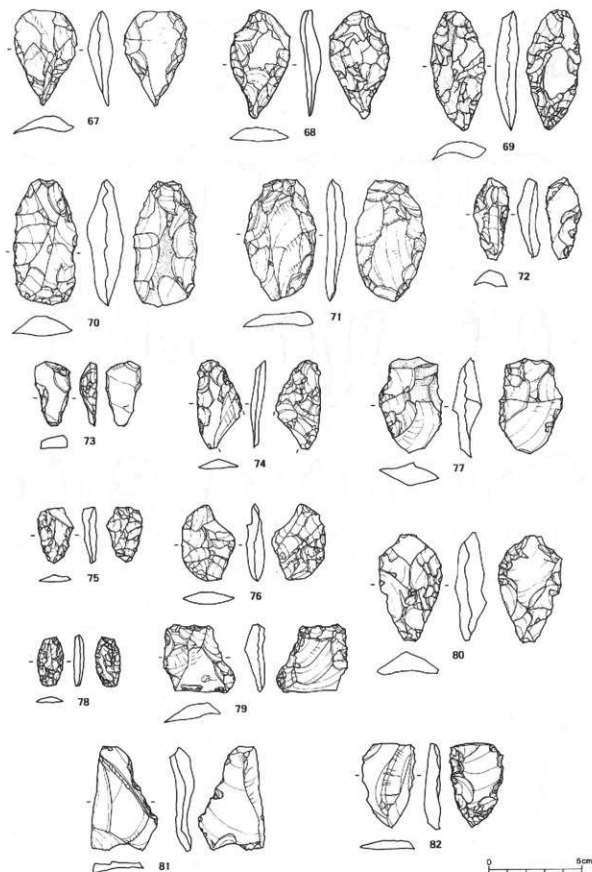
図II-15 H-2出土の剥片石器(2)

用の可能性もある。この他、Rフレイクとしたものの中に石錐機能の可能性をもつもの(86)もある。

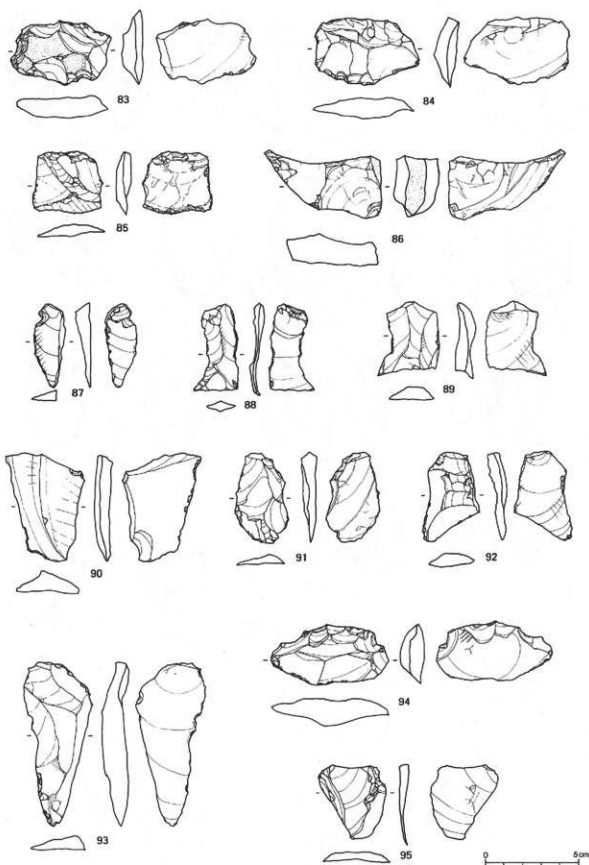
67-80はスクレイパー。69・78が床面出土のものである。67-69は先端部付近側縁に刃部を設けるポイント様のスクレイパーである。67・68は剥片を一次調整によりポイント様の形態作出している。刃部は67では裏面の右側縁中位。68は表面の左側縁下位に設けている。69は先端部付近両側縁に細部調整による刃部を設けている。70は石篋の範疇に入るものであろう。一次調整で剥片の縁辺部を整形し、二次調整で剥片下端に弧状の刃部を設けている。刃部には刃こぼれ様の微細な剝離がみられる。71-76・78は剥片の長軸方向側縁に刃部をもつもの。石材は、71が安山岩、72・73は同一母岩のチャート、78は黒曜石である。71・74・75は刃部が両側縁にあり、71は右側縁では裏面から右側縁は表面から刃部調整している。72・73は右側縁に、74は両側縁に、75は左側縁に両面調整によって刃部を作出している。78は紡錘形を呈し、左側縁に裏面から刃部を作出し、鋭角な片刃になっている。刃部以外の3辺は表面からの剝離調整が行われ、鈍角である。HP-24覆土からの出土土である。77・79・80は剥片の縁辺の一部に刃部を作出しているものである。

81-86はR・フレイクである。82は床面出土のものである。81・83はノッチをもつもの。81は右側縁に連続して4か所にノッチをいれている。上から2か所目は表面からで、他は裏面からのノッチングである。83は全て裏面からの調整で5か所にある。82は表面からの調整で、裏面左側縁に刃部がある。84・85は横長の剥片の下端部に刃部がある。85は裏面に刃部を形成している。86は残核を利用したもので、左端に断面三角形の刃部ないしは錐部を作出している。裏面の刃部および先端部の磨耗は著しいが、表面の刃部は新しい剝離が連続し、磨耗していない。再調整を加えたのであろうか。

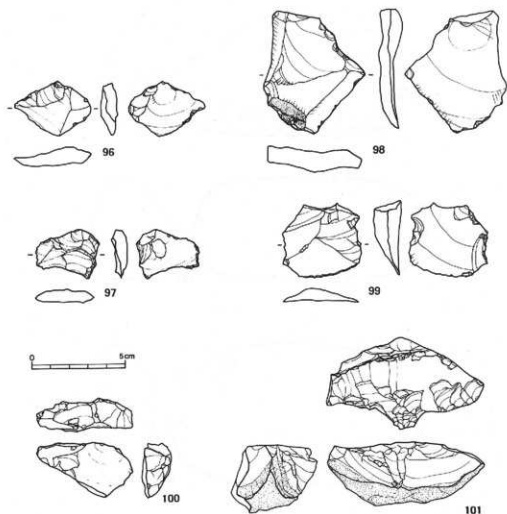
87-99はU・フレイクで、87・91は床面出土のものである。87・91・95、92・93はそれぞれ同一母岩素材である。材質は、94が安山岩、97はメノウ質頁岩、99はチャートである。87-95・97は剥片の長軸縁辺を使用している。87は縦長剥片の左側縁上部に裏面からの大きなノッチがはいる、以下に微



図II-16 H-2出土の剥片石器(3)



図II-17 H-2出土の剥片石器(4)

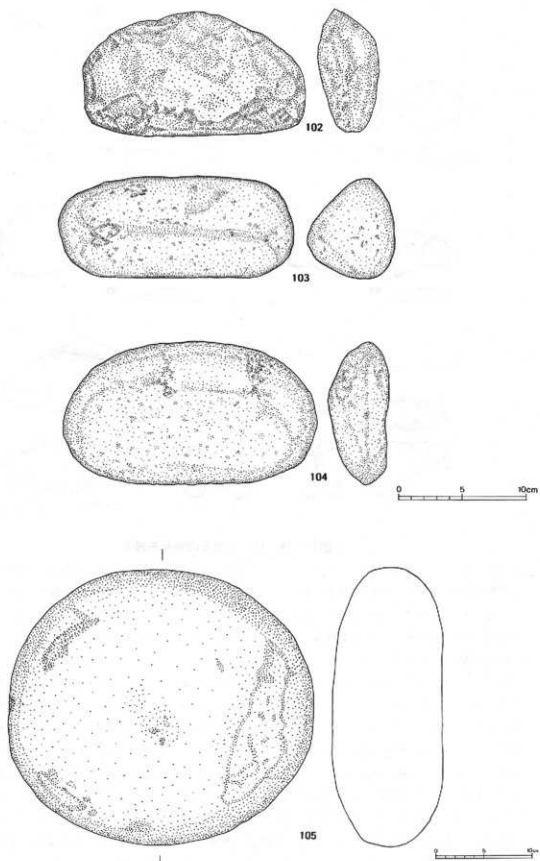


図II-18 H-2出土の剥片石器(5)

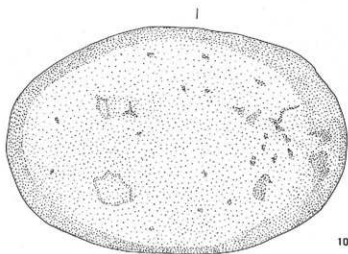
細剥離が続く。右側縁にもノッチがみられ、表面では側縁中位に、裏面は先端部まで使用痕と思われる微細剥離がみられ、粗製のつまみ付きナイフとも考えられる。88・89は両側縁に、90は左側縁上部と下部に刃こぼれ様の微細剥離がみられる。93は原石からのファーストフレイクを利用している。96・98は突出部の両側縁に、99は両側縁に打面に対し直角なノッチ様の剥離がは入り、下端に刃こぼれ様の微細剥離がみられる。

100・101はコアである。100は新しい剥離により打面を形成し、実測面では2枚の剥離面を確認でき、新しく大きく残っているものの打面は、大きく湾入していることから厚手の剥片が採取されたと思われる。もう1枚の切られている剥表面からは、打面を上下転移して、下からの剥離がおこなわれている。101は剥離面以外は、原石面や自然の営力による古い破砕面である。平坦な古い破砕面を打面として剥片の採取が行われている。一部に剥離面からの僅かな調整もみられる。剥離は意識的に2点で行われ、ノッチ様を呈している。この間の打面は突出するように残されている。

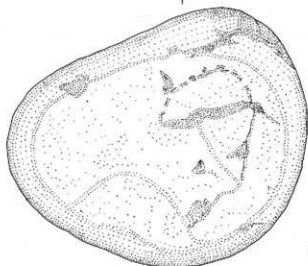
102はすり石。裏面に平坦な原石面が残り、大型礫の破片を利用していると思われる。主に裏面からの剥離により、すり面側縁以外の全周を半円状に整形している。すり面の左右端部には敲打痕がみられ、すり面は形成されていない。すり面左側縁は、すり面からの剥離痕がみられ、一部敲石としての機能も兼ねていると思われる。



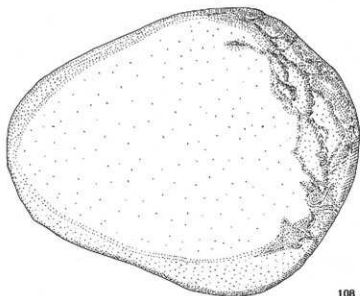
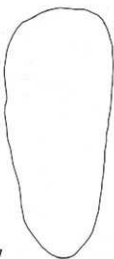
図II-19 H-2出土の礫石器(1)



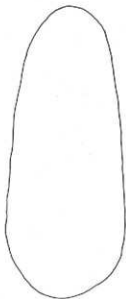
106



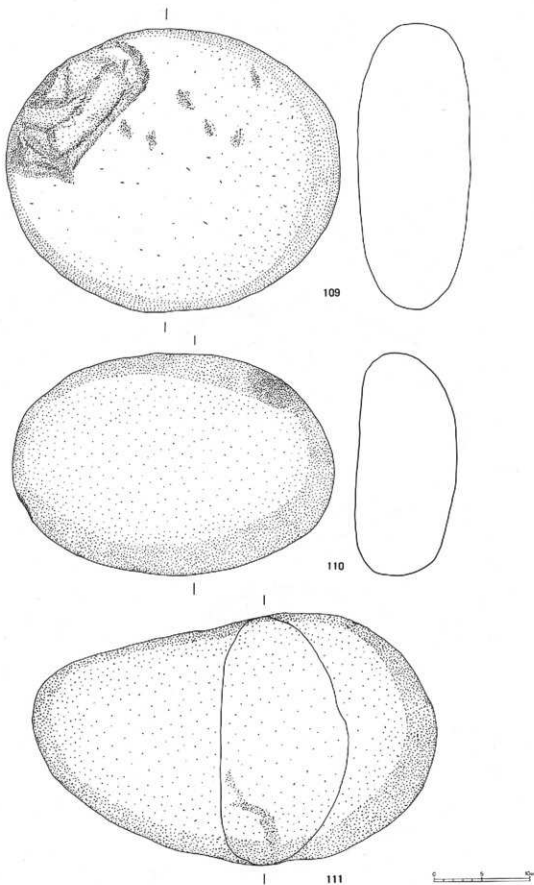
107



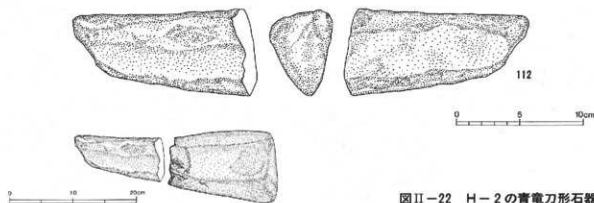
108



図II-20 H-2出土の礫石器(2)



図II-21 H-2出土の礫石器(3)



図II-22 H-2の青電刀形石器
と推定復元図

103、104は敲石。両者とも床面出土の遺物で、103は断面三角形を呈し、4か所に敲打痕があり、1面に僅かに擦痕がある。敲打痕は3か所が礫の角頂部に、1か所は擦痕を有する面にみられる。104は左端部に敲打痕が僅かにみられるものである。出土状況はHP-19の隣接する石皿(110)の下に楔様に据えられていた(図II-8)。形態、大きさからして、すり石の素材の可能性もある。

105~111は石皿・台石。106・108~110は床面出土のもの。105は包含層堆積図、H-2覆土4層。107は1層、111は6層出土である。これらは台石としての敲打痕と石皿としての平坦ないしは若干窪む作業面と思われる面の両方をもつもの(105・107~109・111)、両面を使用しているもの(106・107)。片面のみのもの(108・109~111)がみられる。106は礫の中央部が僅かに窪んでいる。105は上面周縁部に敲打痕がある。中央部は平坦な面をなし、石皿としての機能面と考えられる。特に裏面中央部は18.0×18.0のほぼ円形の平坦な面をもっている。107は敲打痕が上面周縁部にみられ、裏面は若干窪む平坦面があり、石皿として使用していた可能性がある。108は表面に若干窪む平坦面をもち、上面下側から右側にかけて敲打痕が残る。109は敲打痕が点在し、その下側に平坦面をもつ。110は上面に礫の形状と同じ長楕形に若干窪む機能面がある。使用面は成因を断定できないが、スズ状のものが付着し、若干黒ずんでいる。111は平坦面左右に敲打痕が残る。

112は青電刀形石器の柄部と思われる。断面形が二等辺三角形を呈している。それぞれの角は、ベッキングの後、研磨して整形している。当初角頂部のみの調整と思われたが、裏面と上面はほぼ全面にわたって敲打調整を施しているようである。接合はしないが、同一個体片の刃部(図III-20-26)がB-5区b-3の掘上げ土下位から出土しており、復元形態(推定:35cm)は柄から刃部にかけて直線的に移行し、刃関は不明瞭のものと思われる。なお、刃部片のものは角頂部を僅かに研磨するのみで、柄部に比べ大型で原石面を全面に残している。柄部は整形により矮小化している。石材は凝灰質砂岩で、野村崇氏の青電刀形石器の形態分類(野村1985)のC型に相当すると思われる。

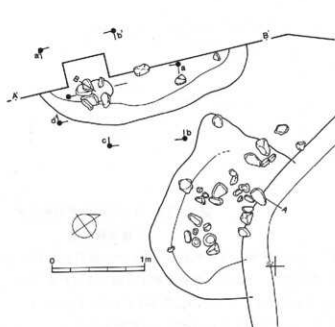
時期: 増改築の明確な痕跡をつかむことはできなかったが、焼土や柱穴などの状態から2回の改築を行っているようである。H-2の構築時期としては縄文中期後葉の大安在B式期で、HP-1出土の土器と覆土2b層上面出土の土器の間の時期と思われる。(乾)

2. 土 壌

(1) P-1

位置: C-7区 形状: 不明

規模: (調査部分) 長径 2.25m 短径 0.75m 最大深さ 0.28m



図Ⅱ-23 P-1・P-2平面図と遺物の分布



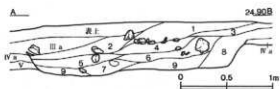
図Ⅱ-23 P-1・P-2遺物分布図

確認： C-7区を調査（H-2掘上げ土除去）中に西半分が調査区域外にかかっている黒色土の落ち込みを確認し、P-1とした。掘り込み面はH-2と同じく漸移層（V層）上面で、確認面では1/2個体分の復元可能な土器がまとまって出土している（図Ⅱ-26、図Ⅱ-28-2）。

壁の状態： 全周緩く立ち上がる。緩斜面を切り崩すかたちで北側の壁の立ち上りはしっかりしている。

床の状態： ほぼ水平であるが南側は僅かに浅い皿状に窪み、さらに覆土7層の落ち込む円形の浅い小ピット（0.2 × 0.2/0.06）がある。基盤層と遺構覆土は明瞭に区別でき基底はしっかりしている。

堆積状況： 1～4層はH-2の掘上げ土と考えられる。下層の5・6層は炭化物を多量に含む黒褐色土でB-7区堆積図6層（図Ⅰ-7）と同一のものである7・9層はロームブロック、

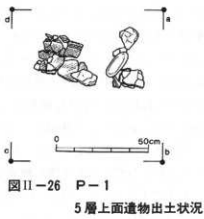


層	土質	特徴
表土	黒色土(10YR2/3)	なし 強い 黒色土(ローム質土・砂利・木炭が少し(多い))
Ⅲa	黒色土(10YR2/1)	なし 強い 黒色土(砂利)
Ⅲb	黒色土(10YR2/3)	強い あり 黒色土(ローム質土(炭化物含まれない))
V	黒褐色土(10YR3/4)	強い あり ローム質土(炭化物)
1	黒褐色土(7.5YR3/3)	なし 強い ローム質土(黒色土)小砂利
2	黒褐色土(10YR3/2)	あり 強い 黒色土(ローム質土)小砂利・炭化物
3	黒褐色土(10YR3/4)	なし 強い ローム質土(黒色土)
4	黒褐色土(10YR3/2)	なし 強い ローム質土(黒色土)小砂利・炭化物
5	黒褐色土(10YR3/1)	あり 強い 黒色土(炭化物)(ローム質土(遺物含む))
6	黒褐色土(10YR3/2)	強い 強い 黒色土(ローム質土)炭化物(遺物含む)
7	黒褐色土(2.5YR3/3)	あり あり ローム質土(黒色土・ロームブロック・炭化物)
8	褐色土(10YR4/4)	強い 強い ローム質土(炭化物)小砂利
9	黒褐色土(2.5YR4/3)	あり 強い ローム質土(黒色土・ロームブロック・炭化物)

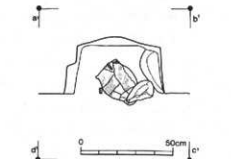


図Ⅱ-25 P-1堆積図

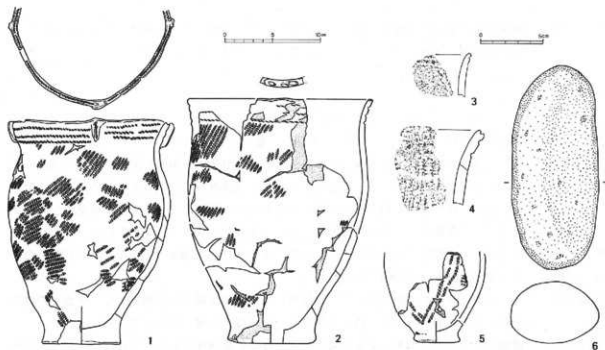
図Ⅱ-26 P-1



図Ⅱ-26 P-1
5層上面遺物出土状況



図Ⅱ-27 P-1
5層出土片形土器
出土状況



図Ⅱ-28 P-1 出土遺物

炭化物を多量に含む暗オリブ褐色土でB-7区の掘上げ土とは趣を異にし、別の掘上げ土か埋め戻し土の可能性はある。

遺物の出土状況： 土壌の南半に遺物が集中している。検出確認面の5層上面で1/2個体分の復元の土器がまとまって出土している。また、掘上げ土先端部では完形土器、石皿が出土している。(図Ⅱ-27、図Ⅱ-28-1) 出土層位は全て掘上げ土直下の炭化物を多量に含む黒褐色土(5層)からで、1が5層から、2-5は5層上面から出土している。

遺物： 1は拉張区から出土したものである。完形土器がほぼ水平に横倒しの状態で出土している(図Ⅱ-27)。器形は胴部上半に最大径をもち、頸部がくびれ、口縁部が緩やかに外反する。口縁部はほぼ平縁で4か所に小突起をもち、突起下に2.3 cm前後の縄線文を施した貼付帯が垂下する。口唇部断面形は隅丸の角状で縄線文が施され、口縁部にも2-3条横環する。地文はLRで胴部中位は横走気味、上位では斜行縄文となる。縄線文も同一原体で施されている。胴部上半は炭化物の付着が著しく、縄線文が埋まっている所もある。土器内部の土壌を水洗したが、木炭粒を多量に含み、黒曜石や安山岩の細片もみられ、B-7区堆積図6層と同一な内容物であった。2は底部がやや張り出し、胴部中位まで直線的に開く。上半は緩く内傾し、口縁部は僅かに外反する。平縁で口唇部断面形は丸く、半截竹管による斜め方向からの刺突文が施されている。口縁部には3条の縄線文が横環する。地文はLRで、斜行から縦走し、縄線文も同一原体により施されている。3は口縁部が外反し、口唇部断面形は丸味をもった尖状を呈している。口縁部には2条1組の縄線文を配し、右下がり半截竹管による刺突文が垂下する。地文は単節LRの斜行縄文が施されている。4は器形が2と同一のフォームと思われる。口唇上に縄線文を施し、口縁部には2条1組の縄線文が横環する。地文は2段LR原体により縦走する。5は「く」字状に底部が張り出し、胴部には一段Lの原体による2条1組の縄線文が「V」・「X」字状に配される。胎土には少量の海綿骨針を含む。6は安山岩の自然礫であるが、2・4と共に同一層、近位置からの出土で、相互に関連性のある遺物群と思われる。

時期：構築時期は縄文中期後葉の大安在B式期で、H-2掘上げ土の範囲を確認するための堆積状況実測図(図II-29)から、H-2より古い土壌と考えられる。(乾)

(2) P-2

位置：C-6・7区 形状：不整形円形

規模：(現存部)長径 1.95m 短径 0.90m 最大深さ 0.15m

確認：C-6区においてH-2の掘上げ土除去した後、遺物と垂角礫が同一レベルで混在して出土する面を確認した。この一群を掘上げ土下の遺物群としてとらえ、この面で広げたとこ、遺物と礫が広がる範囲で暗褐色土の落ち込みを検出した。掘上げ土確認のトレンチではこれらの礫群の下にも遺物があり、礫が人為的にこの場所に集められたと思われる。

壁の状態：全周緩く、不明瞭であったが、土の色調、縮まり具合、遺物の出土などから判断した。

床の状態：ほぼ水平であるが不明瞭である。

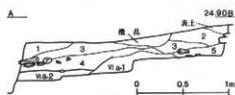
堆積状況：1～3層はH-2の掘上げ土で、炭化物、小砂利を少量含む暗褐色土で、黒色土の含む具合などから3層に分けた。特に4層はH-2の覆土5層に類似している。

遺物の出土状況：遺物のほとんどは4層の上面から中位にかけて、垂角礫と混在してほぼ同一レベルで出土している。遺物は小片が多い。

遺物：全て4層出土の遺物である。1は口縁部に2条1組の縄線文が付き、以下に2ないしは3条1組の弧線文が施されている。地文はLRの原体による斜行縄文である。2はLRの地文縄文のみである。

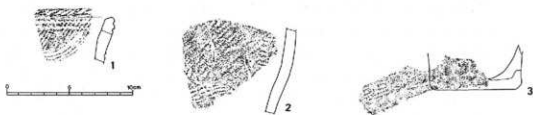
3は2段LR原体を斜位に回転施文している。割れ口を観察したところ、底部のつくりは円盤状の底面を作り、この若干内側に帯状にした粘土紐を輪積みしていくものと思われる。

時期：H-2に切られ、同住居の掘上げ土の範囲確認のために設定したトレンチの堆積状況では掘上げ土を被っており、H-2より古いと思われる。(乾)



層別	暗褐色土 (7.5YR5/6)	弱い	強い	無層ローム質土
層別	暗褐色土 (10YR5/6)	あり	あり	ローム質土・礫・小砂利の3層(1-3層混在)
1	暗褐色土 (10YR5/4)	あり	強い	ローム質土の(灰色土)の炭化物
2	暗褐色土 (10YR2/2)	なし	強い	灰色土の(ローム質土・細砂・粘土質土(黒点))
3	褐色土 (10YR4/4)	弱い	あり	ローム質土の(小砂利)の炭化物
4	10YR5R土 (10YR4/2)	あり	強い	ローム質土の(小砂利・炭化物)
5	黒褐色土 (10YR3/2)	あり	あり	黒色土の(炭化物)の(ローム質土)の(5層)

図II-29 P-2堆積図



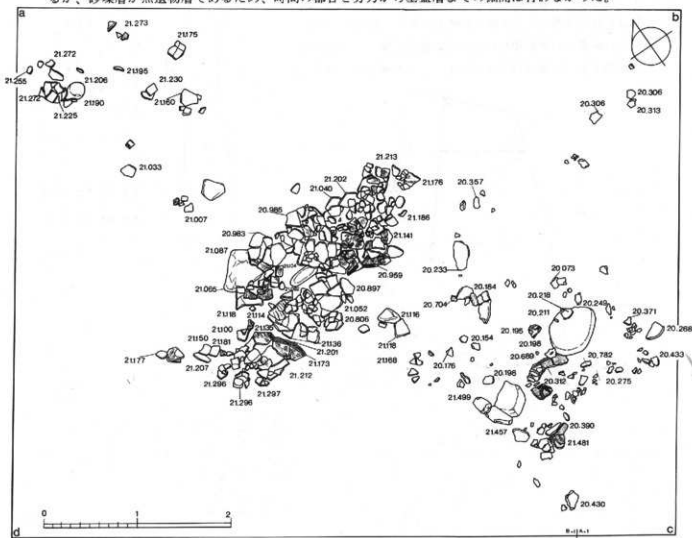
図II-30 P-2出土遺物

III 包含層の調査

1. 0～1区の調査

(1) 調査の概要

B-0区、B-1区は、表土を剥いだ段階で方形のプランの一段低いテラス状の地形を確認した。O s-aが厚く堆積し、遺構の存在の可能性が予想されていたが砂質の暗褐色土が堆積し、遺物も数点しか出土しない状況であったため、隣接するB-1区へと掘開範囲を広げた。B-1区では鉤状に幅0.2～0.6m、長さ3mの帯状の黒色土の落ち込みを検出した。これに直行するトレンチを設定したところ、集中出土土器にあたり、トレンチの東側をセクションベルトとして、周囲の掘開を進めた。集中出土土器は黒色土および暗褐色砂礫層の下面で一面をなして検出され、廃棄当時の地形を容易に推定することができた。鉤状の落ち込みの堆積状況は、テラス状地形への落ち込む斜面部で基盤ローム質土の流れ込みがみられ、遺物や礫も斜面を滑るかたちで出土している。一段低いテラス状の地区は砂礫層で覆われ、遺物は上層で数点出土している。この砂礫層は礫の粒度や堆積状況から自然の営力による再堆積層と思われるが、その成因を明確には断定できない。基盤層は20層の褐色砂層と思われるが、砂礫層が無遺物層であるため、時間の都合と労力から基盤層までの掘開は行わなかった。



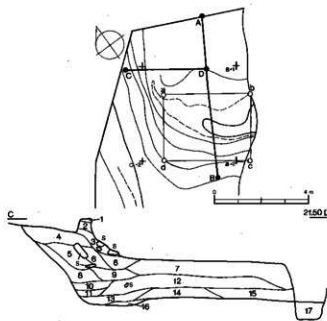
図III-1 B-1区遺物出土状況

遺物の出土状況としては、セクションベルトを境に東側では上層において縄文後期前葉の入江系の土器が数点出土している。また、これらの入江系土器と同一面縄文中期後葉に特徴的な敲打調整による石棒が出土していることから、縄文中期後葉の包含層が、後期前葉にある程度の攪乱を受けている可能性がある。西側では7個体分の集中出土土器を検出した(図III-1)。接合関係から、これらの土器はほぼこの位置で押し潰された状態で出土していると考えられ、意図的にこの場所へ廃棄された可能性が高い。

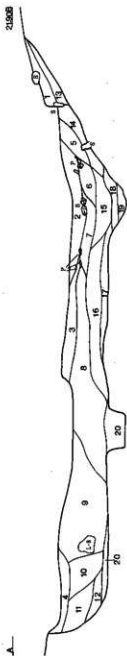
(2) 出土遺物

(土器)：1~7は小グリッドb-3を中心に広がる集中出土土器である。1は底部が「く」字状に張り出し胴部上半まで直線的に開き、頸部はほぼ直立か僅かに内傾し、口縁部が外反するものと思われる。頸部の貼付帯は断面形状が三角形を呈し、貼付帯と上下間縁に円形刺突文を施す。貼付帯の下側縁からは2条1組の弧線文が垂下し、胴部は斜行を基調とする単節LR縄文が疎らに施されている。

2は底部から胴部中位にかけて直線的に開き、上半は緩く内傾する。口縁は緩い波状を呈し、1か所ないしは2~



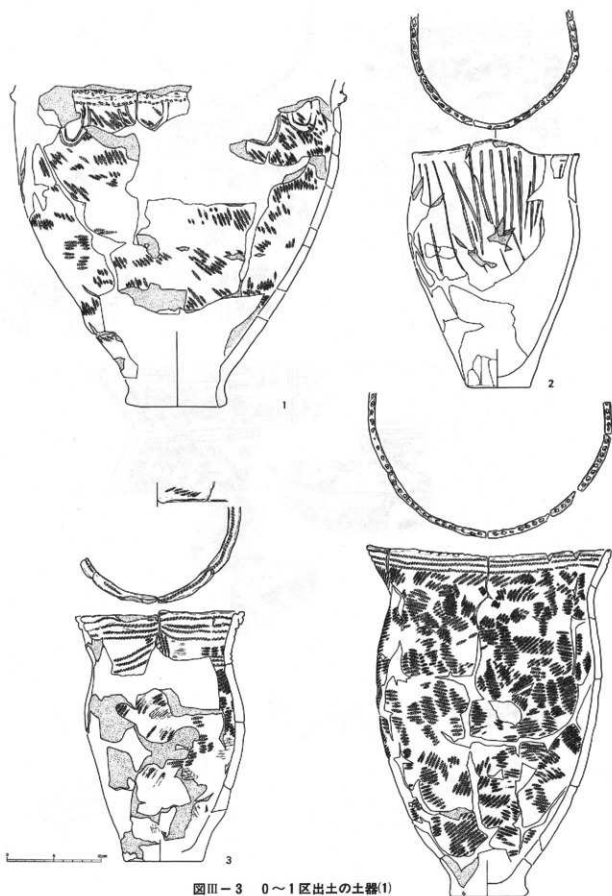
- 1 暗褐色土層 (10YR3/4) 強い 黒土+黒土のローム質土+小砂利
 2 黒褐色土層 (10YR2/2) 強い 黒土+砂粒+小砂利+糠
 3 暗褐色砂礫層 (7.5YR2/4) あり 強い 砂粒+小砂利+糠+ローム質土
 4 暗褐色土層 (7.5YR2/3) あり 黒土+砂粒+小砂利
 5 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+黒土+小砂利
 6 黒土層 (10YR2/1) 強い 黒土+砂粒+小砂利+炭化物
 7 暗褐色土層 (10YR3/4) 強い 黒土+小砂利+ローム質土
 8 暗褐色砂礫層 (10YR2/3) あり 強い 小砂利+小礫+黒土+ローム質土
 9 暗褐色土層 (10YR3/4) なし あり 黒土+小砂利+小礫+黒土+炭化物
 10 暗褐色土層 (10YR2/3) なし 強い 黒土+砂粒+小砂利+小礫+黒土+炭化物



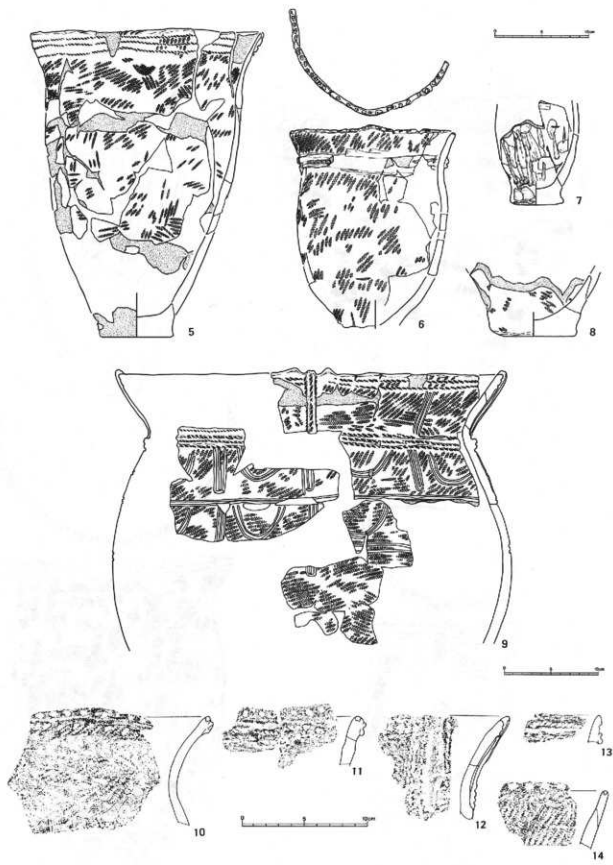
- 1 黒褐色土層 (10YR2/2) 強い 黒土+黒土のローム質土+小砂利
 2 黒褐色土層 (10YR2/1) 強い 黒土+黒土のローム質土+小砂利
 3 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 4 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 5 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 6 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 7 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 8 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 9 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 10 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 11 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 12 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 13 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 14 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 15 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 16 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 17 暗褐色土層 (10YR3/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠

- 11 暗褐色土層 (10YR2/3) 強い 黒土+砂粒+小砂利+糠
 12 暗褐色土層 (7.5YR2/2) 強い 黒土+砂粒+小砂利+糠
 13 暗褐色土層 (10YR2/3) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 14 暗褐色土層 (10YR4/4) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 15 暗褐色土層 (10YR4/4) 強い 黒土+砂粒+小砂利+糠
 16 暗褐色土層 (7.5YR2/3) 強い 黒土+砂粒+小砂利+糠
 17 暗褐色土層 (10YR4/5) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠
 18 暗褐色土層 (10YR4/2) 強い 黒土+砂粒+小砂利+糠
 19 暗褐色土層 (10YR5/6) 強い 黒土+砂粒+小砂利+糠
 20 暗褐色土層 (10YR4/6) あり 黒土+砂粒+小砂利+糠

図III-2 B-1堆積図実測ラインと堆積図



图III-3 0~1区出土の土器(1)



図III-4 0～1区出土の土器(1)

3か所、山形になると想われる。口唇部断面形は隅丸の角状で、上面に半載竹管による斜位の刺突文が施される。文様は無文地に口縁部から胴部中位にかけて、口唇部刺突文と同一工具による沈線文(条線)が粗雑に垂直ないしは斜位に施されている。突起部周辺は半載竹管の「背」で、他は「腹」で沈線を描いている。実測面は重複し、確認しづらいが、これらの沈線文(条線)は2条1組に施文されていると思われる。器面調整は底部が縦位に、胴部上半は横位に若干のケズリがみられる。

3は底部から胴部上半にかけて緩い膨らみをもって開き、頸部も緩くぐびれ、口縁部は外反する。口縁は小突起様のコブを1か所もつ平縁で、口唇上には縄線文が施されている。口唇部側面は、縄線文を施した貼付帯が1条横環し、口縁部には小突起様のコブから垂下、展開する3条1組の縄線文が2段施され、下段は頸部の一番くびれた部位を巡る。計8条の縄線文全ては、1段Lの原体によるものである。地文は無節Lと単節LRがみられ、横走を基調とし、一部に斜行縄文が施されている。実測図左半分は器表面の風化が著しく、復元率も低い。

4は底部が「く」字状に張り出し、胴部中位にかけて緩い膨らみをもって開く。上半は緩く内傾し、頸部が「く」字状にくびれ、口縁部が外反する。口縁は平縁で、口唇部断面形態は丸く、口唇上には半載竹管による刺突文が施されている。口縁部には2段LRの原体による縄線文が3条施されている(細い原体であるため、実測図では簡略)。地文は、比較的密に施されているが、1回の施文単位は小さく、条の方向は斜行、横走と乱れ、胴部下半は斜行、上半は横走、口縁部では条が斜行にそれぞれ主体となっている。内面は指圧痕が多く残る。

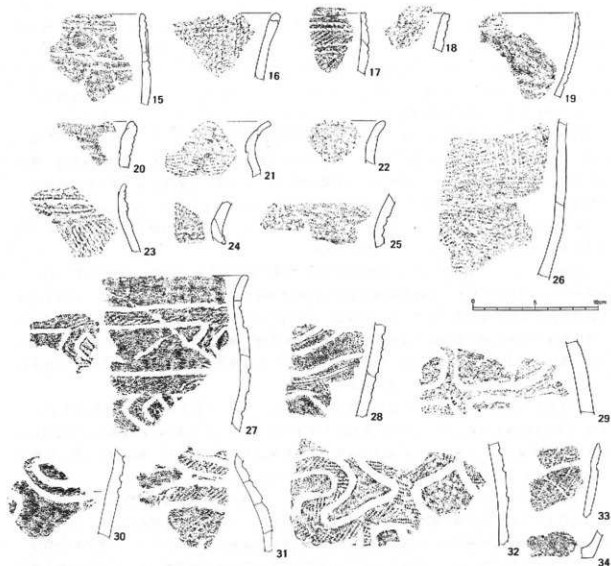
5は底部から胴部中位にかけて直線的に開き、上半は直立ないしは若干外傾し、口縁部は外反する。平縁で口唇上に縄文を施しているため一部角状を呈するが、ほとんどは丸い。口縁部には2段のLR原体による縄線文が3条施され、地文は口縁部では斜行縄文を基調とするが、胴部以下は疎らに施文され、条は縦走から横走と一定していない。胴部下半の風化が著しい。

6は底部が欠損しているが、底部から胴部下位にかけて、強い膨らみで開き、胴部はほぼ直立し、頸部が若干くびれ、貼付帯が横環する。口縁部は緩く外反し、4個の山形小突起をもち、口唇上は半載竹管による刺突文が施されている。口唇部断面形は丸から隅丸の角状を呈する。頸部の貼付帯はくびれから若干上の位置にあり、地文施文後、貼付帯の位置を筥状工具で調整したのち、貼付帯を横環させている。貼付帯の上側縁を器面にナデ付けている箇所もあり、貼付帯上には深い沈線文を施して、一部では沈線上に縄線文を施している箇所もある。地文はLRの斜行縄文で、密に施文している。

7は5の集中ブロックから一緒に出土した無文の小型土器である。底部が「く」字状に張り出し、底部から胴部にかけて幅5~7mmの寛状ないしは棒状工具によるケズリ調整が施されている。

8は1~7の集中出土土器から約1.5m北側から出土した。かなり大型の土器の底部と思われる。地文は、疎らに1段LRの原体の縦回転による斜行縄文である。

9は大型の瘦型土器で、同一個体片3片を図上復元したものである。胴部中位に最大径をもち、頸部が「く」字状に強くくびれ、口縁は外反し、平縁で2個1対の小突起を4か所に配し、口唇部断面形は隅丸の角状を呈する。貼付帯は2個の小突起間から垂下するものと頸部に横環するものがあり、貼付帯上および両側縁の3条1組の縄線文が施される。口縁部には、横位に2条の縄線文が施され、小突起間の中間の位置に3条の沈線が垂下する。頸部の貼付帯以下は2条1組の横走沈線文が2段横環し、3段の文様区画となっており、1段目・2段目は同一の展開をみせる。横方向の文様区画は、縦位の貼付帯によって4分割され、1区画の中間位置に3条1組の沈線が垂下し、左右両端が下端で「U」字状に閉じる懸垂文となり、さらに1段8区画となり、胴部の1・2段目の各区画には2条1組の沈線により弧線文が描かれる。3段目は懸垂文のみ施されている。地文はLR縄文で口縁部と胴



図三-5 0～1区出土の土器(3)

部の1段目の区画部分では斜行縄文を基調とし、2段目以下は横走である。内面は平滑にナデられる。

10～14・23・24は貼付帯をもつもの。10・11・14は口唇上に刺突文を施すもの。10は頸部が強くくびれ、口唇部側面の貼付帯上には斜め方向から刺突文が施されている。11の口唇部には垂直に突く円形刺突文が施され、貼付帯上には縄線文が付されている。14は口縁部から垂下する地文施文後の貼付帯が、剥落したと思われる痕跡が残るものである。23・24は頸部の一番くびれた位置に貼付帯を巡らすものである。23は1段Lの原体による縄線文を施した貼付帯を2段巡らし、地文も同一原体の縦回転によるものである。胎土には海綿骨針を含む。24は3段R L Rの原体により、縄線文と地文を施している。拓影図には表れていないが、土器片は貼付帯に直行する沈線文から割れているようである。

15～20・25は縄線文を文様要素の主体としているもの。15は胴部が若干張り出し、口縁部は直線的に緩く内傾する。口縁部の上下を2条1組のL R原体による縄線文で区画し、ここに横方向に連続して、縄線文を円形に配する。16は波状口縁で、波頂部に深い刺突文を施し、2個1対の山形突起様を呈している。口縁に並行するものと、それぞれの突起より垂下する2条1組の縄線文が施されている。縄線文、地文の原体は2段L Rである。17・18は口唇上および口縁部に縄線文を施すもの。17は口唇部は、若干内傾する。器厚も薄く、焼成も良い。小型土器の破片の可能性がある。19・20は無文地に

縄線文を施すもので、粗雑である。19は口縁部が大きく開き、上位には沈線文、下位には1段Rの原体による2条の縄線文が施されている。口唇部断面形は外そぎの尖状を呈し、器厚も薄く堅緻である。土器片の内外面、割れ口は赤褐色を呈し、他とは趣を異にする。25は頸部に3条1組の縄線文を施している。それぞれの条は横環せず途切れ、破線状を呈している。26はL Rの横走ないしは横走気味の斜行縄文を地文とし、胴部上位に3条1組で下端を横位の沈線で直角に閉じる懸垂文が施されている。

21は縄文のみのもの。口唇部断面形が角状に整形され、口縁部が強く外反する。胴部には1段Lの原体による横走する縄文が施されている。22は無文土器である。

27~34は縄文後期前葉のⅡ群土器。28~30は縄文が施されないもの。28は櫛状工具により、文様を構成した後、浅い沈線により囲っている。29・30は同一個体片で深い沈線が施されている。器厚が厚く、径も湾曲していないことから大型の土器と思われる。27は頸部がくびれる鉢形土器。無筋Lを縁取った沈線により、文様帯を多段に区画し、「カニのハサミ状」の沈線文が垂下する。31・32は単筋L Rを縁取った沈線で文様を構成するもので、31は傾き、頸部のくびれから壺型土器と思われる。Ⅳb層上面から縄文中期の石棒と同一レベルから出土している（図版12-4）。32は胴部上半の破片で、胎土・焼成は良好で、無文部は磨かれている。33は網目状燃糸文を地文とし、沈線文が施されている。34は底部片で、側面は張り出さず直線的で、器面は磨かれている。縄文後期前葉のⅡ群土器は、遠藤香澄氏により編年細分が行われている（遠藤1988）。33は古手の「盛土1類」、ついて27~30が「盛土2類」、新しいものとしては、31・32が「盛土3類」に相当するものと思われる。（乾）

（石器）：（図Ⅲ-6・7・8・9）

石鏃（図Ⅲ-6 1）

1は先端が欠損している大型の有茎鏃である。

スクレイパー（図Ⅲ-6 2）

2は長軸上の端部側縁に急角度の刃部が形成されている。チャート製。

石斧（図Ⅲ-6 3）

3は緑色片岩製の磨製石斧片で、両側縁に斜めの擦痕がみられる。

すり石（図Ⅲ-6 4~9）

4は使用面の側縁に打欠きがみられる。5は両端に打欠きのあるすり石で、僅かな使用面が残っている。6は平坦面に広い使用面があり、その周縁には敲打痕がみられる。7・8は半円状扁平打製石器に似た形態をとる。9は両側縁に打欠きがみられるが、使用面はない。整形途中のものか。

敲石（図Ⅲ-6 10・11、図Ⅲ-7 12・13）

10は球状、11・12は円形、13は棒状の敲石。

砥石（図Ⅲ-7 14）

14は使用面の裏側の一方が窪んでいる。石皿の欠損品を利用した可能性がある。

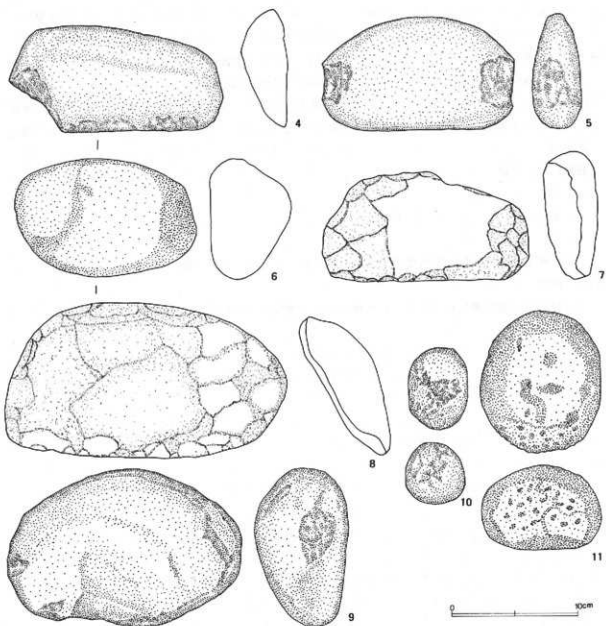
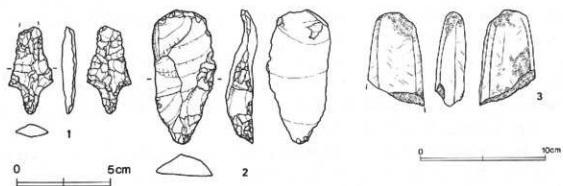
石皿・台石（図Ⅲ-7 15~18、図Ⅲ-8 19~21、図Ⅲ-9 22）

15は使用面の中央部が僅かに窪み、小さな敲打痕がみられる。16は使用面の周縁に、17は使用面に敲打痕がみられる。18・19は使用面にすった痕がみられる。20は縁辺部から使用面中心部にかけて大きく欠損している。21は使用面に敲打によって形成されたと思われる凹凸がみられ、周縁には打欠きがみられる。22には被熱したような痕がある。

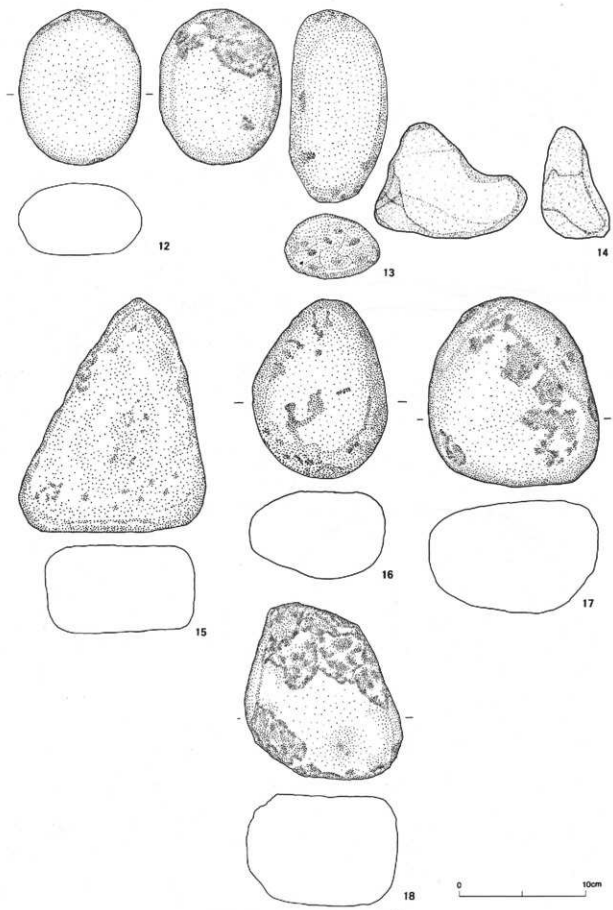
石棒（図Ⅲ-9 23）

23は先端部の欠損した砂岩製の石棒で、敲打調整が施されている。底面は平らで楕円形である。

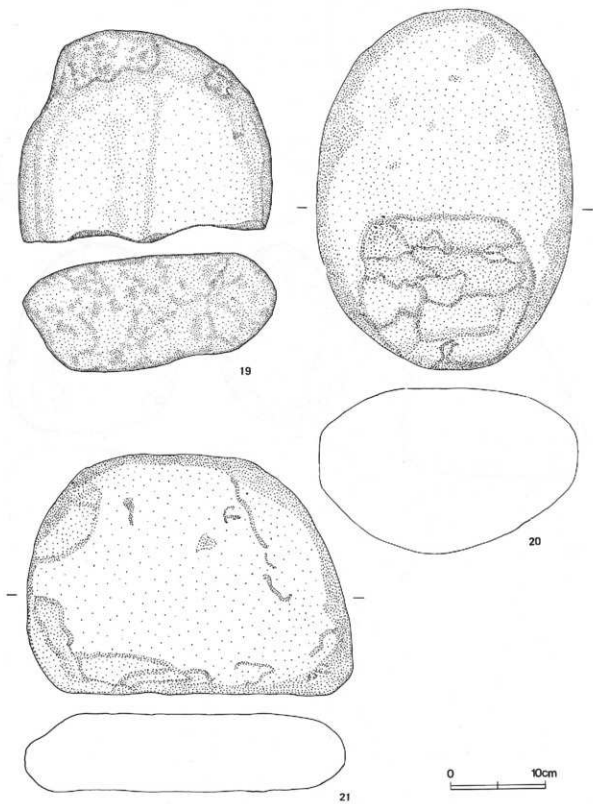
（村上義直）



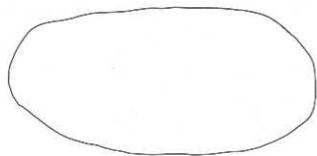
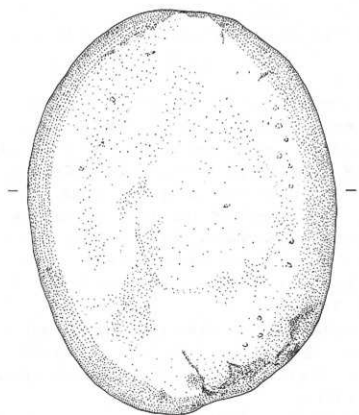
図III-6 0～1区出土の石器(1)



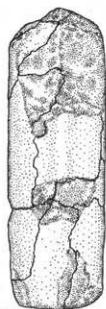
图III-7 0~1区出土の石器(2)



図III-8 0~1区出土の石器(3)



22



23



24



図III-9 0~1区出土の石器(4)

2. 2～4区の調査

(1) 調査の概要

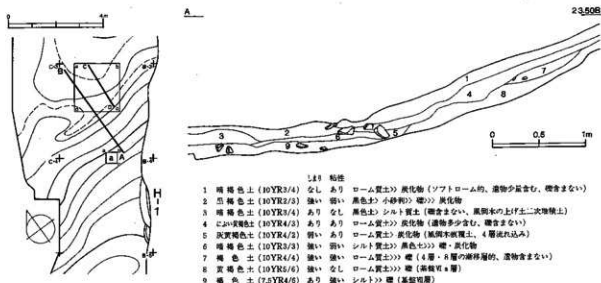
B-4区ではH-1が検出されており、遺構調査とはほぼ同時に包含層の掘削を進めた。掘削当初は見落としていたが、B-4区にはH-1の掘上げ土が堆積していることを確認した。B-2区では黒色土(Ⅲ層)を下げ終えた段階で、遺物や礫を面的にとらえることができ、B-3区へと広がるようであったため、遺物を残してB-3区に着手した(図版18-1)。

2～4区は地形の高低差が大きく、B-3区の北半からB-4区南半にかけては、高低差約1.8m、最大勾配約25°の北向きの急斜面となる。B-3区の南半からB-1区のテラス状落ち込みにかけては、緩斜面で北東方向へ開く浅い沢状地形を呈する。

堆積状況および遺物の出土状況も地形と同様なかたちに大別される。堆積状況では等高線に対して直行するかたちの堆積図(図Ⅲ-10)が両地区の違いを顕著に示している。斜面部では掘上げ土の一部を飛ばしてしまったが、炭化物を僅かに含むソフトローム(1層)が堆積し、下層に炭化物を少量含み、締まりのあるぶい黄褐色土(4層)を「掘上げ土下」としてとらえた。遺物は両方の層から出土しており、掘上げ土下位ないしは下のものでは、B-3区b-4(図Ⅲ-10-a、図Ⅲ-13-1)から集中出土土器が検出されている。B-3区c-1検出の土器(図Ⅲ-13-2)は出土状態や復元率も良いが掘上げ土の範囲外であったため、堆積図で層位関係を確認することができなかった。しかし、完全に黒色土Ⅲ層中に包含されていることから、より新しい時期の可能性がある。B-3区b・c-2では掘上げ土中位から集中出土土器と石皿、すり石が比較的狭い範囲で検出されている。掘上げ土下の遺物では、図Ⅲ-13-7がある(図版19-4)。

B-2およびB-3区北半の平坦部では基盤層中にみられる亜角礫が遺物包含層である黒褐色～暗褐色土中に多数みられ、これらの礫に混在して遺物が出土している。礫の広がり、急斜面の裾からB-1への浅い沢状地形にそって認められた(図版18-1)。B-2区では集中出土土器は検出されず、土器片も小片が多く、磨耗しているものが目立つ。

2～4区での遺物の接合関係があり、特に図Ⅲ-13-7の土器はB-3区b-2・c-3出土のものには炭化物が多量に付着しているのに対し、B-2区b-4の接合片は炭化物の付着もみられず若干



図Ⅲ-10 B-3区堆積図等実測ラインと堆積図

磨耗している。また、堆積状況や礫群の分布状況などから2～4区は斜面上のH-1の掘上げ土の一連のものと思われ、包含層中にも僅かに炭化物を含んでいる。

(2) 出土遺物

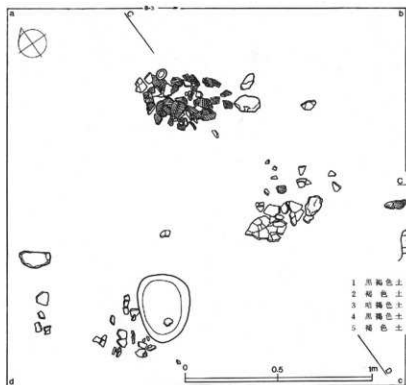
(土器)： 1～5は集中出土の遺物である。出土層位は1・3・4は掘上げ土下、2はIII層中位から下位、5は掘上げ土上ないしは中からである。

1は底部から胴部上半にかけて湾曲をもって開き、頸部へ若干内傾し、口縁部が強く外反する。平縁で2個1対の山形小突起を4か所に配すると思われる。口唇部には縄文が施され、断面形は隅丸の角状を呈する。それぞれの山形小突起から1条の貼付帯が垂下し、頸部の一番くびれた部位の横位の貼付帯につなげている。縦位の貼付帯の左右側縁には縄線文を施し、その後半截竹管による斜め方向からの連続した刺突文を施す。横環する貼付帯は縦位の貼付帯を境に左側は縄線文、右側は縦位の貼付帯と同様な刺突文が施される。貼付帯の上下側縁には縄線文が施され、下側縁のものには1条付加され、計2条施されている。地文はLR斜行縄文で、胎土には海綿骨針が含まれ、焼成は良好である。

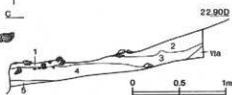
2は検出当初、折り返し状口縁と胴部の地文施文後の貼付帯から余市式と想定したものである。しかし、余市式期の遺物が皆無であること、頸部が若干くびれ、3条1組の縄線文が垂下することから当該期のものと思われる。器形は胴部中位で緩く張り出し、頸部も緩くくびれて口縁に至る。口縁は平縁で折り返し状の口縁である。口唇部断面形は角状に整形され、内面および口唇上は入念なミガキがはいり、にぶい光沢をもつ。胴部の張り出しのやや上位に縄線文を施す地文施文後の貼付帯が横環する。口縁部はこの貼付帯で区画され、折り返し状口縁から垂下する3条1組の縄線文により、横方向に8分割している。縄線文は縦位のものは2段LR、貼付帯上のは3段RLRの原体による。地文はRLRの斜行縄文で、密に施されている。

3は底部が若干張り出し、胴部中位まで緩く湾曲し、あまり開かないで立ち上がる。上位は若干内傾する。地文は斜行縄文で、器厚は薄く、焼成は良好で堅緻である。

4は底部が欠損しているが、底部から胴部中位まで緩く開き、上半はほぼ直立する。頸部は極度に

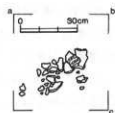
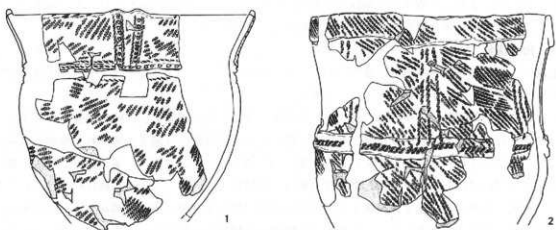


図III-11 B-3区遺物出土状況



- 149 科標
- | | | | | | |
|------------------|----|----|-------|-----|--------------------|
| 1 黒褐色土 (10YR2/2) | なし | 強い | 灰色土 | >>> | 砂粒 |
| 2 褐色土 (10YR4/4) | なし | あり | ローム質土 | >>> | 炭化物 (遺物少量含む) |
| 3 暗褐色土 (10YR2/3) | 強い | 強い | ローム質土 | >>> | 炭化物 (遺物少量含む、焼きまじり) |
| 4 黒褐色土 (10YR2/3) | 強い | あり | 黒色土 | >>> | ローム質土・砂粒 |
| 5 褐色土 (10YR4/4) | あり | あり | シルト質土 | >>> | 小砂粒 |

図III-12 B-3区集中出土土器層位関係図



復元土器1の出土状況 (a)



図III-13 2~4区出土の土器(1)

内傾し、強くくびれると思われる。無文を基調としているが、所々に無節Rの縄文が施されている。器面の一部には整形痕が残り、胴部は縦位に、頸部は横位に磨かれている。また、輪積み痕もみられ、器面調整は雑であるが、焼成は良好で、堅緻である。器内外面は全面、明赤褐色を呈している。

5は無文土器で底部を欠損している。胴部中位にかけて直線的に開き、上半は緩く内傾し、頸部が弱くくびれる。口縁部は僅かに外傾し、平縁であるが1か所に小突起をもつ。口唇部断面形は隅丸の角状、丸状、尖状と一定せず、口唇上には半截竹管による、ほぼ垂直方向からやや斜め方向からの刺突文が施されている。器面は成形時の凹凸が残るが、ナデ調整によりにぶい光沢をち、黄褐色から明赤褐色を呈している。焼成は良好で非常に硬質であるが、器面調整は雑である。

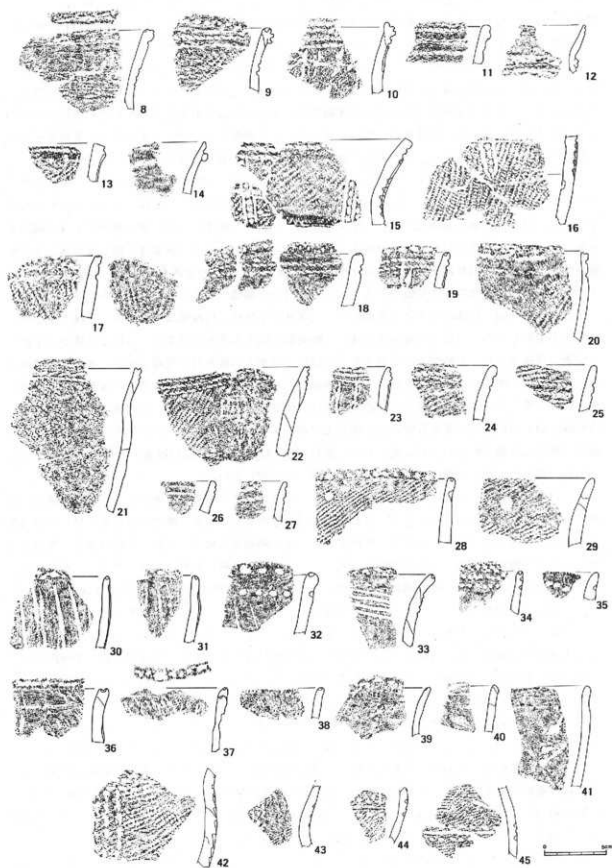
6は「Ⅲ層1回目」で取り上げられた土器片で、層別的に新しい時期の可能性がある。胴部上半で張り出し、頸部が僅かにくびれ、口縁部がほぼ直線的に僅かに外傾する。平縁で口唇部断面形は尖状を呈する。口唇部側面に縄線文を施した地文施文後の貼付帯が横環し、貼付帯下側縁にも浅く縄線文を施している。貼付帯を付した後に口唇上に縄文を疎らに施している。胴部は2段LR原体による粗雑で結束によらない羽状縄文が胴部の張り出し頂部、頸部のくびれの位置を節目として施されている。赤褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。ノックII式の範疇と考えて良いものであろう。

7は43~45と同一個体である。頸部が「く」字状にくびれ、口縁部は外反する。平縁で4か所に山形の突起をもち、口唇上に縄線文を施し、断面形は隅丸の角状を呈する。口唇より僅かに下がった位置に縄線文を施した貼付帯が横環する。上側縁は器面との縫ぎ目に縄線文を深く施す。下側縁は部分的に器面に撫で付いたり、横位に2条の縄線文を施したりと不安定である。口縁部は小突起下に横位の貼付帯を挟んで、粘土紐を折り曲げた貼付帯が垂下する。貼付帯上、外周縁に縄線文を付し、内周縁は斜め方向からの半截竹管による刺突文が垂下する。おそらく、この貼付帯から胴部へ沈線の両側に刺突文を施す43・44・45が続くものと思われる。43は頸部、44は口縁部から垂下するもの(43)と胴部の張り出し部分に横位に配されるもの(45)と直交している。

8~14は貼付帯ないしは隆起帯をもつもの。8・9は口唇上に刺突文を施すもの。8は口縁部が直線的に外反し、頸部がくびれるものと思われる。口唇部断面形は丸く、側面に貼付帯を付し、貼付帯上と器面との接合部である口唇上と下側縁の3条1組の縄線文を施す。口唇上の縄線文より内側には径2~3mmの棒状工具による円形刺突文が施される。口縁部は横位調整により、無文で、頸部のくびれのやや上の位置に3条1組の縄線文が横環する。頸部以下には横走るLRの縄文が施されている。

9は口唇部断面形は丸く、口唇上に半截竹管による斜め方向からの刺突文が施されている。口縁部の貼付帯上には縄線文を施し、比較的低平な断面形態である。頸部のくびれよりやや上の位置に2条1組の縄線文を施す。10は口縁部が緩く外反し、口唇部付近で直立する。口唇部側面の貼付帯には8と同様な位置に縄線文が施されるが、貼付帯下側縁のものには、もう1条付加される。口縁部縄線文からは短縄文様な縄線文が2条1組で垂下する。11は口唇部側面に縄線文を付した貼付帯を配している。口縁部には最低3条の縄線文を観察できる。12は頸部が強くくびれ、ここに縄線文を施した貼付帯を付す。波状口縁を呈し、口縁部に2条1組の縄線文を施す。13は地文施文前に粘土紐を完全に撫で付け、口唇部側面の断面形が三角形を呈する隆起帯をもち、頂部よりやや上位に縄線文を施し、2条1組の縄線文が垂下している。口唇部は工具により角状に整形されている。14は口縁が強く外反し、口唇部断面形は尖状を呈している。口縁部には断面形が精円形を呈する粘土紐を付し、上端は沈線を施して器面に撫で付けている。器面は横位調整により、無文である。

15~27は貼付帯がなく、縄線文が施されているもの。15・16は同一個体片で頸部がくびれ、口縁が強く外反する。内面および口唇部は入念なミガキ調整が施され、口唇部断面形は角状に整形され、に



図III-14 2～4区出土の土器(2)

ぶい光沢をもっている。口縁部には2条1組の縄線文が横環し、頸部には両側縁を沈線で縁取った円形刺突文が垂下する。拓影図右側のものは円形刺突文が2~3列で1単位となるようで、これを主区画文とし、左の単体で施されるものが従区画文と思われ、器面を8分割している可能性がある。頸部のくびれから、やや下がった位置にも横位の沈線がみられるが、割れ口となっているため、以下の文様は不明であるが、同様な刺突文を囲うものであった可能性がある。16は胴部片である。割れ口の横位の沈線文より下端を「U」字状に閉じる懸垂文に円形刺突文を施している。3条1組の懸垂文を施した後、中央の沈線上に円形刺突文を施している。地文は口縁部では斜行縄文で胴部以下は縦走気味の整然とした斜行縄文となるようである。胎土は、他の土器よりも長石、角閃石、金雲母などの鉱物を多く含み、焼成は良好で堅緻である。17は口唇上に僅かに刺突を施した痕跡がある。口縁には2条の3段RLRの原体による縄線文が施され、地文や内面にも同一原体による縦走ないしは縦走気味の斜行縄文が施されている。18は口唇上に半截竹管による垂直方向からの刺突文が施され、口縁には2条1組の縄線文が巡る。19の口唇上の刺突文は斜め方向から深く施されるもので、口縁には2条1組の縄線文を施し、同じく2条1組の沈線が垂下する。B-4区a-3の「IV層2回目」で取り上げられている土器片であるが、同一個体片(接合片)がC-7区c-2の掘上げ土下から出土している。両方とも掘上げ土中ないしは下より出土していることから、H-2よりも古い遺物の可能性がある。

20~22は口唇上に縄線文を施すもの。20は口縁が若干内傾する小型の土器である。口縁部に間隔をあけて2条の縄線文が施され、縄線文間にはナデ調整により磨消され、器厚が他より若干薄く、くびれる感じを呈する。胴部はLRの斜行縄文である。21は胴部が張り、頸部が緩くくびれる土器である。口唇部断面形は隅丸の角状を呈している。口縁部には2条の縄線文が横環し、下段と口唇上の縄線文は2段LRの原体で施され、口縁部の上段のものは3段RLRによるもので、地文もこの原体で施文されている。復元土器5の近位置から出土し、層位も掘上げ土と思われる「暗褐色土」中からである。両者共に器形のくびれは弱い。22は僅かに脹りをもって口縁が外反し、緩い波状口縁を呈すると思われる。口縁に並行して3条1組の縄線文が施され、波頂部より頸部に横環する縄線文へ5条の縄線文が垂下している。23は口唇部断面形が外そぎの尖状を呈し、口唇部側面に3条1組の縄線文が施され、口縁部には4条の縄線文が垂下している。24~27は口唇部断面形が丸形(24・25)ないしは隅丸の角状(26・27)を呈し、口縁部に縄線文が2条1組で施されているもの。

28・29は縄文のみのもの。28は僅かに外傾する口縁部で、口唇上にはほぼ垂直方向からの円形刺突文が施されている。左側には土器焼成後の未貫通の補修孔と思われる削孔がある。29は口縁が若干外傾し、口唇部断面形がやや尖状を呈する。左側の割れ口には縦位の縄線文が観察でき、割れ口には器面からの黒褐色部分が続く古いもので、補修孔の対象となった割れ口と思われる。器厚は厚手であるが焼成は良好で非常に堅緻である。特異な器質をもち、東北北部で大木9~10式並行土器にみられる縄文のみの粗製土器かもしれない。

30~33は無文地に沈線文を施すもの。30・31は同一個体片で口縁部が僅かに内湾する。口唇部断面形は丸く、半截竹管による斜め方向からの刺突文が施されている。口縁部には無文地に口唇上の刺突文と同一工具によると思われる縦位ないしは縦位気味の斜位に垂下する沈線文(条線)が施されている。胎土は砂粒を多く含み、割れ口には平行組織が観察でき、焼成は良好で堅緻である。おそらくはB-1区出土のもの(図Ⅲ-3-2)と同一タイプと思われる。32は口縁部が僅かに外傾し、若干肥厚している。口唇部断面形は丸く、口唇上に30・31同様な刺突文が施され、口縁部も同様な沈線文が施されている。沈線文の上位に円形刺突文が施されている。一部内面にも僅かに低いコブがみられる。33は頸部が直立し、口縁は外反して緩い波状を呈するものと思われる。口唇部断面形は丸く、口唇上

には竹管による斜め方向からの刺突文が施されている。頸部には4条の横走る沈線文が施されている。

34・35は刺突文のみ施されるもの。34は口唇上および口縁部に2段の先端が尖る細い棒状工具による垂直方向からの楕円形の刺突文が施されている。35は口唇部断面形が内削ぎの尖状を呈し、口縁部に斜め方向からの半載竹管による刺突文が施され、僅かにL Rの斜行縄文を確認できる。

36～39は無文地の土器であるが、口唇上に刺突文を施すもの。36は口縁部が僅かに外傾し、口唇部断面形が隅丸の角状を呈している。口唇上には刺突文を施し、次の刺突文へ間を沈線様に工具を引いている。刺突は半載竹管と思われるものを垂直方向から施文している。口縁部には、約1.5 cm幅で折り返し口縁様に、成形痕を意図的に残している。37は2個1対の山形突起をもち、半載竹管による垂直方向からの刺突文が施されている。口縁部には刺突文と同一工具によると思われる、縦位の調整痕がみられる。38はB-2区c-4からの出土で、B-3区b-1・b-2から出土している復元個体(5)と同一個体片である。復元は2分の1程度で、その反対面の破片と思われる。復元破片の出土層位は「IV層中位」で取り上げられているが、堆積層より掘上げ土の中位ないしは上からの出土であることを確認している(図III-12)。この層位と接合関係より、横倒しの状態で掘上げ土を被り、下部は掘上げ土中に取り残され、上部は地表面に晒され、斜面下のB-2区へ流れたものと思われる。39は口縁部が外反し、口唇部断面形は丸い。口唇上の刺突文は器面に出たり、器内面に入ったりと不安定である。口縁部には横位の擦痕を残す調整痕がみられる。

42は頸部から胴部上半にかけての破片で、頸部のくびれる部位に3条1組の半載竹管による斜め方向からの連続する刺突文が施され、縦位に3条1組の同様な刺突文が垂下している。(乾)

(石鏃) : (図III-15・16・17)

石鏃(図III-15 1~7)

1・2・3・4・6は凸基有茎鏃であり、5は尖基風、7は不明である。3は茎部が太めに作り出されている。4は主剝離面を残す厚手の石鏃である。

石槍(図III-15 8~10)

8は長い茎部をもった厚手の石槍である。9は先端部の欠損した薄手の石槍である。10は欠損品だが、基部、茎部の大きさから比較的大型の石槍と思われる。

スクレイパー(図III-15 11~12)

11は背面の右側縁に、12は左側縁に急角度の刃部が形成されている。

R・フレイク(図III-15 13~14)

13は背面右側縁の一部に細部調整が施されている。14は縦長剥片を素材としたもので、背面左側縁に細部調整が施されている。

U・フレイク(図III-15 15~17、図III-16 18~20)

15は横長剥片を素材としている。16は背面左側縁に刃部があり、ヒンジフラクチャーがみられる。

17・18には原石面が残っている。19・20は背面右側縁上部に刃こぼれがみられる。

石斧(図III-16 21)

21は緑色片岩製の磨製石斧片で、刃部付近のものと思われる。擦痕がみられる。

すり石(図III-16 22~29)

22は使用面がボロボロになっている。23は背面、腹面の周縁に打欠きがみられ、最大幅1 cmほどの使用面をもつ。24は両側縁周辺に打欠きがみられ、最大幅1.5 cmほどの使用面をもつ。25は半円状扁平打製石器に似るが、最大幅2.5 cmほどの広い使用面をもつ。26は扁平な礫を素材としたもので、最大幅

1.5cmほどの使用面をもつ。27は最大幅2cmほどの使用面をもつ。28・29は、使用面が不明瞭である。
 敲石 (図III-17 30~36)

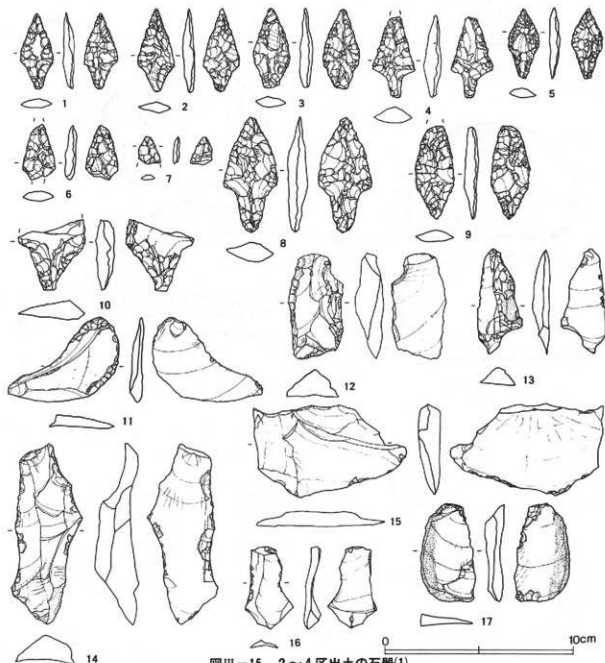
30・31は一端に敲打による窪みがみられる。32は両端に敲打痕がある。33・34は断面が三角状の棒状の敲石。35・36は円形の敲石。

石皿・台石 (図III-17 38)

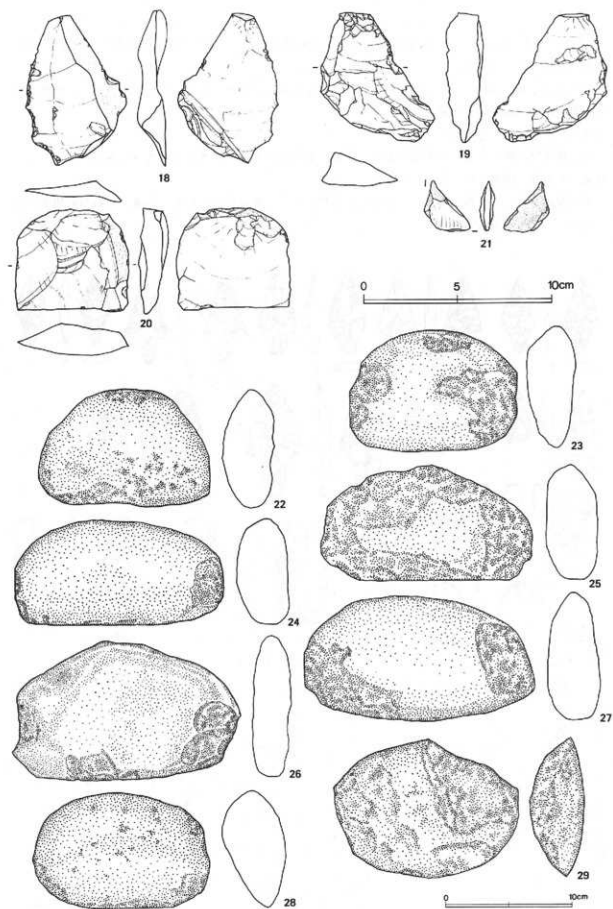
38は使用面に敲打によって形成されたと思われる凹凸があり、周縁にも打欠きがみられる。

青竜刀形石器 (図III-17 37)

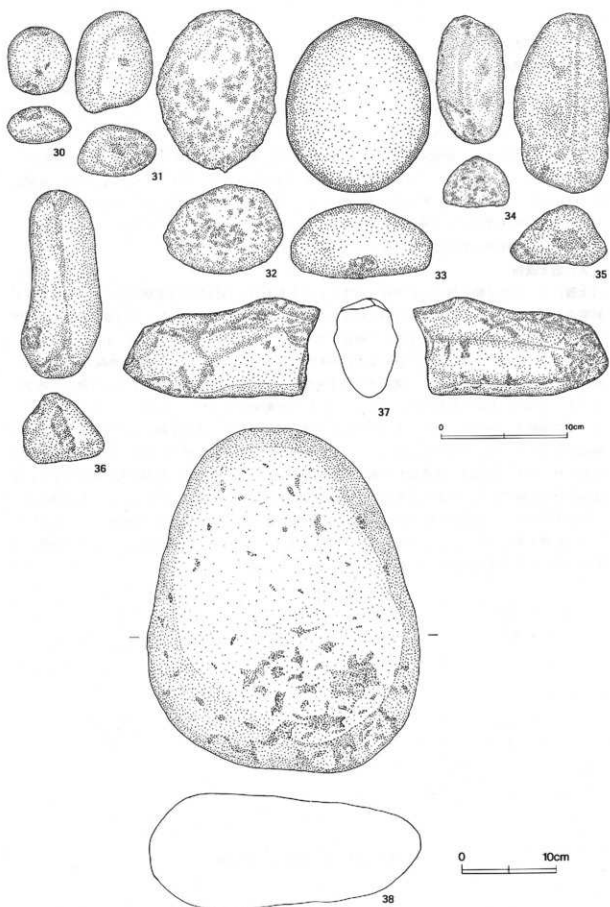
37は周縁を打欠いた後、みがいて整形したと思われる。擦痕がみられる。青竜刀形石器の祖形のようなものか。凝灰質砂岩製。
 (村上義直)



図III-15 2~4区出土の石器(1)



図III-16 2~4区出土の石器(2)



图III-17 2~4区出土の石器(3)

3. 5～6区の調査

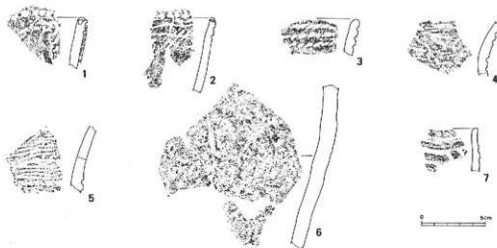
(1) 調査の概要

当初からカッティングで住居址の存在を確認しており、B-5区ではグリッドのほぼ半分を、B-6区では全域、C-6区では約3分の1がH-2によって掘り込まれている。このため、当発掘区の包含層調査は、H-2の窪地に堆積した包含層とH-2の掘り込みによる破壊を免れた僅かな範囲にとどまった。この区は、発掘区の中でもっとも高い位置にあり、標高25m前後の西へ伸びる尾根のやや南よりにH-2が構築されており、その掘上げ土の多くはA・B-7区へと広がっている。堆積状況では、H-2の掘上げ土が若干認められたものの、包含層は薄く、遺物の出土量も少なかった。ただしH-2の堅穴窪地の包含層や覆土上層からは入江系の土器や大型の砥石・礫が近位置で出土しているなど、縄文後期前葉にH-2の窪地を利用していた可能性がある。(乾)

(2) 出土遺物

(土器) : 1は2個1対の山形突起を有するものと思われ、口唇上には半截竹管による刺突文が施されている。突起間より粘土紐を折り曲げた山形の貼付帯を付し、貼付帯上には半截竹管による刺突文が施され、口縁に平行した縄線文も施されている。2は直線的に開く小型土器である。口唇部にはやや斜め方向からの竹管による円形刺突文が施され、口縁部には2条の縄線文が施される。胴部は無文を基調としているが、縄線文の施文原体と同一のものによる、無節Lの斜行縄文が施されている。全体的に非常に粗雑な作りである。3は口唇部断面形が丸く、口縁部には2段RL原体による3条の縄線文が施されている。4はくびれる頭部の破片である。2条1組の2段RL原体による縄線文が施されている。5は頭部の破片で、くびれる部位に2～3条1組の2段LR原体による縄線文が施されている。地文は一部重複して密に横走する縄文が施されている。色調は明赤褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。内面も丁寧なナデ調整がはいる。ノグップII式と考えられる。6は無文で、大型な土器である。焼成は良好で堅緻であるが、器厚も厚く器面に凹凸が目立ち粗雑な作りである。

7はII群土器である。頭部がわずかにくびれる深鉢ないしは鉢形土器口縁部と思われ、沈線間には櫛状工具による条線の痕跡がみられる。(乾)



図三-18 5～6区出土の土器

(石器) : (図Ⅲ-19・20)

石鏃 (図Ⅲ-19 1~7)

1~4は凸基有茎鏃である。5は厚手で粗い調整の石鏃である。6は厚手の石鏃で、背面に比較的高い稜がみられる。7は尖基風である。

石槍 (図Ⅲ-19 8)

8は主刺離面が残る有茎の石槍である。

スクレイパー (図Ⅲ-19 9~12)

9は石筈状の形態で、両側縁に刃部が形成されている。10は背面左側縁に急角度の刃部が形成されている。11は主刺離面左側縁に刃部が形成されている。

R・フレイク (図Ⅲ-19 13・15・16・18)

13は横長剥片を素材としたもので、縁辺の一部に細部調整がみられる。15は背面右側縁に細部調整がみられる。16は背面右側縁の一部に急角度の刃部が形成されている。18は縦長剥片を素材としたもので、片側縁にノッチが形成されている。

U・フレイク (図Ⅲ-19 14・17)

14は縁辺の一部に刃こぼれがみられる。17は背面左側縁の刃部が摩滅している。

すり石 (図Ⅲ-20 19・20)

19は周縁に打欠きがみられる。20は縁辺の一部分から中心部に向かって打欠きがみられる。

敲石 (図Ⅲ-20 21~23)

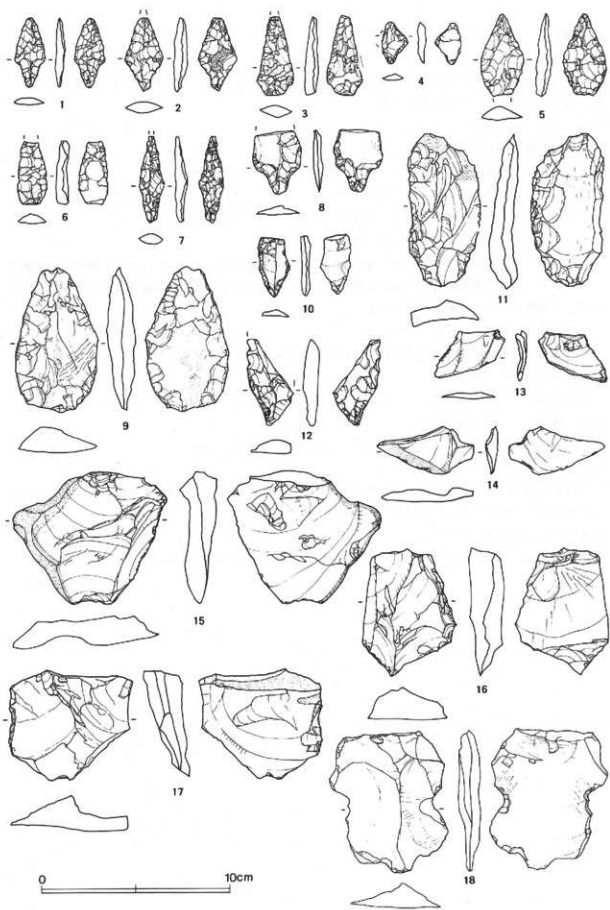
21・22は楕円状の礫を用いた敲石である。23は両端に打欠きがある。

砥石 (図Ⅲ-20 24・25)

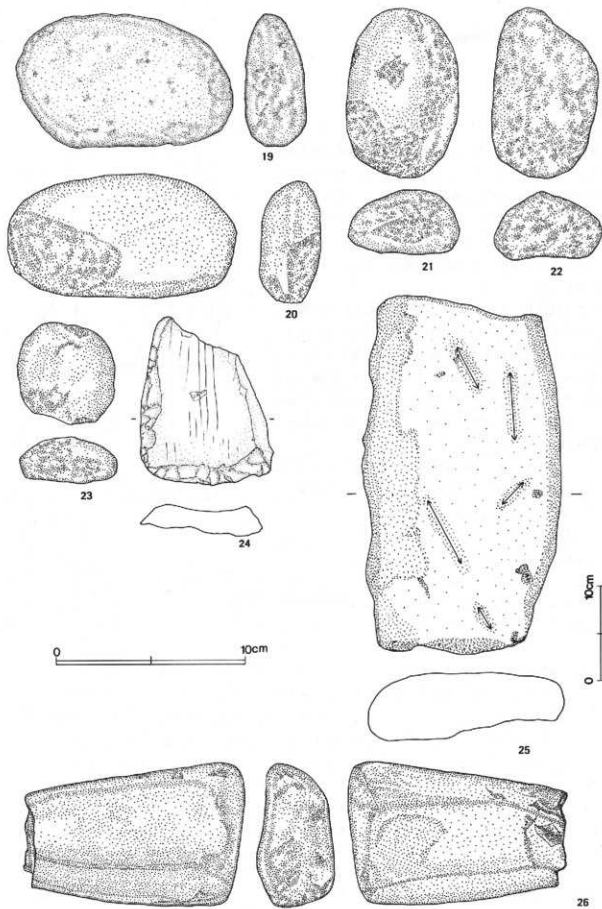
24は安山岩製の砥石で、周縁に打欠きがみられる。使用面には溝状の擦痕が複数みられる。25は安山岩製の大型の砥石で扁平な使用面に擦痕が複数みられる。

青竜刀形石器 (図Ⅲ-20 26)

26は扁平な原石面が数面あり、みかいて整形したと思われる。青竜刀形石器の祖形のようなものか。
凝灰質砂岩製。 (村上義直)



図III-19 5～6区出土の石器(1)



図III-20 5～6区出土の石器(2)

(1) 調査の概要

道路に面するカッティングを観察したところ、8ライン付近から南側にかけて黒色土が厚く堆積しているのを確認した。また、これに伴うものとして遺構の覆土を示すような土層もみられた。以上のことから大きな住居址を想定し調査を進めた。調査するにあたり2本のセクションベルトを含む4本の土層観察用のベルトを設けた。

調査の結果、当初、遺構の覆土と考えた部分はH-2の掘り上げ土が低い方へ流れて堆積したものであることがわかった。

この区はH-2の立地する場所よりも低い所にあり、H-2から8ライン付近にかけて緩やかな傾斜が続き、8ラインより南側はほぼ平坦面となる。掘り上げ土の分布は8ライン付近までである。8ラインより南側は水捌けが悪く、厚く堆積する黒色土の下には粘土質の暗褐色土(V層に対比)が薄く堆積していた。ここではV層の堆積はみられなかった。

掘り上げ土の中には炭化物が含まれ、またその下の層の一部では炭化物を多く含む層がみられた。この層からは水洗選別による結果、炭化物と共に黒曜石のフレイク・チップが少量検出された。

この区における土層堆積状況は、住居址より北側の発掘区とは様相が異なるようであり、そこには水の影響が考えられる。

(2) 遺物の出土状態

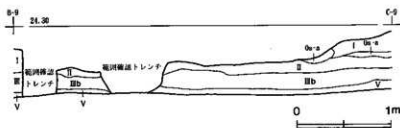
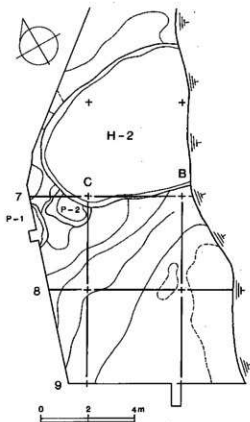
この区からは、土器の集中が5箇所(A-7で1箇所、B-8で2箇所、C-8で2箇所)、フレイク・チップの集中が1箇所(A-7～B-7)検出された。遺物の出土層位はⅢ層からⅣ層または掘り上げ土にかけてが主であったが、中には粘土質の暗褐色土の中から出土するものもあった。

土器は小型のものが多く、完形になるものはなかった。出土は8ラインより南側の平坦面に多くみられ、ここは廃棄場のような所と考えられる。

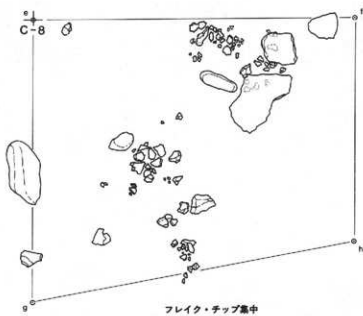
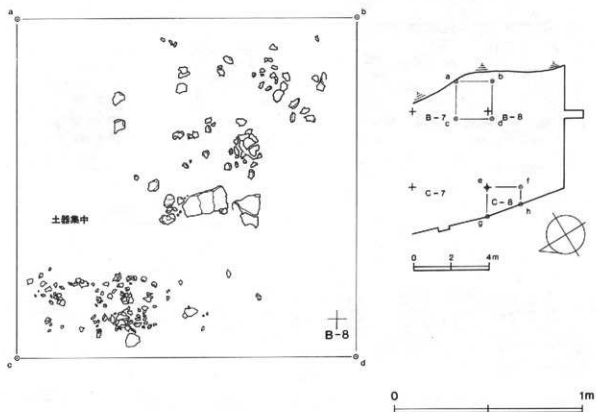
フレイク・チップの集中は掘り上げ土の末端付近から検出されたが、これは当初、掘り上げ土上にあった作業面あるいは廃棄面(どちらかは不明)に掘り上げ土が再堆積した結果と考えられる。

※ここで用いる土器の集中とは、ほぼ一個体分の土器片か、ある程度還元可能な土器片が、ある範囲内において、まとまった状態で出土したものを指す。また、フレイク・チップの集中とは、ある範囲内において、同一母岩と思われるものを含むフレイク・チップがまとまった状態で出土したものを指す。

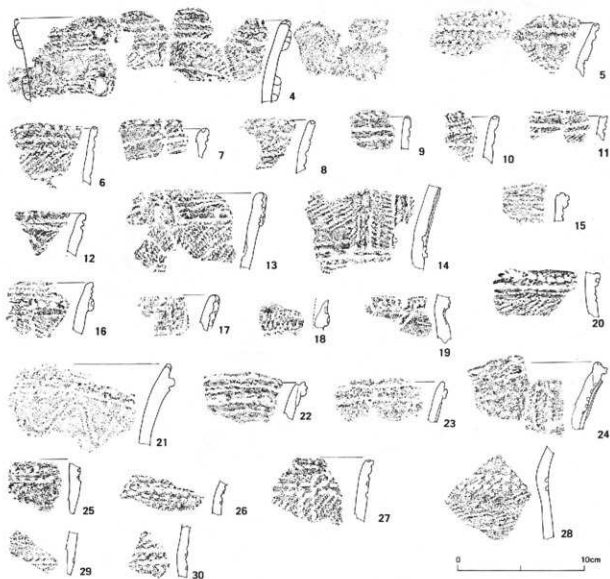
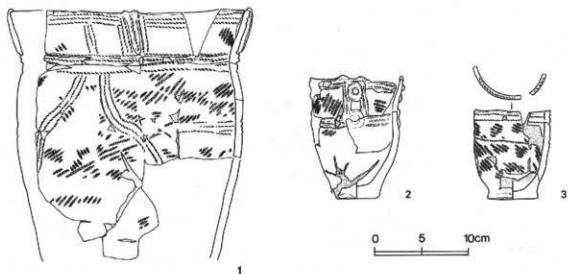
(村上義直)



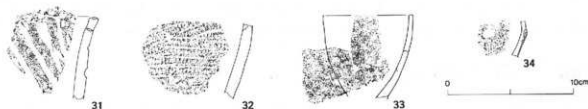
図III-22 9ラインセクション図



図III-23 7～8区遺物出土状況



図III-24 7～8区出土の石器(1)



図Ⅲ-25 7～8区出土の石器(2)

(3) 出土遺物

(土器)：(図Ⅲ-24・25 すべてI群土器)

1はA-7区出土の土器である。深鉢形で口縁部がかかるく外反し、口縁部には2つの頂部をもつ山形の小突起がみられ、おそらく4カ所あるものと思われる。ここから縦に延びる貼付帯は頸部を巡る貼付帯付近まで垂下している。口縁部には口縁と平行に3条の縄線文が、頸部には貼付帯を挟むように2条の縄線文が施されている。2つの貼付帯の間には部分的に縄線文が縦走し、貼付帯上には縄線文が施されている。胴部には、まばらな斜行縄文と頸部から延びる3条単位の縄線文が曲線となして施されている。また胴部には横走る縄線文もみられる。

2はB-8区出土の小形の深鉢形土器で、口縁部は僅かに外反し、平底である。地文は斜行縄文である。口縁には2つの頂部をもつ山形の小突起がみられ、この頂部から垂下する貼付帯は口縁部と頸部を巡る2つの貼付帯に接続している。垂下する貼付帯の間にはボタン状の貼付が上下にみられ、貼付帯上には縄線文が施されている。また口縁部と頸部それぞれの貼付帯の上下にも縄線文が施されている。

3はB-8区出土の小型の深鉢形土器で、底部は張り出している。口唇上には縄線文が施され、1箇所だけ山形の小突起がみられる。地文はLRの斜行縄文で、口縁部には2条、胴部には1条の縄線文が施されている。胎土には多量の砂粒が含まれている。

4～12は口縁部を巡る貼付帯がなく、口縁と平行に縄線文が施される土器である。殆どの土器に口唇部の施文がみられる。4は口縁部に3条の縄線文が、その下に少し間をおき2条の縄線文が施されている。この間には3本単位の縦位の縄線文が施されている。口縁部にはボタン状の貼付が部分的にみられ、これらは縄線文で繋がっている。5～10は口唇に刺突が施されている。これらは円形竹管あるいは棒状施工具を用いて斜めから刺突したものと思われる。11は口唇に縄線文が施されている。

13～23は貼付帯を有する土器である。13～15は貼付帯に縄線文が施されたものである。13には横位の貼付帯と馬蹄形の貼付文が、また貼付帯の上下には縄線文が施されている。14は縦位の貼付帯に縄線文が施される他に、横位の貼付帯には刺突が施されている。15は口縁に沿う貼付帯上に1条の縄線文が、その下に3条の縄線文が、また口唇部には2条の縄線文が施されている。16～20は貼付帯に刺突が施されたものである。16・17・20は5～10と同様の施文法である。18は刻線状の刺突が施されている。19は半截竹管による刺突が施されている。21～23は貼付帯上に縄線文がないもので、21は口縁部に波状の縄線文が施されている。22は折り返し状の口縁に沿う貼付帯がみられる。23は貼付帯の上下に1条の縄線文が施されている。

24～30は刺突文の施された土器である。24は円形竹管による刺突が施されている。25・27・28は棒状工具により、やや斜めからの刺突が施されている。26・30は棒状工具による刺突の他に竹管様の工具による斜めからの刺突が施されている。29は竹管による斜めからの刺突が施されている。

31は磨かれた器面に斜位の条線が施され、口唇部には刺突が施されている。32は異条斜行縄文が施さ

れている。33は無文のミニチュア土器である。34は薄手の土器で、円形の刺突文、細い沈線で描かれたワラビ状態垂文などが施されている。これらの特徴は大木9式の後半に相当するものと思われる。

(村上義直)

(石器) : (図Ⅲ-26・27・28)

石鏃 (図Ⅲ-26 1~4)

1は厚手の有基石鏃の欠損品である。2は尖基風である。4は基部である。

石槍 (図Ⅲ-26 5)

5は厚手の有基石槍で、比較的高い穂をもつ。

スクレイパー (図Ⅲ-26 6~10)

6は両側縁に連続した刃部が形成されている。7は背面右側縁に長い刃部が形成されている。8は粗い両面調整が施されている。10は基部状のものがみられ、石鏃の可能性がある。

R・フレイク (図Ⅲ-26 11~17)

11は石質により、剥離が不明瞭である。12は背面右側縁に、13は背面上部に細部調整が施されている。14は横長剥片を素材としたもので、主剥離面に連続した細部調整がみられる。15・16は小型の剥片を素材としたものである。17は背面右側縁に細部調整がみられる。

U・フレイク (図Ⅲ-26 18~26)

18は縦長剥片を素材としたもので、両側縁に刃こぼれがみられる。29はブレード状の縦長剥片を素材としたもので、両側縁に刃こぼれがみられる。20は両側縁に刃こぼれがみられる。21はノッチ状に湾入している部分が摩滅している。22は縦長剥片を素材としたもので、両側縁の一部に刃こぼれがみられる。23は腹面の末端部に刃こぼれがみられる。24・25は背面の左下側縁が摩滅している。26は周縁の一部に刃こぼれがみられる。

石斧 (図Ⅲ-27 27)

27は蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部付近には、幅3mmほどの何かを引きずったような溝が2本みられる。

すり石 (図Ⅲ-27 28~32)

28は周縁に打欠きがみられ、使用面の最大幅は1.5cmほどである。29は周縁の一部に打欠きがみられ、使用面の最大幅は1cmほどである。30~32は、すり石の素材と思われる。

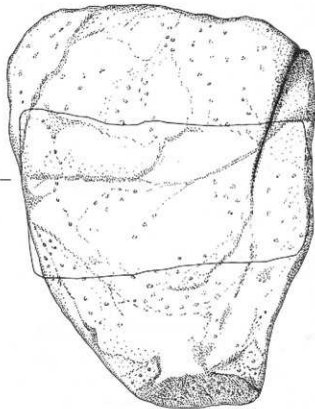
敲石 (図Ⅲ-27 33~37)

33・36・37は棒状の礫を用いたもので、33には両端に敲打痕がみられ、36には擦痕もみられる。34は球状、35は楕円形状の敲石である。

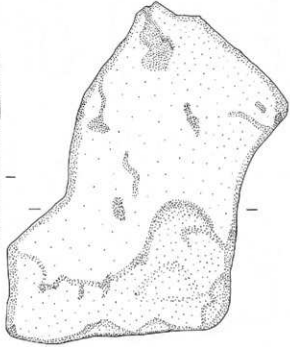
石皿・台石 (図Ⅲ-28 38~41)

38は使用面が若干の窪みをもつ。39は板状の礫を利用した台石で、炭化物をすりつぶしたような痕がみられる。40は使用面が窪み、石皿の欠損品と思われる。41は使用面に敲打によるものと思われる凹凸がみられ、周縁部には打欠きがみられる。

(村上義直)



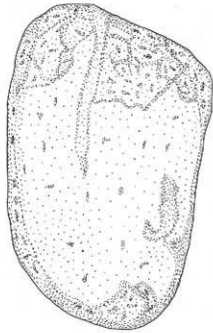
38



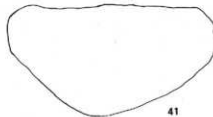
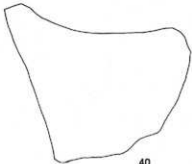
39



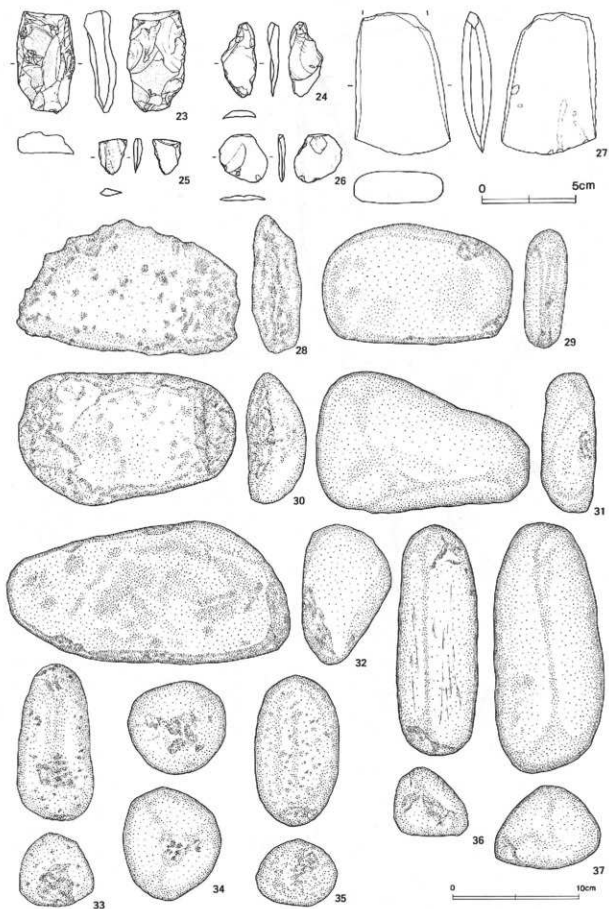
40



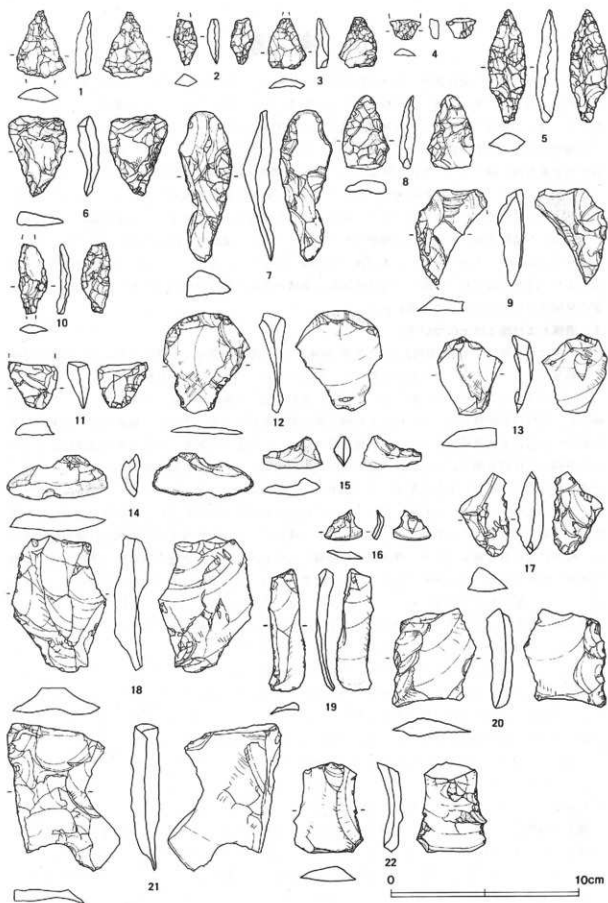
41



図III-26 7～8区出土の石器(1)



図III-27 7～8区出土の石器(2)



図III-28 7～8区出土の石器(3)

IV 考 察

長浜2遺跡における発掘調査では縄文時代中期後葉の大安在B式からノグッII式の時期に相当する2軒の住居址、2基の土壇、住居構築時のものと考えられる掘上げ土を2か所確認することができた。その他、包含層からは縄文時代後期前葉の入江系沈線文土器も出土しており、先史時代においてこの場所が少なくとも2期にわたって利用されていたことが分かった。これらの遺構の分布傾向は、海岸の北東方向へ張り出した舌状の尾根伝いに並び、遺構間の新旧関係は切り合いや掘上げ土よりP-1・P-2→H-2という序列が考えられそうである。縄文時代中期後葉の遺跡としては今のところ島内では他に3か所ほど発見されており、全て、段丘先端部ないしは海岸沿いの縁辺部に立地している。うち、1遺跡を除いて住居址が確認されており、これらの遺跡では段丘先端部（縁辺部）から基部にかけて住居址、土壇が分布し、本遺跡と同じ傾向を示しているものと思われる。本遺跡も現道敷段により一部削り取られているが、段丘先端部に遺構が存在していた可能性もあり、さらに、段丘基部の発掘区外へも広がるものと思われる。

1. 遺構および掘上げ土について

H-1は現存部分で北東-南西2.2m×北西-南東0.2mと僅かな部分しか残っておらず、土壇の可能性も指摘できるが、覆土・壁の状況がH-2と類似することから住居址と判断した。

H-2では竪穴の半分以上が残っていたものと思われる。北東方向へ張り出す尾根と同一方向の長軸をもつ長楕円形の竪穴で、炉、柱穴も長軸方向に配列されている。これらの施設の中には床土が貼られているものを数基確認でき、2回の増改築を行っているようである。柱穴の多くは柱材より大きい穴を掘り、柱材を据えてから周囲を掘り上げた土で埋め戻し、柱を固定するものであった。1例だけ礫を柱穴内の埋め戻し土中に配するものがあつた（図II-8-HP-7）。

その他の土壇として、炉の長軸上の海岸方向に位置するHP-24があるが、当該期の住居址に特徴的な「先端部ビット」の可能性が考えられる。この種のビットは中期後半特に覆林式以降の住居址内に一般的に見られる施設である。墳底に炭化物層をもつものとしては、恵庭市南島松3遺跡A地点3号住居跡：柏木川式期（松谷1992）がある。小笠原忠久氏は臼尻B遺跡における一連の調査から「先端部ビット」の覆土中に炭化物が多いことに注意し、「儀礼上の火の存在」という見解を述べており、（小笠原1986）HP-24の墳底に炭化物層が存在することから小笠原氏の指摘に沿うものであろう。覆土を水洗し、微細遺物の回収を行った結果、覆土中の小砂利が炉のものに比べてほとんど被熱していないことから、一時的に火を焚き、埋め戻したと考えられる。埋め戻しの土は、ロームブロックや焼土ブロック、炭化物を含むことから周囲の炉の土や床土を用いた可能性がある。また、埋め戻しの覆土からは不純物の混ざらない良質な黒曜石製のスクレイパー（図II-16-78）が出土している。他の頁岩製のものより精巧緻密に作出され、形態も他にはみられない特異なものである。

炉跡は10基確認したが、石組を配するものは検出されなかった。ほぼ竪穴長軸方向のやや北よりに一直線上に配されている。HF-7・10は重複するそれぞれのビットよりも新しい時期のものと考えられるが、ビットに切られている炉は確認できなかった。

覆土の特徴としては、土のしまり具合などから覆土上層と下層に大別でき、上層は赤味が強いローム質土で炭化物を少量含み、しまりがなくソフトローム的であり、自然流入の2次堆積土と考えられるものである。これに対し、覆土下層は同じくローム質土を主体としているが、基盤層の色調に近く、しまりもあり、上層のものとは対照的である。上層の覆土を竪穴埋没過程の流れ込み土と考えた場合、覆土下層のものを、登別市千歳6遺跡で瀬川拓朗氏が述べている（大島・瀬川1982）住居の「上層を

覆っていたローム」と考えたい。住居の構築に伴って、竪穴の周囲にある程度の高さにローム質土を掘り上げ、その一部を上屋構造に被せたとと思われる（5層・6 a層）。

A-C-7区に広がる掘上げ土と考えられる土層については、分布の範囲からH-2のものであることは大過ないようである。掘上げ土は赤味のある暗褐色土～黒褐色土であり、竪穴内部への流入のものよりも黒色土を含む比率が高い。特に先端部では黒色土III層へと漸移的变化し、掘上げ土が風雨により流出していた可能性が高い。また、色調と共に炭化物を少量含むことが周囲の包含層とは異なっており、容易に区別が可能であった。掘上げ土の堆積状況は一部で掘上げ土中に焼土の投棄を確認できたことから、H-2の増築に伴って、2期以上に分層できた可能性があったが、明確に分けることはできなかった。掘上げ土の特徴的な点としては、その直下に炭化物を多量に含む黒褐色土の一面が存在することである（図I-7-6層、図II-25-5・6層、図II-29-5層）。炭化物の包含量は今回調査した範囲において一番多く、木炭粒の遺存状態が良好で大きい物では、20mm程度、平均して5～10mm程度のものである。本来包含層一面に広がっていたものが掘上げ土によりバックされ残ったものと想定したい。図II-25-5層、図II-26-1の完形土器内部の土壌サンプル、図I-7：B-7～B-9-6層を水洗して微細遺物の回収を行ったが、サンプル中の小砂利はH-2の炉のように被熱した形跡は認められず、この場所で継続的に火を焚いたとは考え難い。また、これらの炭化物はH-2の掘上げ土下であることから、H-2構築以前に大量の炭化物を生成する活動が行われていたことが分かる。P-1・2はH-2より古い時期に構築されており、これらの遺構との関連性も考えなければならぬであろう。しかし、現在残っている炭化物は本来の一部にしか過ぎないと思われ、これ以上の大量の炭化物を残すとした場合、単に生活を営んでいくうえで生成される量とは思えず、想像の域であるが、住居構築に伴う空間確保のための焼き払いが行われていたのではなかろうか。集落形成時の周囲の植生など多角的な分析を必要とするが、今後、他の遺跡における住居址周辺の堆積状況等を比較検討していかなければならぬであろう。

掘上げ土はB-3・4区でも確認できた。やはり赤味が強く、炭化物を僅かに含み、しまりのないソフトローム的な再堆積土であった。掘上げ土の下はしまりのあるにぶい黄褐色土で炭化物を少量含む層であった。位置関係から斜面上のH-1の掘上げ土と思われる。掘上げ土下の層が掘上げ土よりも炭化物を多く含むことは、A・B-7区の様相と共通する。この区では掘上げ土の上ないしは中と掘上げ土下で遺物を取り上げることができたが、遺物に関しては後記にふれることとする。

2. B-1区の集中出土土器について

B-1区b-3より7個体の土器が押し潰れた状態でまとまって出土している（図III-1）。出土状態からこの場所に持ち込まれ、廃棄されたものと思われる。これらの土器は包含層出土であるため厳密にいう「一括資料」としては扱い難い。しかし、これらの土器は地形的な面から絶対高こそ異なるが、各個体間の土器片と土器片の間に黒色土等の間層を挟まないこと、各個体が大きく重複することなく配置されている様に出土していることから、ほぼ同一時期のものと考えられる資料である。各個体の土器片の絶対高の平均値を算出したが、積極的に土器の上下関係に結び付けることはできなかった。従って、各個体間の破片の重複関係から新旧関係を導き出すと、(旧)→(新)として、図III-3・4-4→1・3←(2・5・7)→6となった。厳密な一括資料でないにしろ極めて短期間にこれらの土器が廃棄されたものと考えられる。ただ各個体の器形や文様要素には、ばらつきがあるため、土器の生産時点は時間的に若干異なる可能性があると思われる。

集中出土土器中央部から長さ16.7cm、幅6.58cm、厚さ6.04cm、重さ1130gの棒状の花崗閃緑岩の自

然礫（図Ⅲ-9-24）が周囲の土器片と同一レベルで出土しており、これらの土器と強い関連性をもつ遺物と思われる。また、同様な礫が同様な出土状況を示すものとして、P-1検出図（図Ⅱ-26）でも確認できた。このような集中出土土器と共に出土する棒状礫は当該期に多くみられる「石棒」と考えられる。遺物と関連性をもって出土している例は、今のところ知り得ないが、函館市煉瓦台遺跡（大場・蛸子1965）ではB-1区出土のものとはほぼ同様な大きさ、形態の「石棒様石器」の集積がある。今後、このような明瞭な加工痕をもたない礫でも出土状況と合わせて留意していくべきであろう。

これらから判断してB-1区は土器の廃棄場か祭祀場であった可能性が高い。当該期の遺物廃棄場の報告例としては白尻B遺跡（小笠原1986・1985）の一例のみで本遺跡と同様に掘り込み等はない。祭祀場としては、配石するものが同町木直C遺跡（小笠原・松岡1981）で報告されている。B-2・3区の礫群を配石とみることも考えられたが、礫の大きさ、材質、配置等に一定の傾向がみられないことから配石とは判断できなかった。また、特にB-1区周辺の土器の接合時には、当該期に特徴的な「三角形土器片加工品」（松谷1992）の有無に留意したが、明瞭な整形痕をもつものはみられなかった。

3. 遺物から

(1) 土器の特徴と序列

今回の調査で出土した土器は、縄文時代中期後葉の大安在B式の古手のものからノグッブⅡ式にかけてのものと、後期前葉の土器群で新道4遺跡の「盛り土1類」～「盛り土3類」（遠藤1988）までと思われるものが出土している。後者は島内では、松江遺跡（佐藤1982）、東風泊遺跡（佐藤1981）で多量に出土している。ここでは前者の大安在B式の新旧関係について、若干述べるとする。

1) H-2周辺の出土土器

今回の調査で土器の新旧関係を示す良好な資料として、H-2の構築により破壊されたと考えられるHP-1の土器（旧：図Ⅱ-12-7）とH-2覆土2層出土の土器（新：図Ⅱ-11-1）が挙げられ、土器の変遷傾向を看取できる（表1）。

両者を比較して器形は、頸部のくびれがなくなり、胴部（肩部）の張り出しが現れてくるようである。貼付帯は新しい段階では胴部のもので、貼り付けた後、器面に押し付け、低平であり、位置も頸部のくびれの部分から、胴部中位ないしは肩部まで下がるが、口縁部のは口唇部側面の貼付帯により、口唇部断面形が若干肥厚する形態となる。文様構成は横位多面から、縦位多段へと大きく変わっている。また、構成する文様要素も、沈線文から縄線文へ、その単位も3条1組から2条1組へという変遷を看取できる。縄線文に関しては覆土中のもとの同一層から出土している図Ⅱ-11-2も2条1組を単位とし、共通している。

頸部のくびれや口縁部と胴部の区画に関しては、前段階の椀林式からみられ、大安在B式期にくびれが強くなり、貼付帯も発達する。次段階のノグッブⅡ式へはこれらの文様要素の退化傾向をたどるものと思われる。文様要素の単位、構成でも変遷はスムーズで、椀林式の横位多面の文様展開、3条1組の沈線文からノグッブⅡ式・煉瓦台式の縦位多段の区画へ、2条1組の縄線文や短刻線文へと変遷して行く過程を今回の土器からも考えられよう。

この両者の土器の間に位置するものとしてH-2の床面出土の土器とP-1出土の土器群（図Ⅱ-28-1～5）を想定したい。後者の出土層位は掘上げ土直下の炭化物を多量に含む黒褐色土で、H-2よりは確実に旧いことが言える。さらに掘上げ土の堆積について前述したように、炭化物が掘上げ土によりバックされたことを想定するとおのずと、その時間的幅は限られてくる。少なくともこの事実より、HP-1・P-1→H-2覆土を考えられる。P-1の土器は沈線文を全く使用していないこ

	HP-1 出土土器	H-2 覆土 2層出土土器
器形	口縁部から胴部への屈曲がつよく、壺型様を呈する。	口縁部から胴部への屈曲が弱く円筒状に近い。
貼付帯	口縁部と頸部の横位に2段。その間を縦位に2条1組の貼付帯がある。貼付帯は凸隆が大きく、しっかりしている。貼付帯上には縄線文が施されている。	口縁部、頸部、肩部に横位に3段。縦位に横環するものと直文する2条1組の貼付帯が胴部下半まで垂下し、交点に断面形がボール状の円形刺突文が施されている。比較的低平である。
貼付帯の位置	口唇部よりやや下がった位置と口縁部と胴部の屈曲する転換点(頸部)に巡る。	口唇部側面と口縁部から胴部の張り出した肩部とその間の口縁部(頸部)に施されている。
文様要素	3条1組の懸垂文による横位多面の区画が発達している。	2条1組を主体とする縄線文を施した貼付帯、縄線文で縦位多段の区画が発達する。
地文	胴部上半は1段LRの横位回転による斜行で、下半では一部横走する。	1段RLの斜位ないしは横位回転で整然密な縦走気味の斜行ないしは斜行縄文である。

表1 HP-1 出土土器とH-2 覆土 2層出土土器の属性比較

と、H-2 構築の直前と考えられることからHP-1→P-1→H-2床→H-2 覆土を想定したい。H-2の床面出土の土器(図II-12-8・13)の特徴としては、2条1組の縄線文を「X」字状ないしは斜位に配していることをあげることができよう。この2点に共通する要素は、P-1の掘上げ土下の土器群にもみられ、図II-12-5は2条1組の縄線文が底部まで斜位に垂下している。縄線文が垂下するものとしては、A-7区出土の土器(図III-24-1)があり、貼付帯の位置は前段階のHP-1出土の土器と同様であるが、文様要素が縄線文に置き替わり、胴部の張り出した部位に縄線文を横位に施すなど、H-2 覆土 2層出土の土器に類似する傾向もみられる。想像の域ではあるが、円筒土器以来伝統的に施文されてきた連弧文、弧線文とH-2 覆土 2層出土の土器の縦位に垂下する区画文との過渡期的な文様なのかもしれない。これらの土器の文様要素のからも、包含層の章で述べている、A・B-7区の土器集中をH-2を使用した人々の廃棄場と考えることも妥当であろう。また、垂下する縄線文の他に、口唇上に縄線文を施す手法もH-2床面出土の土器(図II-12-8)とP-1の土器(図II-28-1・4)と共通している。

2) その他包含層の土器

B-3区でも掘上げ土の上下で遺物を取り上げたが、H-2周辺からのものとはほぼ同様な変遷過程で、図III-13-1・4・7(掘上げ土下)と2・5(掘上げ土上)の器形や貼付帯の位置はH-2周辺と一致している。特に1と2の比較では新旧の特徴を顕著に示している。これらからB-1区出土の土器をみると、器形ではくびれるもの、若干くびれるものがあり、文様帯も、口縁部のみか、頸部の貼付帯下の胴部上半までに限られ、積極的に新しい要素を認めることはできない。古い要素としては、図III-3-1・3に認められる弧状の沈線文ないしは縄線文が挙げられよう。この文様要素は円筒土器以来から続くもので、サイベリフ式期は多段で横位に一部重複する「連弧文」を呈するが、榎林式では一部重複する1段ないしは多段の「連弧文」となり、次の段階では横位に連続せず、単体の「弧線文」、あるいはこれに渦巻き文、同心円文・懸垂文が付随し、さらに中の平II式の新しいものでは単体の「弧線文」と懸垂文が融合し、同III式では懸垂文のみとなって消滅するようである。道南部では大安在B式の古手ないしはその直前まで見られ、これらから、B-1区出土の土器を遺跡内の土

器の中でも、古手ないしは前半のものにとらえたい。また、貼付帯上や口唇上に器面に対し、垂直方向からの円形刺突文を施すものも榎林式から続く古い要素と考えられる。他に前半のものとしては図Ⅱ-12-12、図Ⅲ-4-10・11、図Ⅲ-14-8・15・16などがあり、榎林式以来の大木系土器の影響を色濃く残すものがより古いものと考えられる。

新しい要素をもつものとしては、胴部上半が張り出し、頸部が僅かにくびれる器形で、地文が同一原体による羽状縄文が施されているもの(図Ⅲ-13-6)がある。榎林式・大安在B式では円筒土器以来の結束・結節の羽状縄文がみられなくなるが、次段階のノグツブⅡ式より、結束によらない羽状縄文が発達する。また、この様な地文の傾向は道央部の萩ヶ岡式土器群とも一致している(高橋1981)。器形にくびれがなく、口唇部側面に1条の貼付帯が付されているもの(図Ⅱ-12-17・18)、図Ⅲ-14-13の地文施文前に貼付帯を器面にナデ付け、口唇部側面の断面形が三角形を呈するものや地文の条が完全に横走し、原体の回転施文の単位が短く、重複しているもの(図Ⅲ-18-5)などがあり、これらは次段階のノグツブⅡ式に近いものと思われる。

これらの土器の大まかな変遷傾向は大沼忠春氏(大沼1981・1986)が既に述べられているところであり、これを肯定するものとなった。HP-1のものは大沼氏のいう「権現台場式」に相当すると思われ、H-2覆土出土のものは器形や文様構成などにより大安在B式からノグツブⅡ式への変遷過程にあるものと考えられる。

今回は、一遺跡内のみ資料にとどまる一例としての報告であり、今後、他の遺跡における類別、比較検討を待つて時間的位置付けを確認していかなければならないであろう。当該期の土器の器形、文様要素にいたる詳細な観察、比較検討による緻密な土器編年の確立が、道南部における大木系土器から在地系土器への変遷をとらえることとなり、また、道央部の柏木川式・萩ヶ岡4式の細分に関わるものとも考えられ、両地域の細かい編年対比表の作成の資料ともなろう。当該期の文化様相をつかむうえで1つの重要な足掛かりとなると思われる。

3) 長浜2遺跡出土の土器における大木系の様相

今回の調査では、東北北部の大木系土器そのものの搬入品と考えられるものとして図Ⅲ-25-34の最花式土器がある。文様モチーフとして最花式のメルクマルとなる「ぜんまい状の渦巻文」をもつ懸垂文が施されており、胴部とは明瞭な屈曲をもって僅かに内傾する無文の口縁部へと移行する。小型の土器と思われ、器厚は非常に薄く、焼成も良好である。この他、図Ⅲ-14-29の縄文と縦位の縄線文のものがあるが、断定はできない。直接的あるいは間接的にしろ東北北部からの搬入品と考えられる土器は1、2点しか出土していないが、大木系土器の影響を観察できるものが数多くある。H-2覆土出土の土器の肩部が張り出す器形や貼付帯、縄線文の交点に施されている断面形がボール状の円形刺突文は前述の最花式の土器片と共通しており、在地系土器に取り込まれたものと思われる。白尻B遺跡では大安在B式と最花式の同伴関係が指摘されており(小笠原1985)、本遺跡では層位的事実の確認できなかったものの、この見解に賛同したい。あえて、より時間的幅を限定するならば、最花式は大安在B式の新しい段階のものと並行関係にある可能性を指摘しておきたい。また、図Ⅲ-4-9・5-26・14-16の3条1組の沈線文の両端を「U」字状ないしは横位の直線にて閉じるものも最花式の一部に見られる文様要素である(末光1995)。なお、東北北部の大木系土器(中の平Ⅱ・Ⅲ式、最花式)の懸垂文は、3条ないしは2条1組の沈線を基本とし、道南部のものとも一致するが、東北北部のもの懸垂文は、上端を「∩」・アーチ状に結ぶものがほとんどで、懸垂文の下端を「U」字状に閉じるものは極少数例のみにとどまっている。本遺跡の懸垂文は全例、後者のもので大木系土器の

文様要素そのものの移入とも言えないであろう。図Ⅲ-13-2の折り返し状口縁は、大木9・10式並行の粗製土器などにみられる要素と思われる。他、末光氏の指摘では、地文の条の横走・縦走を指摘しているが、本遺跡でも胴部下半では横走するものを多く認めることができ、大木系土器の影響の1つと思われる。しかし、地文施文原体の回転方向においては、横回転が主体で、村木淳氏が指摘している「大木系土器における縦位または斜位の回転施文」(村木1994)は極一部にしか認められず、円筒土器文化以来の伝統が存続しているものかもしれない。北海道の土器において地文の施文原体の縦回転は、天祐寺式以降に主体的にみられる。また、図Ⅲ-3-2・14-30~32・25-3の口縁部から胴部下半にかけての複雑な条線文は東北北部から道南部にかけて僅かに類例を挙げることができ、大木9式並行の土器に伴うようである。

図Ⅲ-14-32・35のように口縁部に円形刺突文をもつものがある。次の段階で道東部から道央部、道南部の一部と広範囲に分布する北筒式との関連性も考えられるが、中の平皿式にも同じような部位に円形刺突文を施すものがあり、同図34の2段の細い棒状工具による円形刺突文は最花式に見られ、これらを即、北筒式に結び付けることはできないであろう。

以上のように土器の器形や文様の一部分に大木系土器の影響を見受けることができ、これまでに多くの研究者が指摘しているように、大安在B式土器は道南部において東北北部の大木系土器の影響を残しつつ成立した土器と考えられるが、大木系土器の要素そのものを受け入れることはなく、後続する「より北海道的な土器」(ノダップⅡ式・煉瓦台式土器、短刻線文土器群)の初源と考えられよう。

(2) 石器

長浜2遺跡の石器を概観して思うところを幾つか記したい。

定形的なスクレイパーとしてポイント様のもの(図Ⅱ-16-67-69・82、図Ⅲ-19-10、図Ⅲ-23-6・8)と縦長剥片の両面縁ないしは片側に刃部をもうけるものが見受けられるくらいで、多くはR・フレイクやU・フレイクとした不定形の剥片の縁辺の一部に加工痕、使用痕を残すものであった。それらの中にはノッチをもつものが多く、僅かであるがつまみ付きナイフとして分類される可能性をもつもの(図Ⅱ-17-87)あり、知内町湯の里1遺跡(峰山・大島1979)、登別市千歳6遺跡(大島・瀬川1982)における「当該期までつまみ付きナイフが存続する」という指摘を肯定するものであろう。

青竜刀形石器については野村氏が道内の資料を集成し、本石器の各部の名称、形態分類、さらに大まかな編年の位置についての論考を発表され、北海道における青竜刀形石器の研究の基礎となっている(野村1985)。また、溝や突起等の各部位の形態とその変遷過程に留意した西脇氏の論考(西脇1991)、骨刀等の形態からを中国大陸の青銅製の刀剣そのものが偶然的に伝播したとする見解もある(西本1993)。本遺跡出土のものは形態、大きさ、材質より、野村氏の形態分類のC型に相当すると思われ、編年の位置を縄文後期初頭の可能性を指摘している。しかし、本遺跡では、H-2の掘上げ土下位から出土していることから縄文時代中期後葉に位置付けたい。未成品・製作過程のものとも考えられるが、他の遺跡の出土例など(下山1993)から、このような荒い加工の状態で完形品として機能していたものと思われ、刃部と柄部が明瞭に区別でき、突起や窪み、刃部に溝をもつ一般的な青竜刀形石器の祖形となるものかもしれない。近年、戸井町浜町A遺跡(古屋敷1990)・戸井貝塚(西本・古屋敷・新美1990)や白尻B遺跡、道央部周辺でも資料数が増加しており、土器編年が整備されてきた現在、再検討の時期にきていると思われる。

本遺跡出土の石器の石材は剥片石器では頁岩が一番多く、ついでメノウ質頁岩、チャート、安山岩、黒曜石、ホルンフェルス、ガラス質流紋岩となっている。堆積岩のものは島内で入手可能であり、頁

岩層は島の南部に発達し、特に多用されている白色の軟質の頁岩は海岸や河川沿いの段丘縁辺部の崖で容易に入手できる。硬質頁岩やチャートは海成段丘の礫層中に人頭小から拳大の円礫が含まれ、また、海岸や河原でも拳大程のものを採集でき、これらを使用していたものと考えられる。島外から搬入された石材としては黒曜石がある。黒曜石製の石器は非常に少ないが灰色の流紋岩顆粒の入るものが多く、肉眼の観察からは赤井川産のものが大多数を占めると思われる。黒曜石のフレイク・チップは出土点数も少ないが、微細遺物の水洗回収では、予想以上に黒曜石のチップが多量に含まれていた。これらには原石面をもつものはほとんどなく、製品化・半製品化されたものが遺跡内に持ち込まれ、細部調整、再加工を行っていた可能性がある。島内でも小粒の暗灰色の黒曜石を採集できるとの報告(秦・瀬川・矢島1982)があるが、石器に使用していたかは不明であり、サンプルも実見していないため、今後、追跡調査を行う必要性があろう。図II-14-34の石鎌の素材がガラス質流紋岩であり島内で採集できる黒曜石の一種なのかもしれない。礫石器では花崗閃緑岩が一番多く、特に石皿・台石のほとんどは花崗閃緑岩であり、下の海岸から持ち込んだものと思われる。最大重量のものではB-1区より出土した台石(図III-8-22)で、34.8kgある。ついで安山岩、凝灰質砂岩、緑色泥岩、蛇紋岩などがある。安山岩は遺跡の立地する段丘の堆積物中から利用したものと思われる。凝灰質砂岩は島内の露頭の多くで見られるが、周囲1km以内には存在しない。さらに砥石などの礫石器に使用可能な硬質のものは、産地が一部に限られるようで、これら各種の石材の島内における採取地を把握し、彼等の行動範囲の復元していかなければならないであろう。蛇紋岩に関しては、前述の秦氏等による報告では島内のものは記されていない。本島より一番近い位置にある蛇紋岩の産地としては、松前町大鴨津川上流(地学団体研究会道南班1989)がある。

紙数および時間の都合上、さらには筆者自身の文章力の問題、浅学から非常に見辛いものとなった。できれば、変遷段階の図表等を示せば良いのだが、ご了承願いたい。稿を改めて、詳しく、分かりやすく報告したいと思う。とくに土器の記述については大沼忠春氏に多くのご教示を頂いた。深く感謝申し上げます。(乾)

おわりに

本遺跡の発掘調査は208㎡と比較的せまい範囲を対象にしたものであった。その中で住居址、土壌が2基つつ検出され、また包含層からは、集中出土土器を含む多量の土器が出土した。考察におけるいくつかの指摘は、せまい範囲ながらその中で可能な限りのデータを収集し、時間の許す限りの分析の結果、導き出されたものである。

ここで本発掘調査における成果を簡単にまとめ、今後の課題等にふれておきたい。

本遺跡は東に海を望む台地上にあり、西側は山林で冬の季節風の影響を受けにくい環境にある。また、遺跡に隣接してブナ林を水源とする小河川が流れている。これらの条件から考えられることは、漁労、狩猟の拠点として適した場所であること、水の確保が容易なことなどである。すなわちここは生活を営む上で十分な条件を満たした所といえる。

出土した土器から、この遺跡は縄文時代中期後葉と後期前葉の所産といえる。出土した土器は大安在B式、ノダップII式に相当するものが殆どで、入江系の土器はあまり多くみられない。なお、搬入品と思われる大木系土器（大木9式後半）が1点だけ出土している。

包含層における遺物の出土は1区～3区に集中する傾向がみられ、これらの遺物は斜面を滑り落ちてきたものと思われる。

遺物の出土状態からH-2の位置する遺跡最高地点の北側、南側にそれぞれ廃棄場の存在が考えられる。このうち、北側のB-1グリッド周辺は土器を中心に遺物の密度が濃く、土器は比較的大型であるが、南側の8区周辺は遺物の密度も薄く、土器は小型のものが多い。

石器は当該期の遺跡と比べて大きな変化は認められず、一般に粗雑な剥片石器類、円柱形の石棒、青竜刀形石器の祖形のようなものなど当該期に特徴的なものが認められた。また、スクレイパーとよべるようなものは少なく、R・フレイク、U・フレイクがこの機能を補うものと思われる。

本遺跡の調査から以上のことがいえるのだが、道路敷設により失われた部分にはH-2の残り半分とH-1の大部分が存在していたはずである。そこにはおそらく今回の発掘調査で出土した遺物に相当する量の遺物が埋藏されていたと思われる。

今後の課題として島内の当該期の遺跡との比較、対岸の道南地方の当該期の遺跡との比較があげられる。先ず島内での比較であるが、島という限られた範囲では自ずと人々の行動も制限され、もし遺跡間に繋がり（交流・流通）があるとしたらそれが比較的わかりやすい状態で示される可能性が高いと思われる。従って土器や石器の製作技術の詳細な比較によっては島内における人々の動きを具体的な形でとらえることができるかもしれない。対岸との比較であるが、これにより島特有の文化を見いだせる可能性がある。以上の2点は何も当該期に限ることではなく全期に共通する課題と思われる。いずれにしても、このような検討を行なうには、より詳細な分析が求められる。

本書を作成するにあたり、実にたくさんの方々のお世話になりました。中でも北海道教育庁の大沼忠春氏からは格別な御指導を賜りました。深く感謝申し上げます。（村上義直）

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1975 『中の平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1992 『青い森の縄文人とその社会 縄文時代中期・後期編』
図説 ふるさと青森の歴史シリーズ②
- 青森県教育委員会 1992 『富ノ沢(2)遺跡Ⅴ』
- 青森県教育委員会 1993 『富ノ沢(2)遺跡Ⅵ』
- 江差町教育委員会 1989 『茂尻C遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1992 『中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡』
- 江別市教育委員会 1982 『萩ヶ岡遺跡』
- 奥尻町教育委員会 1981 『奥尻島東風泊遺跡』
- 奥尻町教育委員会 1982 『奥尻島松江遺跡』
- 乙部町教育委員会 1976 『元和』
- 上ノ国町教育委員会 1979 『小砂子遺跡』
- 知内町教育委員会 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡』
- 地学団体研究会道南班 1989 『道南の自然を歩く』 北海道大学図書刊行会
- 地質調査所 1982 『奥尻島北部および南部地域の地質』 地域地質研究報告(5万分の1図幅)
- 千歳市教育委員会 1990 『イヨマイ6遺跡における考古学的調査(2)』
- 千歳市教育委員会 1994 『丸子山遺跡における考古学的調査』
- 戸井町教育委員会 1990 『浜町A遺跡Ⅰ』
- 戸井町教育委員会 1993 『戸井貝塚Ⅲ』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1987 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1992 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』
- 登別市教育委員会 1982 『札内台地の縄文時代集落址』
- 函館市教育委員会 1981 『梅現台場遺跡』
- 八戸市教育委員会 1994 『松ヶ崎遺跡』 「八戸市内遺跡発掘調査報告書6」
- 北海道第四紀研究会 1974 『西股』
- 北海道檜山支庁 1994 『檜山南部の漁場調査図(奥尻町 その2)』
- 北海道文化財研究所 1992 『掘株1・2遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1988 『新道4遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1995 『高岡2遺跡(2)』
- 松前町教育委員会 1974 『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
- 南茅部町教育委員会 1981 『木直C遺跡』
- 南茅部町教育委員会 1985 『白尻B遺跡 vol. V』
- 南茅部町教育委員会 1986 『白尻B遺跡 vol. VI』
- 南茅部町教育委員会 1987 『白尻B遺跡 vol. VII』
- 南茅部町教育委員会 1988 『白尻B遺跡 vol. VIII』
- むつ市教育委員会 1986 『最花貝塚発掘調査報告(第4次)』
- 森町教育委員会 1985 『御幸町』

- 遠藤香澄 1988 「第4章 総括 II 新道4遺跡における大湯系土器の編年について」
「新道4遺跡」 北海道埋蔵文化財センター
- 大島直行 1982 「第3章 包含層出土の遺物 小括」『札内台地の縄文時代集落址』
登別市教育委員会
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」
『考古学雑誌』66巻4号
- 大沼忠春 1986 「II 遺構・遺物の分類 2. 土器」『VI 新道4遺跡 昭和60年度B地区の調査5. まとめ』『建川1・新道4』 北海道埋蔵文化財センター
- 大場利男・蛸子千代志 1965 「函館郊外煉瓦台遺跡」『北方文化研究報告』第20巻 北海道大学
- 小笠原忠久 1985 「IV まとめ」『白尻B遺跡 vol. V』
- 小笠原忠久 1986 「III まとめ」『白尻B遺跡 vol. 11. V』
- 下山信昭 1993 「青竜刀形石器」『富ノ沢(2)遺跡VI(3)』 青森県教育委員会
- 末光正卓 1995 「IX. 成果と問題点 3. 中央地区出土の大安在B式について」
『高岡2遺跡(2)』 北海道埋蔵文化財センター
- 鈴木克彦 1990 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年の考察」『北奥古代文化』
第8号 北奥古代文化研究会
- 瀬川拓朗 1982 「第4章 考察 第1節 千歳6遺跡における竪穴の構造と集落の変遷」
『札内台地の縄文時代集落址』 登別市教育委員会
- 高橋正勝 1982 「VII 考察 3. 萩ヶ岡式土器の設定」『萩ヶ岡遺跡』江別市教育委員会
- 土屋千恵子 1992 「第6章 小括 2. 石器」『掘株1・2遺跡』 北海道文化財研究所
- 西脇对名夫 1991 「青竜刀形石器ノート」『北海道考古学』第27輯
- 西本豊弘 1993 「第4章 第4節 骨角器 2. まとめ」『戸井貝塚III』戸井町教育委員会
- 野村崇 1985 「第四章 青竜刀形石器と棍棒形石器」『北海道縄文時代終末期の研究』
みやま書房
- 村木淳 1994 「松ヶ崎遺跡 まとめ」『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』
八戸市教育委員会

遺構出土掲載石器一覧表

図番号	図版	遺構	層位	跡種	長×幅×厚(㎝)	重(g)	石質	図番号	図版	遺構	層位	跡種	長×幅×厚(㎝)	重(g)	石質
II3-6	2-3	H-1	覆土	スチール	6.2X3.1X0.7	13.3	Chc	II7-90	7-2	H-2	覆土	U・F	5.8X4.1X0.6	22.0	And
II3-7	2-3	H-1	覆土	R・F	3.8X3.1X1.1	8.0	Sh	II7-91	7-2	H-2	床	U・F	4.9X2.7X0.6	9.3	Chc
II3-8	2-3	H-1	覆土	U・F	7.4X3.5X0.6	11.1	And	II7-92	7-2	H-2	覆土	U・F	4.9X2.8X0.7	9.4	Sh
II3-9	2-3	H-1	覆土	砥石	18.0X8.8X5.6	1365	Gra	II7-93	7-2	H-2	覆土	U・F	8.7X3.4X0.9	22.0	Sh
II4-34	6-2	H-2	覆土	石鏃	2.6X1.2X0.5	1.0	Rhy	II7-94	7-2	H-2	覆土	U・F	6.2X3.2X1.5	17.0	Sh
II4-35	6-2	H-2	覆土	石鏃	2.9X1.8X0.7	2.4	Obs	II8-96	7-2	H-2	覆土	U・F	3.3X3.0X0.5	6.4	Chc
II4-36	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.5X1.4X0.4	1.5	Sh	II8-96	7-2	H-2	覆土	U・F	4.0X2.8X1.0	7.6	Chc
II4-37	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.5X2.0X0.6	2.0	Sh	II8-97	7-2	H-2	覆土	U・F	3.1X2.4X0.9	6.7	Chc
II4-38	6-2	H-2	覆土	石鏃	2.7X2.0X0.5	1.3	Sh	II8-98	7-2	H-2	覆土	U・F	5.7X3.4X0.8	16.0	Sh
II4-39	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.2X1.7X0.8	1.7	Sh	II8-99	7-2	H-2	覆土	U・F	4.8X3.8X1.4	20.1	Chc
II4-40	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.6X1.9X0.6	1.7	Sh	19-100	7-2	H-2	床	コア	5.2X1.7X2.6	18.0	Chc
II4-41	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.2X1.7X0.8	2.2	Chc	19-101	7-2	H-2	覆土	コア	8.1X4.2X3.1	114	Chc
II4-42	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.0X1.9X0.5	3.0	Chc	19-102	7-3	H-2	覆土	すり石	17.7X10.1X4.8	1155	Gra
II4-43	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.9X1.8X0.7	3.2	Sh	19-103	7-3	H-2	床	砥石	19.4X7.5X6.7	1575	And
II4-44	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.2X2.1X0.7	1.8	Sh	19-104	7-3	H-2	床	砥石	19.3X10.9X3.6	1630	And
II4-45	6-2	H-2	覆土	石鏃	1.7X1.4X0.5	1.0	Sh	19-105	8	H-2	床	石鏃・台石	36.3X23.6X12.0	16900	Gra
II4-46	6-2	H-2	覆土	石鏃	4.4X3.3X0.7	5.9	Agas-Sh	20-106	8	H-2	覆土	石鏃・台石	32.2X29.0X11.6	17400	Gra
II4-47	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.0X2.3X0.5	2.9	Sh	20-107	8	H-2	覆土	石鏃・台石	31.7X25.6X12.5	15600	Gra
II4-48	6-2	H-2	床	石鏃	4.1X2.2X0.8	3.6	Sh	20-108	9	H-2	床	石鏃・台石	35.9X30.2X13.2	21800	Gra
II4-49	6-2	H-2	覆土	石鏃	3.9X1.7X0.6	1.9	Sh	21-109	9	H-2	床	石鏃・台石	35.1X29.6X11.9	19800	Gra
II4-50	6-2	H-2	覆土	石鏃	5.0X2.2X0.8	4.2	Sh	21-110	9	H-2	床	石鏃・台石	33.7X23.1X10.5	13600	Gra
II4-51	6-2	H-2	覆土	石鏃	4.4X1.9X0.8	4.9	Sh	21-111	9	H-2	覆土	石鏃	42.4X36.6X23.2	22100	Gra
II4-52	6-2	H-2	覆土	石鏃	2.3X1.5X0.4	0.6	Sh	22-112	9	H-2	覆土	骨切刃	13.9X6.7X4.5	600	Sh
II4-53	6-2	H-2	覆土	台鏃	4.0X1.8X0.8	4.2	Chc	23-113	10	P-1	覆土	礫	16.0X6.8X4.9	830	And
II4-54	6-2	H-2	覆土	石鏃	4.0X1.9X1.1	4.4	Sh								
II4-55	6-2	H-2	覆土	石鏃	4.0X1.7X0.8	3.2	Sh								
II4-56	6-3	H-2	覆土	石鏃	5.6X2.0X1.3	9.0	Chc								
II4-57	6-3	H-2	覆土	石鏃	6.2X2.7X1.0	6.2	Sh								
II4-58	6-3	H-2	覆土	石鏃	3.9X3.1X1.5	8.0	Sh								
II4-59	6-3	H-2	床	石鏃	5.4X2.5X1.0	4.6	Sh								
II5-60	6-3	H-2	床	石鏃	4.5X3.0X0.9	6.5	Chc								
II5-61	6-3	H-2	覆土	石鏃	3.6X2.3X0.8	4.2	Chc								
II5-62	6-3	H-2	覆土	石鏃	4.3X2.2X1.1	7.9	Sh	図番号	図版	グリフ	層位	跡種	長×幅×厚(㎝)	重(g)	石質
II5-63	6-3	H-2	覆土	石鏃	5.3X3.0X1.1	11.9	Chc	II6-1	16	B-1	Ⅳ	石鏃	4.6X2.4X0.7	4.8	Chc
II5-64	6-4	H-2	覆土	石鏃	3.7X1.7X0.9	2.6	Sh	II6-2	16	B-1	Ⅳ	スチール	7.1X3.1X1.0	27.8	Chc
II5-65	6-4	H-2	床	石鏃	3.3X1.5X0.7	1.3	Sh	II6-3	16	B-1	Ⅳ	石斧	7.0X4.0X2.3	22	Gr・Shc
II5-66	6-4	H-2	床	石鏃	4.4X1.8X0.8	4.5	Sh	II6-4	16	B-1	Ⅲ	すり石	16.7X8.5X3.8	790	And
II6-67	6-5	H-2	覆土	スチール	5.2X4.4X1.2	18.4	Herrf	II6-5	16	B-1	Ⅳ	すり石	15.0X8.9X3.0	772	And
II6-68	6-5	H-2	覆土	スチール	5.7X3.1X1.0	17.8	Herrf	II6-6	16	B-1	Ⅲ	すり石	14.3X8.0X8.2	1171	Gra
II6-69	6-5	H-2	床直	スチール	6.3X3.0X1.2	21.5	Sh	II6-7	16	B-1	Ⅲ	すり石	16.3X8.9X4.7	930	Gra
II6-70	6-5	H-2	覆土	スチール	6.6X3.4X2.0	31.8	Sh	II6-8	16	B-1	Ⅲ	すり石	22.1X12.8X3.9	1461	And
II6-71	6-5	H-2	覆土	スチール	6.4X3.1X1.1	31.2	And	II6-9	16	B-1	Ⅲ	すり石	19.7X12.7X7.1	2185	Gra
II6-72	6-5	H-2	覆土	スチール	4.3X1.8X1.1	8.7	Chc	II6-10	16	B-1	Ⅲ	砥石	6.4X4.2X4.1	210	Gra
II6-73	6-5	H-2	覆土	スチール	3.2X1.8X0.9	5.3	Chc	II6-11	16	B-1	Ⅲ	砥石	11.1X9.2X5.8	1190	Gra
II6-74	6-5	H-2	床直	スチール	4.7X2.3X0.8	4.3	Sh	II6-12	16	B-1	Ⅲ	砥石	13.3X9.4X5.4	1025	Gra
II6-75	6-5	H-2	覆土	スチール	2.8X1.9X0.6	3.1	Sh	II6-13	16	B-0	Ⅳ	砥石	13.6X7.5X4.7	920	Gra
II6-76	6-5	H-2	覆土	スチール	4.0X2.9X1.0	6.1	Sh	II7-14	16	B-1	Ⅲ	砥石	11.0X9.0X4.6	640	Gra
II6-77	6-5	H-2	覆土	スチール	4.9X3.5X0.9	19.2	Sh	II7-15	16	B-1	Ⅲ	石鏃・台石	20.0X13.6X3.9	2929	Gra
II6-78	6-5	H-2	覆土	スチール	2.6X1.4X0.5	2.1	Obs	II7-16	16	B-1	Ⅲ	石鏃・台石	12.4X9.2X6.9	15700	Gra
II6-79	7-1	H-2	覆土	スチール	3.5X3.1X1.2	16.3	Chc	II7-17	16	B-1	Ⅲ	石鏃・台石	13.9X12.7X8.9	2813	Gra
II6-80	7-1	H-2	覆土	スチール	5.7X3.3X1.3	24.1	Sh	II7-18	16	B-1	Ⅲ	石鏃・台石	14.6X11.4X9.1	2396	Gra
II6-81	7-1	H-2	覆土	R・F	5.5X3.8X1.2	10.6	Sh	II8-19	17	B-1	Ⅲ	石鏃・台石	20.5X17.0X8.9	5000	Gra
II6-82	7-1	H-2	床直	R・F	4.6X2.7X0.8	12.3	Sh	II8-20	17	B-1	Ⅲ	石鏃・台石	38.4X26.6X13.9	26100	Gra
II7-83	7-1	H-2	覆土	R・F	5.8X3.3X1.2	13.4	Sh	II8-21	17	B-0	Ⅳ	石鏃・台石	34.4X25.6X13.3	12800	Gra
II7-84	7-1	H-2	覆土	U・F	5.6X4.4X0.9	16.5	Sh	II9-22	17	B-1	Ⅳ	石鏃・台石	42.3X32.7X18.1	34800	Gra
II7-85	7-1	H-2	覆土	U・F	3.0X4.6X0.9	12.1	Chc	II9-23	17	B-1	Ⅳ	石鏃	24.6X17.3X7.3	1750	Sa
II7-86	7-1	H-2	覆土	U・F	6.9X3.3X2.2	50.0	Chc	II9-24	17	B-1	Ⅲ	礫	16.7X6.6X6.0	1130	Gra
II7-87	7-2	H-2	覆土	U・F	4.4X1.1X0.9	3.9	Chc	II15-1	22	B-2	Ⅲ	石鏃	2.6X1.7X0.6	3.0	Chc
II7-88	7-2	H-2	覆土	U・F	4.5X2.4X0.4	5.1	Chc	II15-2	22	B-3	Ⅲ	砥石	4.4X1.9X0.6	3.5	Sh
II7-89	7-2	H-2	覆土	U・F	3.6X3.0X0.8	12.5	Sh	II15-3	22	B-3	Ⅲ	砥石	4.2X1.9X0.7	3.5	Chc

包含層出土掲載石器一覧表

包含層出土土層表

図番号	図版	グリッド	層位	器種	長さ×幅×高さ(m)	重量(g)	石質	図番号	図版	グリッド	層位	器種	長さ×幅×高さ(m)	重量(g)	石質
Ⅱ15-4	22	B-4	Ⅱ	石 織	4.9X2.2X0.9	5.0	Ag+Sh	Ⅱ20-26	25	B-5	Ⅱ	石 織	17.6X11.0X0.5	1710	Sh
Ⅱ15-5	22	B-2	Ⅱ	石 織	3.7X1.6X0.5	2.4	Sh	Ⅱ26-1	28	B-7	Ⅱ	石 織	3.6X2.6X0.8	5.4	Ob s
Ⅱ15-6	22	B-3	Ⅱ	石 織	2.7X1.7X0.5	2.2	Ob s	Ⅱ26-2	28	C-8	Ⅱ	石 織	2.4X1.3X0.6	0.9	Sh
Ⅱ15-7	22	B-2	Ⅱ	石 織	1.5X0.9X0.4	0.5	Ob s	Ⅱ26-3	28	C-7	Ⅱ	土 織	2.6X2.0X0.7	2.8	Ch e
Ⅱ15-8	22	B-3	Ⅱ	石 織	6.1X2.8X1.6	12.5	Ob s	Ⅱ26-4	28	B-7	Ⅱ	石 織	1.0X1.5X0.5	0.7	Ob s
Ⅱ15-9	22	B-3	Ⅱ	土 織	4.8X2.0X0.6	6.2	Sh	Ⅱ26-5	28	C-7	Ⅱ	石 織	6.0X1.9X1.0	6.3	Sh
Ⅱ15-10	22	B-2	Ⅱ	石 織	3.8X3.5X0.9	6.8	Sh	Ⅱ26-6	28	B-8	Ⅱ	スチール	4.3X3.0X1.1	12.0	Ch e
Ⅱ15-11	22	B-3	Ⅱ	スチール	6.3X2.8X0.7	15.7	Sh	Ⅱ26-7	28	A-7	Ⅱ	土 織	7.8X1.7X1.4	22.0	Ch e
Ⅱ15-12	22	C-4	Ⅱ	スチール	5.4X2.7X1.5	15.9	Sh	Ⅱ26-8	28	C-7	Ⅱ	土 織	3.9X2.5X1.3	8.9	Sh
Ⅱ15-13	22	B-4	Ⅱ	R・F	5.5X2.4X1.0	7.7	Ch e	Ⅱ26-9	28	C-7	Ⅱ	土 織	5.1X2.7X1.5	14.9	Sh
Ⅱ15-14	22	C-3	Ⅱ	R・F	3.0X3.5X2.1	34.1	Sh	Ⅱ26-10	28	A-7	Ⅱ	土 織	3.7X1.5X0.5	1.5	Sh
Ⅱ15-15	22	B-3	Ⅱ	土 織	7.9X4.7X0.9	34.8	And	Ⅱ26-11	28	A-7	Ⅱ	R・F	2.4X2.5X1.3	5.1	Ch e
Ⅱ15-16	22	B-3	Ⅱ	土 織	4.3X3.6X0.7	4.8	Sh	Ⅱ26-12	28	B-8	Ⅱ	土 織	5.4X4.4X1.3	19.3	Ch e
Ⅱ15-17	22	B-2	Ⅱ	土 織	5.0X6.3X0.7	12.1	Ch e	Ⅱ26-13	28	A-7	Ⅱ	土 織	4.1X3.3X0.4	11.2	Sh
Ⅱ16-18	22	B-3	Ⅱ	土 織	7.8X5.4X1.5	32.2	Sh	Ⅱ26-14	28	A-7	Ⅱ	土 織	5.2X2.1X0.9	12.3	Sh
Ⅱ16-19	22	B-3	Ⅱ	土 織	7.8X4.2X1.8	70.6	Ch e	Ⅱ26-15	28	A-7	Ⅱ	土 織	2.9X1.6X0.8	2.6	Sh
Ⅱ16-20	22	C-4	Ⅱ	R・F	5.4X5.8X1.7	52.8	Sh	Ⅱ26-16	28	A-7	Ⅱ	R・F	1.7X0.9X0.5	0.9	Sh
Ⅱ16-21	22	B-3	Ⅱ	石 織	3.2X1.0X0.5	3.8	Gr+Sh	Ⅱ26-17	28	B-7	Ⅱ	土 織	4.3X2.5X1.3	8.4	Ch e
Ⅱ16-22	22	B-4	Ⅱ	土 織	13.8X8.9X3.5	640	Gr	Ⅱ26-18	28	C-7	Ⅱ	土 織	7.3X4.9X1.7	55.8	Sh
Ⅱ16-23	22	B-3	Ⅱ	土 織	13.1X8.4X3.7	685	Gr	Ⅱ26-19	28	B-7	Ⅱ	土 織	6.4X1.8X0.5	8.1	Sh
Ⅱ16-24	22	B-3	Ⅱ	不明	16.3X8.3X4.1	896	And	Ⅱ26-20	28	A-7	Ⅱ	土 織	4.6X4.3X1.2	22.2	Sh
Ⅱ16-25	22	B-3	Ⅱ	土 織	16.3X8.8X4.0	860	And	Ⅱ26-21	28	B-7	Ⅱ	土 織	8.7X5.0X1.4	49.5	Be r s t
Ⅱ16-26	22	C-3	Ⅱ	土 織	18.2X10.9X3.0	915	And	Ⅱ26-22	28	B-7	Ⅱ	土 織	4.7X3.7X1.3	13.7	Sh
Ⅱ16-27	22	B-3	Ⅱ	土 織	18.2X9.8X3.6	1015	And	Ⅱ26-23	28	B-7	Ⅱ	土 織	5.2X3.0X1.3	18.6	Sh
Ⅱ16-28	22	B-2	Ⅱ	土 織	13.8X8.2X5.0	900	Gr	Ⅱ26-24	28	A-7	Ⅱ	土 織	4.0X1.8X0.4	2.6	Ch e
Ⅱ16-29	22	B-2	Ⅱ	土 織	14.7X1.7X4.5	800	Gr	Ⅱ26-25	28	C-7	Ⅱ	土 織	1.9X0.8X0.5	1.1	And
Ⅱ17-30	23	B-4	Ⅱ	不明	10.6X5.2X3.7	286	Gr	Ⅱ26-26	28	A-7	Ⅱ	土 織	2.7X2.2X0.4	2.6	Sh
Ⅱ17-31	23	B-2	Ⅱ	土 織	7.7X5.5X4.1	285	And	Ⅱ27-27	28	B-7	Ⅱ	土 織	7.5X5.0X1.8	120	Se r
Ⅱ17-32	23	B-3	Ⅱ	土 織	5.6X5.0X3.0	118	Gr	Ⅱ27-28	28	A-8	Ⅱ	土 織	17.7X10.4X3.2	860	And
Ⅱ17-33	23	B-3	Ⅱ	土 織	15.0X5.1X4.8	540	And	Ⅱ27-29	28	C-7	Ⅱ	土 織	15.0X9.3X3.5	675	And
Ⅱ17-34	23	B-3	Ⅱ	土 織	14.2X7.5X4.4	560	Gr	Ⅱ27-30	28	C-7	Ⅱ	土 織	17.2X10.3X4.2	1170	Gr
Ⅱ17-35	23	B-2	Ⅱ	土 織	12.4X9.1X6.5	1075	Gr	Ⅱ27-31	28	C-7	Ⅱ	土 織	17.4X10.9X4.2	1160	Gr
Ⅱ17-36	23	B-2	Ⅱ	土 織	13.7X11.3X6.2	1400	Gr	Ⅱ27-32	28	C-7	Ⅱ	土 織	22.7X10.7X7.4	2250	Gr
Ⅱ17-37	23	B-3	Ⅱ	土 織	14.2X7.8X4.5	670	Gr	Ⅱ27-33	29	C-8	Ⅱ	土 織	12.0X6.3X5.9	700	Gr
Ⅱ18-38	23	B-3	Ⅱ	土 織	36.0X28.0X12.0	20050	Gr	Ⅱ27-34	29	C-7	Ⅱ	土 織	8.2X7.7X7.5	690	Gr
Ⅱ19-1	24	B-6	Ⅱ	土 織	3.1X1.6X0.5	2.2	Sh	Ⅱ27-35	29	A-8	Ⅱ	土 織	11.8X6.5X5.3	635	And
Ⅱ19-2	24	B-6	Ⅱ	土 織	3.9X2.0X0.7	2.4	Sh	Ⅱ27-36	29	B-7	Ⅱ	土 織	18.2X7.3X5.7	940	Gr
Ⅱ19-3	24	B-5	Ⅱ	土 織	4.9X1.9X0.8	3.3	Sh	Ⅱ27-37	29	A-8	Ⅱ	土 織	20.5X7.6X7.3	1630	Gr
Ⅱ19-4	24	B-6	Ⅱ	土 織	2.2X1.3X0.4	1.3	Sh	Ⅱ28-38	29	C-8	Ⅱ	土 織	42.0X32.7X21.6	32000	And
Ⅱ19-5	24	B-6	Ⅱ	土 織	4.3X2.2X0.4	4.6	Ch e	Ⅱ28-39	29	C-8	Ⅱ	土 織	35.6X18.9X6.3	7400	And
Ⅱ19-6	24	B-6	Ⅱ	土 織	3.4X1.6X0.7	2.2	Sh	Ⅱ28-40	29	C-8	Ⅱ	土 織	30.7X21.2X16.2	13900	And
Ⅱ19-7	24	B-6	Ⅱ	土 織	4.5X1.3X0.5	2.2	Sh	Ⅱ28-41	29	C-8	Ⅱ	土 織	35.5X21.8X12.5	13500	Gr
Ⅱ19-8	24	B-6	Ⅱ	土 織	3.2X2.5X0.7	4.7	Ch e								
Ⅱ19-9	24	B-6	Ⅱ	土 織	7.0X4.3X1.6	41.6	Sh								
Ⅱ19-10	24	B-6	Ⅱ	土 織	2.1X1.5X0.5	3.1	Ch e								
Ⅱ19-11	24	B-6	Ⅱ	土 織	8.0X3.7X1.0	34.6	Sh								
Ⅱ19-12	24	B-5	Ⅱ	土 織	4.7X0.9X0.8	3.2	Sh								
Ⅱ19-13	24	B-6	Ⅱ	R・F	4.1X2.2X0.5	3.9	Sh								
Ⅱ19-14	24	C-6	Ⅱ	土 織	5.1X2.4X0.6	3.3	Sh								
Ⅱ19-15	24	B-6	Ⅱ	R・F	7.6X6.5X1.6	92.0	Sh								
Ⅱ19-16	24	B-6	Ⅱ	R・F	6.5X4.3X2.0	51.4	Be r s t								
Ⅱ19-17	24	B-5	Ⅱ	土 織	6.2X5.7X2.2	74.7	Sh								
Ⅱ19-18	24	B-6	Ⅱ	R・F	7.4X5.9X1.7	43.4	Sh								
Ⅱ20-19	24	B-6	Ⅱ	土 織	17.2X10.7X5.0	1500	Gr								
Ⅱ20-20	24	B-5	Ⅱ	土 織	18.4X9.3X4.1	1150	Gr								
Ⅱ20-21	25	B-6	Ⅱ	土 織	13.2X8.6X5.3	950	Gr								
Ⅱ20-22	25	B-6	Ⅱ	土 織	13.5X8.1X5.5	780	Gr								
Ⅱ20-23	25	B-6	Ⅱ	土 織	7.9X7.7X3.7	925	Gr								
Ⅱ20-24	25	B-5	Ⅱ	土 織	8.4X7.0X1.5	840	Gr								
Ⅱ20-25	25	B-5	Ⅱ	土 織	37.2X20.3X7.2	7000	And								

Ag+Sh:メノウ質頁岩

And:安山岩

Ch e:チャート

Gr:花崗閃緑岩

Gr+Sh:緑色片岩

Horn f:ホルンフェルス

Ob s:黒曜石

Rhy:流紋岩

Sa:砂岩

Se r:凝灰岩

Sh:頁岩

Tu+Sa:凝灰質砂岩



1. 発掘区近景 (南から)



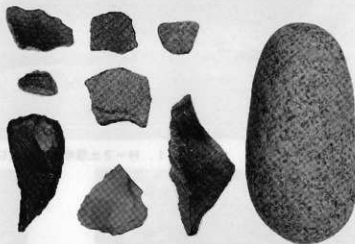
2. 調査状況 (南から)



2. H-1 完掘状況



1. H-1 セクション



3. H-1 出土の遺物



4. H-2 調査状況



1. H-2土層堆積狀況 (E-F)



2. HP-1 土器片出土狀況



3. 覆土 2 b 層集中出土土器檢出狀況



4. HP-24堆積狀況



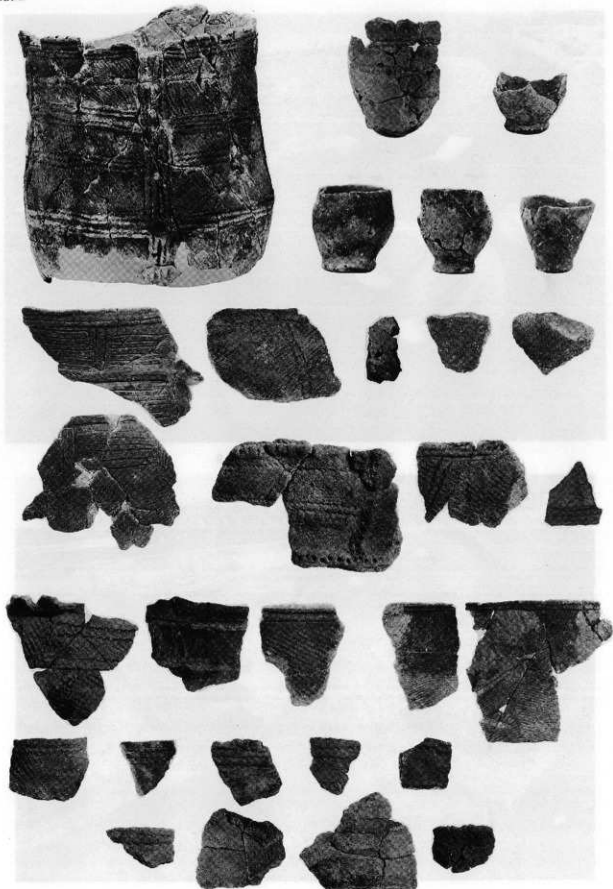
5. HP-7 磚出土狀況



1. H-2 HF-6・7・8



2. H-2 完 掘



1. H-2 出土土器 (1~27)



1. H-2 出土土器 (28~33)



2. H-2 出土の石鏃 (34~55)



3. H-2 出土の石槍 (56~63)



4. H-2 出土の石鏃 (64~66)



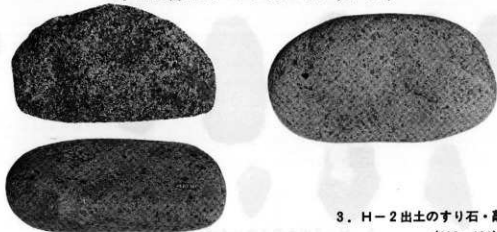
5. H-2 出土のスクレイパー (67~78)



1. H-2 出土のR・フレイク (79~86)



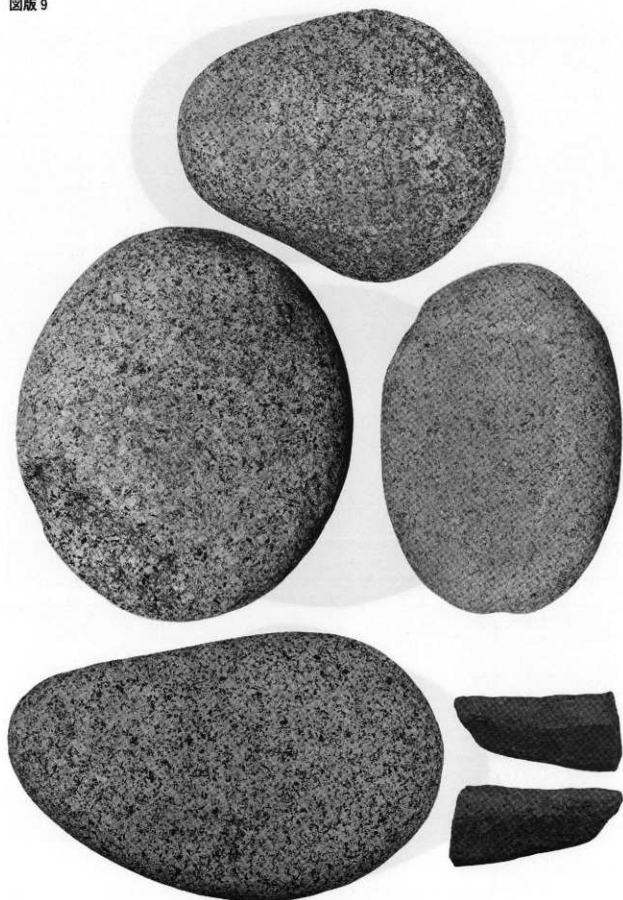
2. H-2 出土のU・フレイク・コア (87~101)



3. H-2 出土のすり石・敲石
(102~104)



1. H-2 出土の石皿・台石 (105~107)



1. H-2出土の石皿・台石・青竜刀形石器 (108~112)



1. P-1 堆積状況



2. P-1 完形土器出土状況



3. P-1 出土遺物



1. P-2 雜群出土狀況



2. P-2 堆積狀況



3. P-2 出土遺物



1. B-1区道物出土状况



2. B-1区集中出土土器



3. B-1区集中出土土器(图Ⅲ-4-5)



4. B-1区石棒出土状况



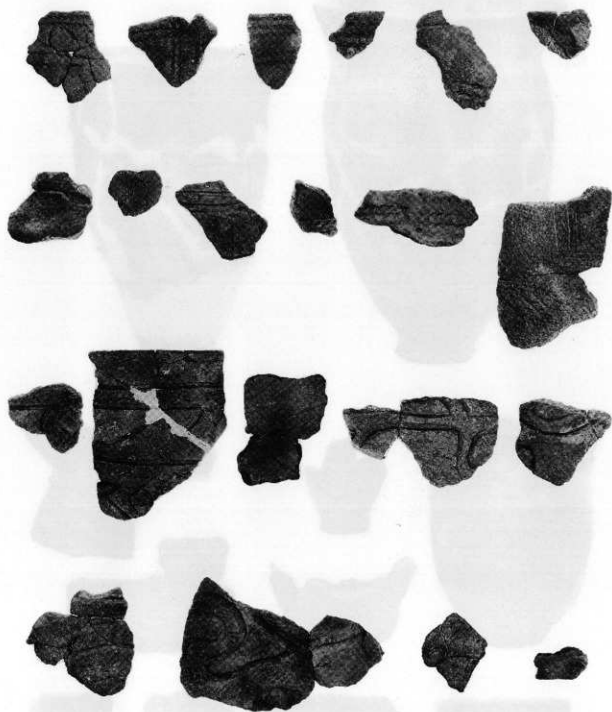
1. B-1区堆積状況 (A-B, 溝状落ち込み付近)



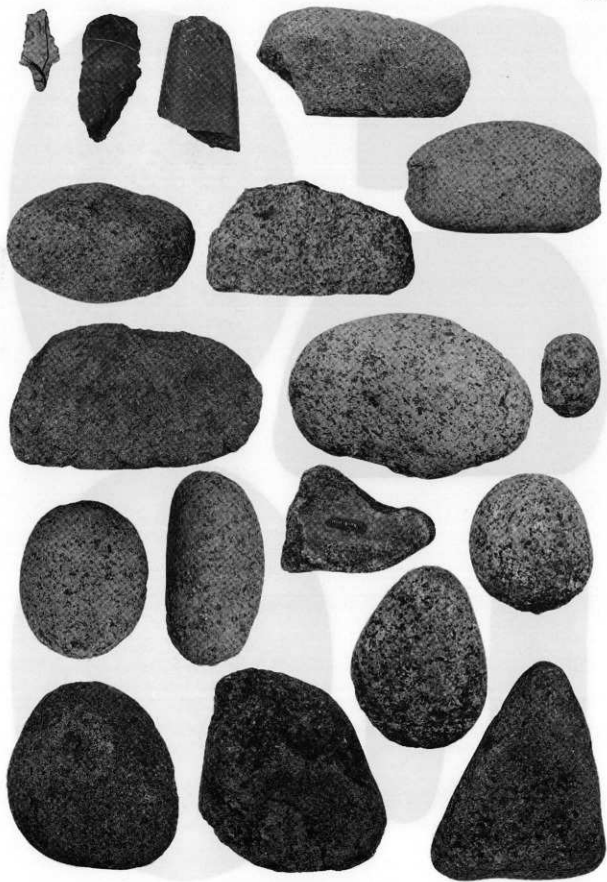
2. 0~1区出土の土器 (1~3)



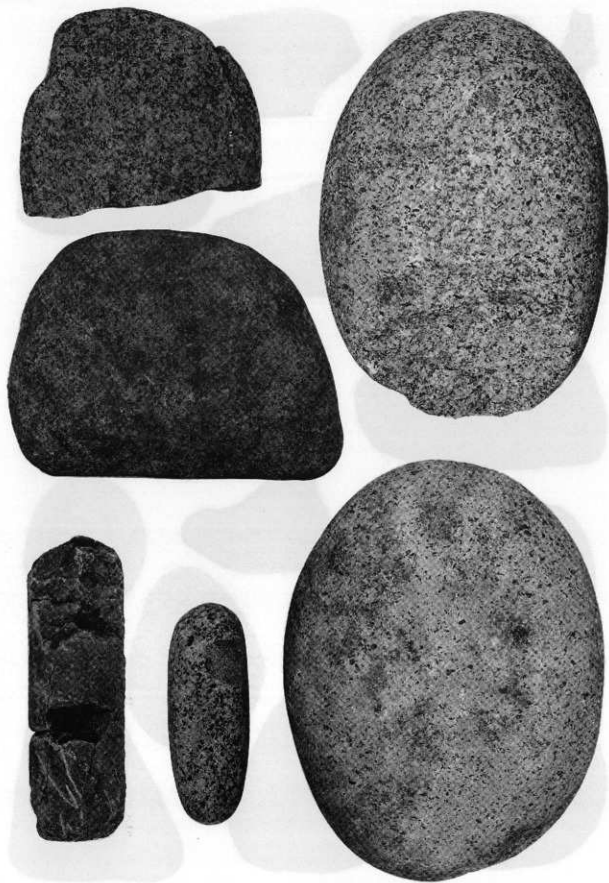
1. 0～1区出土の土器（4～14）



1. 0～1区出土の土器 (15～34)



1. 0～1区出土の石器(1～18)



1. 0～1区出土の石器 (19～24)



1. B-2・3区調査状況



2. B-3区掘上げ土堆積状況(A-B)

昭和50年10月20日撮影(中略)写真第1巻、2

昭和50年10月20日撮影(中略)写真第1巻、3



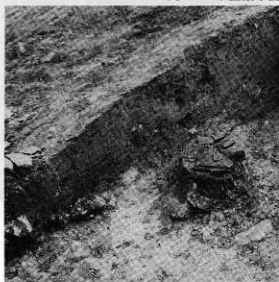
1. B-3区遺物出土状況



2. B-3・4区掘上げ土下遺物出土状況



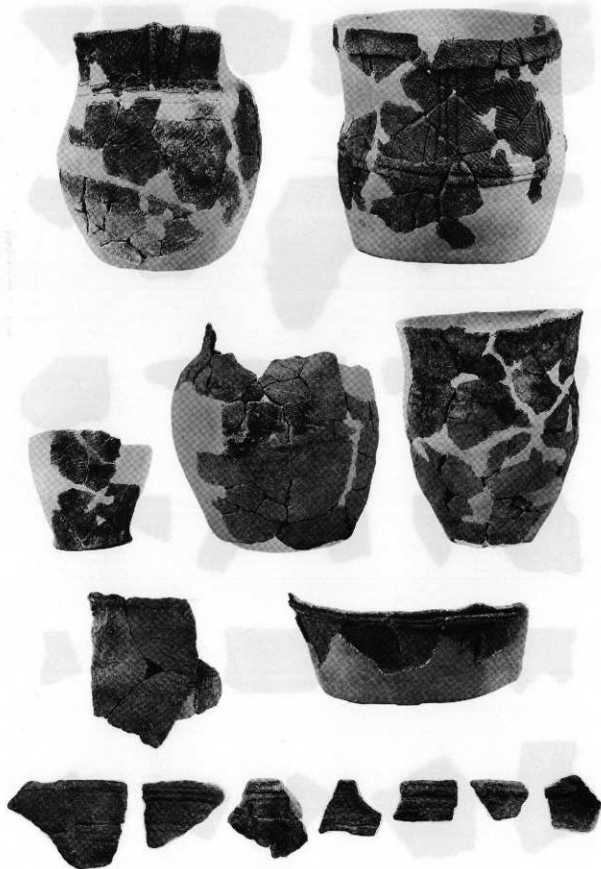
3. B-3区集中出土土器間堆積状況(C-D)



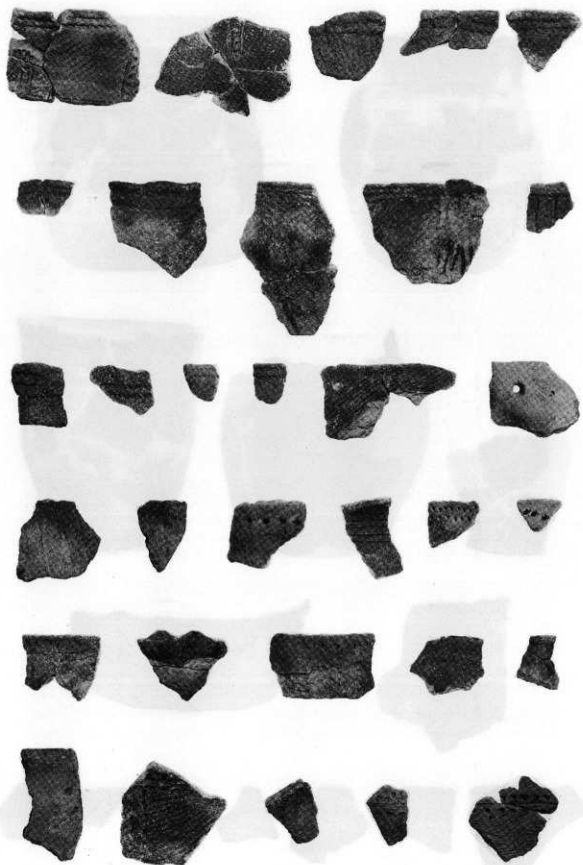
4. B-3区掘上げ土下遺物出土状況



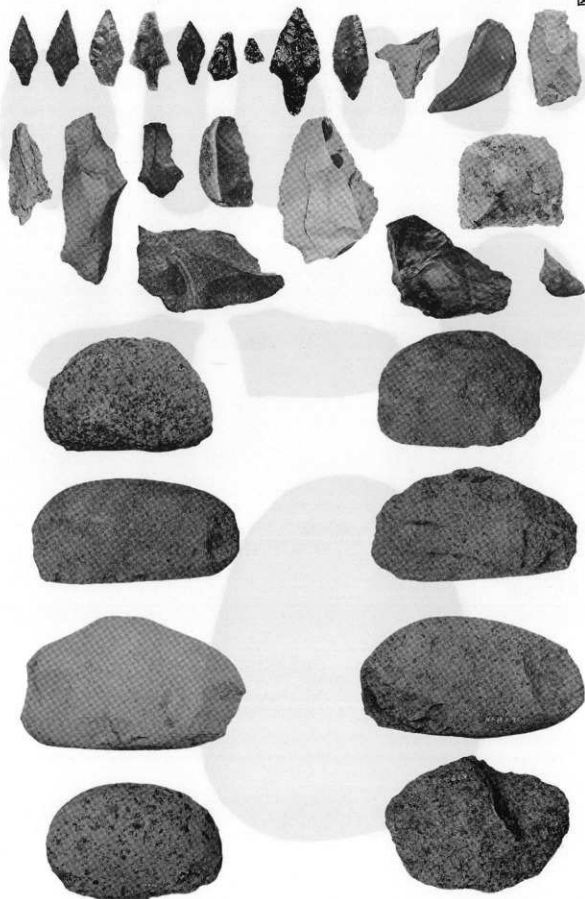
5. B-3区III層中位遺物出土状況



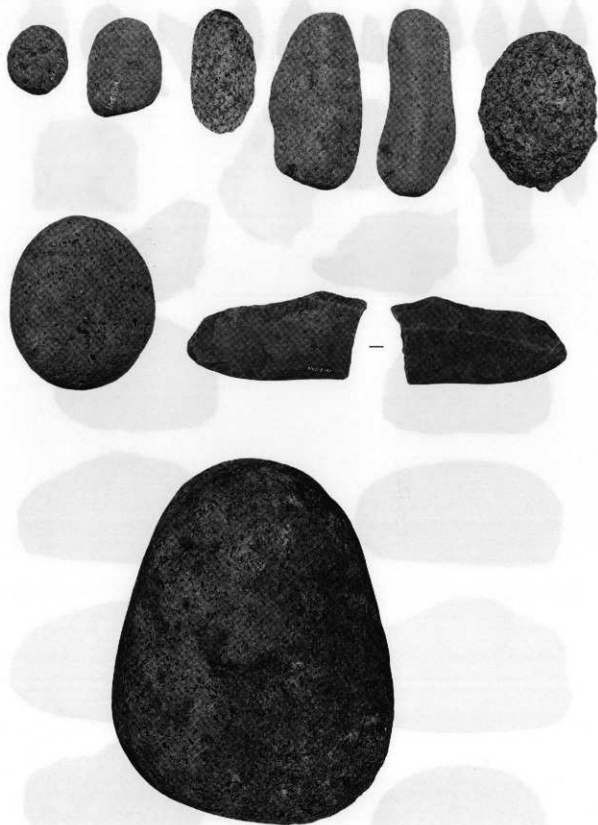
1. 2～4区出土の土器（1～14）



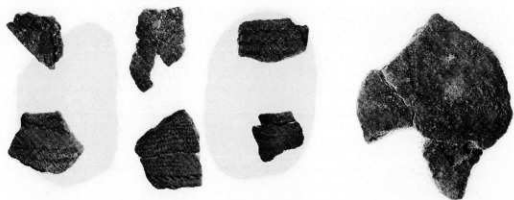
1. 2～4区出土の土器 (15～45)



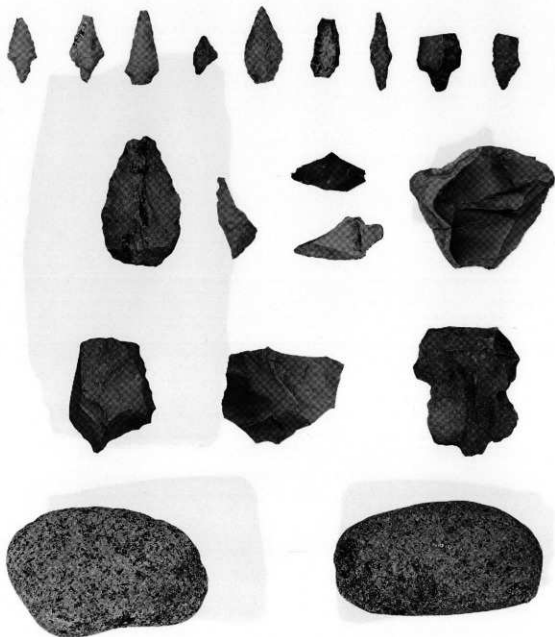
1. 2～4区出土の石器（1～29）



1. 2~4区出土の石器 (30~38)



1. B-5~6区出土の土器(1~7)



2. 5~6区出土の石器(1~20)



【1-1】 墓上の土器片（2-3）

1. 5～6区出土の石器（21～26）



1. 7～8区の調査状況



2. C-8区集中出土土器



3. A-7～B-7フレイク・チップ集中出土状況



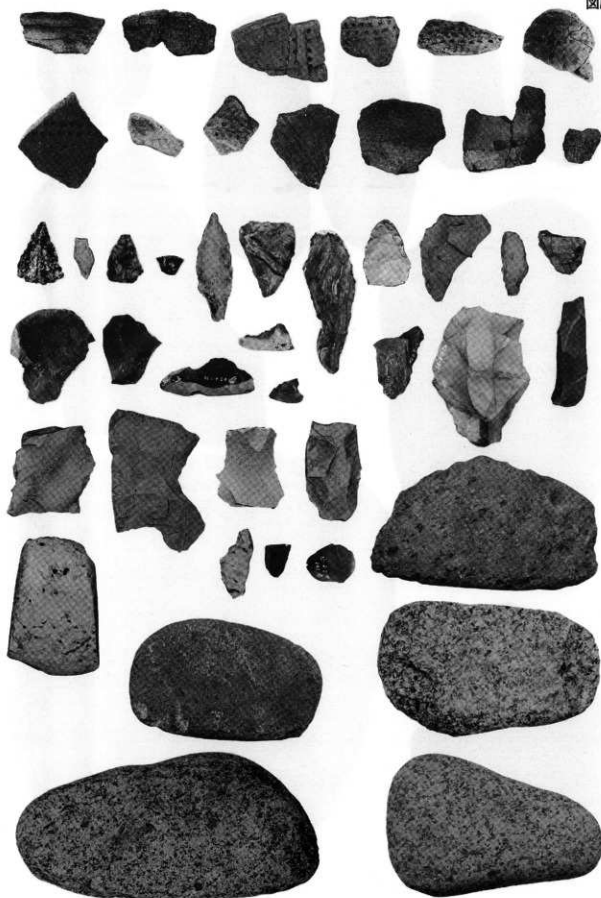
1. C-8～C-9セクション



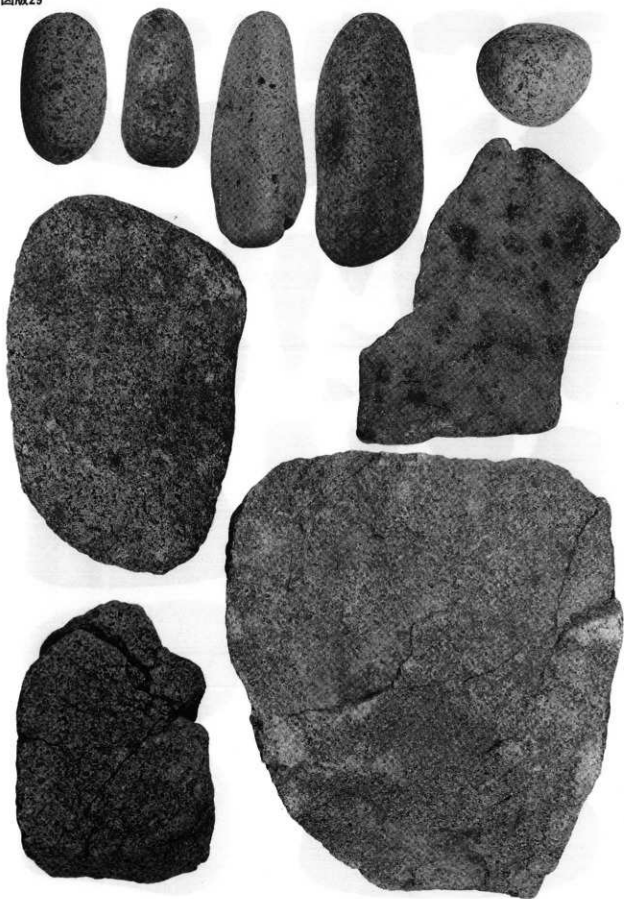
2. 掘り上げ土堆積状況 (B-ライン)



3. 7～8区出土の土器 (1～21)



1. 7～8区出土の石器(1～32)



1. 7～8区出土の石器 (33～41)

長浜2遺跡

～ 道道奥尻島線局部改良工事に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書 ～

編集・発行 奥尻町教育委員会
住 所 〒043-14 北海道奥尻郡奥尻町字奥尻
TEL 01397-2-3111
FAX 01397-2-2369
発行年月日 平成8(1996)年3月31日
印 刷 榊長門出版社印刷部
〒040 函館市日の出町11番13号
TEL 0138-52-2461